

# 神鑿

泉鏡太郎

青空文庫



ときふね  
朱鷺船

一

ぬれいろ 濡色をふく含んだあけぼの曙の霞すみなかの中から、すがた姿もふり振もしつとりとしたをんな婦を  
かた肩に、かたて片手を引ひつかつ担ぐやうにして、ひとり一人のわかもの青年がとぼくとあら頭  
はれた。

いろ 色がまつさを真蒼で、め目もちばし血走り、の伸びたかみ髪がひたひか額に被つて、かぶりもの冠物  
なしに、ほこりまみ埃塗れのうすよご薄汚れた、ところ／＼処々ボタン鈕のちぎ断れたせびろ背広を被

て、靴足袋もない素跣足で、歩行くのに蹠踉々々する。

其それが婦をんなを扶たすけ曳ひいた処ところは、夜よ一ひと夜よ辿たど々どしく、山路やまみち野道のみち、茨

の中なかを徻徻さまよつた落人おちうどに、夜よが白しろんだやうでもあるし、生命いのち懸げ

の喧嘩けんくわから慌あはたしく抜出ぬけだしたのが、勢せいが尽つきて疲果つかれはてたものら

しくもある。が、道行みちゆきにしろ、喧嘩けんくわにしろ、其その出でて来きた処ところ

が、遁にげるにも忍しのんで出でるにも、背後うしろに、村むら、里さと、松並木まつなみき、畷なはて

も家いへも有あるのではない。山やまを崩くづして、其その峯みねを余あました状さまに、昔むかしの

城趾しろあとの天守てんしゆだけ残のこつたのが、翼つばさを拈ひろげて、鷲わしが中空なかぞらに翔かける

か、と雲くもを破やぶつて胸毛むなげが白しろい。と同おなじ高たかさに頂いたゞきを並ならべて、遠近をちこち

の峯みねが、東雲しのゝめを動うごきはじめる霞かすみのうへに漾たゞよつて、水紅色ときいろと薄うすむら

紫さきと相あひ累かさなり、浅黄あさぎと紺こんじやう青むかひあと対向むかひあふ、幽かすかなに中なかに雪ゆきを被かつ

いで、みやうじやう明星なごりの余波ごの如くきら晃々かと輝くやのがある。……此この山  
んちゆう中をを、誰たれと喧嘩けんくわして、何処どこからかけ駈落おちして来こやう？ ……  
をんな婦はは、と云いふと、引ひ担つかがれた手ては袖そでにくるまつて、有ありや、  
なし無しや、片手かたてもふらくくと下さがつて、何なにを使たよるとも見みえず。臘らふに白お  
しろい粉こなした、殆ほとんど血ちの色いろのない顔かほを真向まむきに、ぱつちりとしたふたへま二重  
ぶた瞼くろめがちの黒目勝をのいつばいみひら一杯をに睜またいて、瞬またもしないまで。而そして  
をとこみ男のの耳みみと、其その鬢びんと、すれかほぐに顔ならを並なべた、一いつばうこづくり方はうではないから、婦をんなの背せが随ずい分ぶん高たかい。  
さ然さうかと思おもへば、帯おびから下したは、げつそりと風ふうが薄うすく、裙すそは緊しまつ  
あたが、ふうわりとして力ちからがはい入いらぬ。踵かかとが浮ういて、恚かう、上うへへ担かつぎ  
あ上あげられて居あるさうな様やう子す。

ふたり

二人とも、それで、やがて膝の上あたりまで、乱れかゝつた枯

れあし おほ 蘆で蔽はれた上を、又其の下を這ふ霞が隠す。

もつとみち 最も路のない処を辿るのではなかつた。背後に、尚ほ覚果てぬ

あかつゆめまぼろしのこ 暁の夢が幻に残つたやうに、衝と聳へた天守の真表。差懸

つたのは 大手道で、垂々下りの右 左は、半ば埋れた濠であ

る。

空濠と云ふではない、が、天守に向つた大手の跡の、左右

に連なる石垣こそまだ高いが、岸が浅く、段々に埋れて、土

堤を掛けて道を包むまで蘆が森をなして生茂る。然も、鎌は長

に入れぬ処、折から枯葉の中を透いて、どんよりと霞の溶けた水

の色は、日の出を待つて、さま／＼の姿と成つて、其から其へ、

ふわくと遊びに出る、到る処の、あの陽炎が、こゝに屯したやうである。

其の蘆がくれの大手を、婦は分けて、微吹く朝風にも揺らるゝ風情で、男の振つくともにも振ついて下りて来た。……若しこれで声がないと、男女は陽炎が頭はず、其の最初の姿であらうも知れぬ。

が、青年が息切れのする声で、言ふのを聞き。

「寐るなんて、……寐るなんて、何うしたんだらう。真個、気が着いて自分でも驚いた。白んで来たもの。何時の間に夜が明けたか些とも知らん。お前も又何だ、打つてぐも揺つてぐも起せば可いのに——しかし疲れた、私は非常に疲れて居る。お前に分

れてから以来、まるで一目も寐ないんだから。……」  
とせい／＼、肩を揺ると、其の響きか、震へながら、婦は眞黒な髪の中に、大理石のやうな白い顔を押据えて、前途を唯熟と瞻る。

## 二

「考へると、能くあんな中で寐られたものだ。」  
と男は尚ほ半ば呟くやうに、  
「言つて見れば敵の中だ。敵の中で、夜の明けるの知らなかつたのは実に自分ながら度胸が可い。……いや、然うではない、

一時死んだかも分らん。

然うだ、死んだと言へば、生死の分らなかつた、お前の無事な顔を見た嬉しさに、張詰めた気が弛んで落胆して、其つ切に成つたんだ。嗚お前は、待ちに待つた私と云ふものが、目の前に見えるか見えないに、だらしなく、ぐつたりと成つて了つて、どんなにか、頼みがひがないと怨んだらう。

眞個、安心の余り氣絶したんだと断念めて、許してくれ。寐たんぢやない。又、何うして寐られる……実は一刻も疾く、此の娑婆へ連出すために、お前の顔を見たらば其の時！壇を下りるなどは間弛ツこい。天守の五階から城趾へ飛下りて歸らう！其の意気込みで出懸けたんだ、實際だよ。

が、彼の頂上から飛だ日には、二人とも五躰は微塵だ。五躰が微塵ぢや、顔も視られん、何にも成らない。然うすりや、何を救ふんだか、救はれるんだか、……何を言ふんだか、は、は、は、

とりとと取留めもなく笑つた拍子に、草を踏んだ爪先下りの足許に力が抜けたか、婦を肩に、恋の重荷の懸つた方の片膝をはたと支く、トはつと手を離すと同時に、婦の黒髪は頬摺れにづりりと落ちて、前伏に、男の膝へ背が偃つて、弱腰を折重ねた。

「あつ！」と慌しく、青年は其の帯の上へ手を掛けて、  
 「危い。あゝ、何て事だ。——お浦、」

と言つたは婦の名で。

「怪我はしないか、何処も痛めはしなかつたか。可、何ともない

。」

婦が、あ、とも言はず、声の無いのを、過失はせぬ事、と頷

いて、さあ、起たうとすると些とも動かぬ。

「起たないか、こんな処に長居は無益だ。何うした。」

と密と揺ぶる、手に従つて揺ぶれるのが、死んだ魚の鱭を摘んで、水を動かすと同じ工合で、此方が留めれば静と成つて、浮きも沈みもしない風。

はじめに驚いた色して、

「何うかしたか、お浦。はてな、今転んだつて、下へは落さん、

怪我も過失も為さうぢやない。何だか正体がないうだ。

矢張り一時に疲労が出たのか。あゝ、然う言へば前刻から人にば

かりものを言はせる。確乎してくれ、お浦、何うしたんだ。」

と今は慌しく成つた。青年は矢庭に頸を抱き、膝なりに背を向

ふへ捻廻はすやうにして、我が胸を前へ捻つて、押仰向けた婦

の顔。

今も目は塞がず、例の眸つて、些の顰むべき悩みも無げに、額

に毛ばかりの筋も刻まず、美しく優しい眉の展びたまゝ、瞬もしな

いで、其のまゝ見据えた。

其の顔と、此の時、引返した身動きに、翻つた棲の乱れに、

雪のやうに頭はれた円い膝頭……を一目見るや、

「うむ、」と一声、と枯蘆に腰を落して、殆んど痙攣を起した如く、足を投出してぶる／＼と震へて、

「違つた／＼。造りものだ、拵へものだ、彫像だ。昨夜持つて行つた形代だ、こりや、……おゝ。」

戦く手に、婦の胸を確乎と圧せば、膨らかな襟のあたりも、掌に堅く且つ冷たいのであつた。

「何だ、又これを持つて帰るほどなら、誰が命がけに成つて、這麼ものを拵へやう。……誑しやあがつたな！ 山猫め、狐め、

野狸め。」

と邪慳に、胸先を取つて片手で引立てぎまに、渠は棒立ちにぬつくり立つ。可憐や艶麗な女の姿は、背筋を弓形、裳を宙

に、縊くびられた如ごとくぶらりと成なる。

## 三

青わかもの年は半はん狂き乱らんの躰ていで、地ぢ韜だを踏ふんで齒は嚙がをした。

「おのれえ、魔までも、鬼おにでも、約やく束そくを違たがへる、と言いふ不ふ都つ合があるか、何なんと言いつた、何なんと言いつた。」

と詰なむるが如ごとくに掠かすれ声こゑして、手てを握にぎつて、空くうを打うつて、天てん守しの屋や根ねを睨にらんで喚わめいた。大お手ほ筋てを下お切りつた濠ほ端りに——まあだけ明あ果け

てない、海うみのやうな、山さん中ちゆうの原はらを背う後しろにして——朝あ虹さに鱗うろこ

したやうに一い方つぱうの谷たにから湧わき上ある向むふ岸かなる石い垣が越こしに、其その

てんしゆ 天守に向つて喚く……

わめ 喚くが、しかし、一騎朝菟で、敵を罵る勇ましい様子はなく、横歩行に、ふらくして、前へ出たり、退つたり、且つ蹠踉めき、且つ独言するのである。

「畜生、人の女房を奪つた畜生、魔物に義理はあるまいが、約束を違へて済むか、……何と言つて約束した——  
 婦の彫像を拵へる、其の形代を持つて来い。お浦を返すと言つたのを忘れたか、忘れたのか。」  
 と其の握拳で、己が膝を礎と打つたが、力余つて背後へ蹠踉ける、と石垣も天守も霞に揺れる。

「待てよ。雖然、自分の製作へた此の像だ、これが、もし価値

に積つて、あの、お浦より、遙に劣つて居たら何うする。まるで  
 取替へる価がないと言へば其までだ、——あゝ、其がために、旧  
 とどほ  
 通りお浦を隠して、此の木像を突返したのか。己は夢中  
 で、此を恋しい婦だ、と思つて、うかく抱いて返つたのか、然  
 うかも知れん。

其では、劣作だと言ふのだな、駄物だ、と言ふのだな、劣  
 作か、駄物か、此奴。——

と首を引向け胸に抱いて、血走つた目で屹と其の顔を。

「己が、此の心も知らずに、けろりとして済ました面よ。おのれ  
 石でも、己が此の心を汲んで、睫毛に露も宿さないか。霞にも曇  
 らぬ瞳は、蒟蒻玉同然だ。——其も道理よ、血も通はない、

みやく  
 脉みやくもない、魂たましひのない、たかゞ木屑きくづの木像もくざうだ。」

と興きよう覚ざめ顔がほして、天守てんしゆを仰あふいで、又また俯うつむ向き、

「何なんだ、これは、魔物まものが言いひさうな事ことを己おれが言いふ、自分じぶんが言いふ、

われわが口くちので詈しるな。おゝ、自然しぜんと敵てきの意いを体たいして、自みづから、罵ば

倒たうするやうな木像もくざうでは、前方さきが約やく束そくを遂とげんのも無理むりはない

……駄物だもの、駄物だもの、駄物だもの、

と二三さんしや舎やを避さける足取あしどりで、たぢくくと後退あとずさりして、

「さあ、恚かうなれば、お浦うらの紀念かたみの方ほうが大事だいじだ。よくも、おのれ、

ぬくくと衣服きものを着きた。」と言いふく、撈むしるが如ごとく衣紋えもんを開ひらいて帯おび

をかなぐり、袖そでを外はづすと、柔やはらかな肩かたが下さがつて、二にの腕うでがふらりと

垂たれる。双さうの玉たまの乳房ちぶさにも、糸いと一ひと条すぢの綾あやも残のこさず、小脇こわきに抱いだく

や、此この彫刻家てうこくかの半身はんしんは、霞かすみのまゝに山椿やまつばきの炎ほのほが※と搦からんだ風情ふせい。

其その下襲したかさねの緋鹿ひがのこ子こに、足手あしての雪ゆきが照映てりはえて、女をんなの膚はだえは朝あさぎくら、桜をんな、白雲しらくもの裏越うらこす日ひの影かげ、血ちも通かよふ、と見る内みうちに、男をとこの顔かほは蒼あをく成なつた。——女をんなの像ざうの片腕かたうでが、肱ひぢの処ところから、切れ目めあか赤あかう、さゝら立だつて折をられて居ゐた。

「わツ、」と叫さけんで、其その咽喉のどを掴つかんだまゝ、投なげ附つけやうとしをんなざうて振拳ふりあげた手ての、筋すぢが釣つつて棒ぼうの如ごとくに衝つと挙あげると、女をんなの像は鶴つるのやうに、ちらくくと髪かみ黒くろく、青年わかものの肩かた越こしに翼つばきを乱みだひるがへつた。

が、其そのまゝには振飛ふりとばさず。濠ほりを越こして遥はるかな石垣いしがきの只ただな

中へも叩きつけさうだつた勢も失せて——猶予ふ状して……ト  
 下を見る足許を、然まで下らず、此方は低い濠の岸の、すぐ灰  
 色の水に成る、角組んだ蘆の上へ、引上げたか、浮べたか、水  
 のじとくとある縁にかけて、小船が一艘、底つた形は、処が  
 ら名も知れぬ大なる魚の、がくり、と齒を噛んだ白髑髏のやう  
 なのがある。

## 四

処が其の小船は、何の時か、向ふ岸から此岸へ漕寄せたものゝ  
 如く、艫を彼方に、舳を蘆の根に乗据えた形に見える、……何処

の捨すてをぶ小船ねにも、恚かぎやくもやう逆に攪かつたと言いふのは無なからう。まだ變かはつた事ことには、舷ふなばを霞あすみつが包つんで、ふつくり浮うきあが上あつたやうな艫ともに留とまつて、五位ごゐさぎ鷺さぎが一羽いちは、頬ほ冠かぶりでも為しさうな風ふうで、のつと翼つばさを休やすめて向むかふむきにチヨンと居ゐた。

城しろ趾あの此この辺あたりは、人里ひとさとに遠とほいから、鷄にはとりこゑの聲こゑ、鴉からすこゑの聲こゑより、先まづ五位ごゐさぎ鷺さぎの色いろに夜よが明あけやう。其それに不ふ思し議ぎは無ないが、如何いかに人ひとを恐おそれねばとて、直すぐ其その鷄冠とさかの上うへで、人ひと一人ひとり立たち騒さわぐ先刻さつきから、造つく着りけた躰ていにきよとんとして、爪つ立ただてた片脚かたあしを下おろさうともしなかつた。

此この船ふねの中なかへ、どさりと落おつた。

女をんなの像ざうは胴どうの間まへ仰あむ向むけに、肩かたが舷ふなべりにかゝつて、黒くろ髪かみは蘆あしに

挟まり、乳の下から裾へ掛けて、薄衣の如く霞が靡けば、風もなしに柔かな葉摺れの音がそよら〜。で、船が一揺れ揺れると思ふと、有繫に物駭きを為たらしい、艫に居た五位鷺は、はらりと其の紫が〜つた薄黒い翼を開いた。

開いたが、飛びはしない、で、ばさりと諸翼搏つと斉しく、俯向けに頸を伸ばして、あの長い嘴が、水の面へ衝と届くや否や、小船がすらく〜と動きはじめて、音もなく漕いで出る。

見るものは呆れ果て〜、どかと濠端に腰を掛けた。

五位鷺の働くこと。船一艘漕ぐなれば、蘆の穂の風に散る風情、目にも留まらず、ひらく〜と上下に翼を煽る。と船の方は、落着済まして夢の空を迂るやう、……やがて汀を漕ぎ離す。

蘆あしの枯かれ葉はをぬら／＼と蒼あをぬめりの水みづが越こして、浮うき草ぐさの樺かば色いろ  
 まじりに、船ふな脚あしが輪わに成なる頃ころの、五ご位ゐ鷺さぎの搏はうちやう。又また一ひとしき  
 り烈はげしく急きふに、滑なめかな重おもい水みづに響ひびいて、鳴なり渡わたるばかりと成なつた  
 が。

余あまりの勞はたら働き、羽はねの間あひだに垂たら／＼と、汗あせか、※か、羽は先さきを伝つたつて、  
 水みづへほた／＼と落おちるのが、血ちの如ごとく色いろづいて真ま赤かに溢あふれる。：

「火ひの粉こだ、火ひの粉こだ。」と濠ほり端ばたで、青わか年ものが驚おどろき叫さけんだ。  
 果はたして血ちの汗あせを絞しぼる、と見みえたは、翼つばさを落おちる火ひであつた。  
 「飛とばつせえ船ふねの人ひと、船ふねの人ひと、飛とばつせえ、飛とび込こむのだえ！」  
 と野の良ら調でう子しの高たか声こゑをあげて、広ひろ野の霞かすみに影かげを煙けぶらせ、一いち目もく散さん

に駆附けるものがある。

驚駭おどろきのあまり青年わかものは、殆ど無意識ほとんむいしきに、小脇こわきに抱いた、其その一襲ひとかさねの色衣いろぎぬを、船ふねの火ひに向つて颯さつと投なげる、と水みづへは落おちたが、其処そこには届とどかず、朱しゆを流ながしたやうに火ひの影かげを宿やどす萍うきに漂たぶて、袖そでを煽あふり、裳もすそをひらいて、悶もだへ苦しむが如ごとくに見みえつゝ、本ほんぞ尊んたる女をんなの像ざうは、此こゝの時ときは早く黒くろ煙けむりに包つまれて、大おほき朱鷺ときの形かたちした一いち団だんの燃もえ立たつ火ひが、一いち羽は倒たふさに映うつつて、水み底なぞに齊ひとしく宿やどる。舷ふなばたにも炎ほのほが擲からんだ。

「えゝ！ 飛込とびこめい、水みづは浅あさい。」

と此こゝの時ときは濠ほり端ばたへ駆かけつけたは、もつぺと称となへる裁たつ着けやうの股もも引きを穿はいた六十むそじ余あまりの背せ高たかい老おやぢ爺ぢで、腰こしから下したは、身からだ躰たが二ふたつ

あるかと思ふ、おほき、おほき、あさぶくろ、大な麻袋を提げたのを、脚と一所に飛ばして来て、

「あゝ、埒あかぬ。」と呟いて落胆する。

とも、さきほのほき、船の鷺の炎は消えて、船の板は、ぼらりと開いた。一つ一つ、幅広い煙を立て、地獄の空に消えて行く、黒い帆のやう、――女をんなの像は影も失うせた。

「やれ、後れた。水は浅いで、飛込めば助かつたに。――何と申さうやうもない、旦那がお連の方でがすかの。」

わかもの、青年は肩を揺つて、唯大息を吐くのであつた。

「飛んだ事ぢや、こんな怪しげな処へござつて、素性の知れぬ船ふねに乗ると云ふ法があるかい。お剩にお前様、五位鷺の船頭

ぢや……狸たぬきの拵こぎへた泥船どろぶねより、まだくあぶな危あぶないのは知しれた事ことを。」

## 五

目めが覚さめた、と言いふでもなしに、少しば時らくすると、青わか年ものの瞳ひとみは稍や定きたまつた。

「何なに、心しん配ぱいには及およばん、船ふねに居あたのは活いきた人にん間げんでは無ないのだから。」

木き樵こり躰ていの件くだんの老ち爺ぢいは、没もつ怪けな顔かほして、

「や、活いきた人にん間げんで無なうて何なんでがす……死し骸がいかね、お前め様えさま。」

「死し骸がいは酷ひどい。……勿もち論ろん、魔ま物ものに突つ返かへされて、火くわ葬さうに成なつた

奴だから、死骸も同然なものだらう。ものだらうが、私の気ぢや死骸ではなかつた。生命のある、価値のある、活きたものゝ積りだつた。老爺さん、今のは、彼は、木像だ、製作つた木彫の婦なんだ。」

「木彫の？ はて、」  
と腕を組んで、

「えい、其は又、変つたもんだね。船と一所に焼けたものは、活きた人で無うて、私先づ安堵をしたですが、木彫だ、と聞けば尚魂消る……豪え見事な、宛然生身のやうだつけの。背後の野原さ出て見た処で、肝玉の宿替した。——あれ一面のかすみなか、火と煙に包まれて、白い手足さびいくゝ為ながら、濠

の石垣へ掛けて釣し上がるやうに見えたゞもの。地獄の釜の蓋  
 を取つて、娑婆へ吹上げた幻燈か思ふたよ。

尋常な、

婦の人ほどに見えつ

け。等身のお祖師様もござ

ら

れば丈六の弥陀仏も居さつしやる。

——これ

人形は、は

い、玩具箱ウ引転返した中からばかり出るもんではねえで、

其の、見事な不思議は無いだ

が、心配するな木彫だ、と言は

つしやる、……お前様が持つて来て、船の中へ置かしたかな

。

「何、打棄つたんだ。」と青年は口惜しさうに言つた。

「打棄らしつたえ、持重りが為たゞかね。」

とけろりとして、目を離れた白い眉をふつさり揺る。

青年わかものはじりくと寄よつた。

「で、老爺ぢいさん、何かなに、君きみは活いきた人間にんげんで無ないから安堵あんどしたと言いつたね、今の船いまふねには係かかりあひ合あひでもある人ひとか。」

「係かかりあひ合あひにも何なんにも、私船わしふねの持主もちぬしでがすよ。」

「此この、魔物まもの。」

と青年わかものは、然知さしつた見得みえに、後退あとずさりしながら身構みがまへして、

「甦なぶるな。人ひとが生いき死しの間あひだに彷徨さまよふ処ところを、玩弄おもちゃにするのは残ざんこ

酷くだ。貴様きさまたちにも釘くぎの折をれほど情なさけが有あるなら、一思ひとおもひに殺ころし

て了しまへ。さあ、引裂ひきさけ、片手かたてを挽もげ……」とはたと睨にらむ。

「旦那だんな々々、」

「何なにが旦那だんなだ。捕虜ほりよと言いへ、奴隸どれいと呼よべ、弱じやくしや者あざけと嘲あざけれ。夢ゆめか、

現か、分らん、俺は迎も貴様達に抵抗する力はない。残念

だが、貴様に向ふと手足も痺れる、腰も立たん。

が、助け出す筈だつた女房を負つてなら……麓の温泉ま

では愚な事、百里、二百里、故郷までも、東京までも、

貴様の手から救ふためには、飛んでも帰るつもりで居た。彫像

一個抱いて歩行くに持重りがして成るものか！……

何故、様を見る、可気味だ、と高笑ひをして嘲弄しない。

俺が手で棄てたは棄てたが、船へ彫像を投げたのは、貴様が蹴

込んだも同然だい。「と握つた拳をぶる／＼震はす、唇は白く

戦く。

老爺は遺瀨無い瞬して、

「芸げいもねえ、譚あだけた事ことを言いはつしやるな。成なる程ほど、船ふねを焼やいたは

悪わるいけんど、蹴け込んだとは、何なんたる事ことだの。」

「お、船ふねを焼やいたは貴き様さまだな。それ見みろ、それ見みろ。汝うぬ、魔ま物もの。

山やま猫ねこか、狒ひ々々か、狐きつねか、何なんだ！ 惡あく魔ま、女によう房ぼうを奪うばつた奴やつ。

せめて、俺おれに、正しやう体たいを見みせてくれ。一いつ生しやうの思おもひで出でだ。さ

あ、のつぺらばうか、目め一ひとつか、汝おの其れの真ま目まくとした与よ一いち平へい

面らは。眉まゆなんぞ真ま白しろに生はしやがつて、分ふん別べつらしく天あ窓たまの禿は

げたは何なに事ごとだ。其その顛はち巻まきを取とれ、恍とぼ氣けるな。」と目めが逆さか立だつ

て、又またじりと詰つめ寄よる。

老ぢい爺いは己おのが面つらを、ペろりと一ひとつ撫な下でげた。

## 六

いや、様子やうすが如何いかにも、我が顔かほながら不気味ぶきみさうに見みえた。――  
 眉まゆを聳ひそめて、

「ま、ま、少わえ旦那だんな、落着おちつかつせえ、氣きを静しづめさつせえまし。：

魔物まものだ、鬼おにだ喚わめいて、血相けつさうを變かへてござる……何どうも見た處みどころ、

未まだ此この上うへに逆のぼせあが上あらつしやるなよ――何どうやら取とり逆のぼせ

て居ゐさつしやるが、はて、

と上うへ下した、天守てんしゆを七分しちぶ、青年わかものを三分さんぶに見較みくらべ、

「もの、此處こゝさ城趾しろあとの、お天守てんしゆへ上あらつしやりは為しねえかの

」

「為ねえかぢや無からう。昨夜貴様に何処で逢つた？」

「先づ、む、其で分つた。」

「分つたか。いや昨夜は失礼したよ、魔物の隊長。」

「はて、迷惑な、私う魔物だと思はつしやる。」

「魔物で無くて、魔物で無くて、汝、五位鷲が漕出して、濠の中

で自然に焼ける……不思議な船の持主が有るものか。」

「成程、何も仔細を知らつしやらぬお前様は、様子を見ても、

此処等の人ではござらつしやらぬ。」

「那樣な事を言つて何うする、貴様は奪つて行つた俺の女房

の、町処まで知つて居るでは無いか。」

「急かつしやるな。此の山裾の、双六温泉へ、湯治に来さ

つせえた人だんべいの。」

「知れた事を、貴様がお浦を掴出した、……あの旅籠屋に逗留して居る。」

「そんなら、はい、無理はねえだ。」

と莞爾して、草鞋の尖で向直った。早や煙の余波も消えて、浮脂に紅蓮の絵も描かぬ、水の其方を眺めながら、

「あの……木葉船はの、丁と自然に動くでがすよ……土地のものは知つとります。で、鷺の船頭と渾名するだ。それ、見さした通り、五位鷺が漕ぐべいがね。」

「漕ぐのは鷺でも鳶でも構はん。漕がせるのは人間ぢや無いのだらう。」

余計なことを、と投げ調子。

「いんや、お前様、お天守の、」

と声を密めて、

「……魔の人が為業なら、同一鷺が漕ぐにして、其の船は光を放つて、ふわ／＼雲の中を飛行するだ。

……たか／＼人間の仕事だけに、羽の有る船頭を使ふても、水の上を浮いて行くだよ。何も希有がらつしやるには当らぬ。あの船は、私が慰楽に造るでがす。」

「え、拵へる、而して魔物では無いと言ふのか。」

「随意にさつしやりませ。すつとこ被りをした天狗様があつて成ろかい。気を静めさつしやるが可い。嘘だ思ふなら、退屈せ

ずよつかに四日五日、私わしが小屋こやへ来て対向さしむかひに座すはつてござれ、ごしくこつくと打ぶつた敲たいて、同一おなじ船ふねを、主ぬしが目めの前まへで拵こぎへて見みせるだ。

「ふん、」と返事へんじを呑のみ込んだが、まだ其その息いきは発喘はすむのであつた。

「何どうして作る。」

「何どうして作る？ …… つひ一寸ちよつくら手真似てまねで話はなされるもんでは

ねえ。此この胸むねに、機関からくりを知しつとります。」

「機関からくりか。」

「危険けんのんな機関からくりだで、小ちひさく拵こぎへて、小兒こどもの玩弄おもちゃにも成なりま

しねえ。が、親おや譲ゆづりの秘伝ひでんものだ、はッはッはッ、」

と浮世うきよを忘わすれた笑わらひを行やる。

「お待ち、親譲りの秘伝と言ふと……」

と言ひ方は迫つたが、声の調子は大分静まる。

「何も、家伝の秘法の言ふて、勿体を附けるでねえがね……祖

父の代から為た事を、見やう見真似に遣るでがすよ。」

「其ぢや、三代船大工か。」

と些少落着いて青年が聞いた。

雪枝、菊松

## 七

「何なんの、お前めえさま様、見みさる通とほり二十八方にじふはつぱう仏子ぶし柑かんの山やま間あひぢや。  
 木きを伐きりだだいて谿たに河がはへ流ながせば流ながす……駕籠かごの渡わたしの藤ふぢ蔓づるは編あむ  
 にせい、船ふな大工だいくは要いりましねえ。——私わし等らが家うちは、村むら里さと町の  
 祭まつり礼だしの花にんぎ車やう人形でく。坊ぼうも拵こしらへれば、内ない職しよくにお玉たま杓やく子し  
 も売うつたでがす。獅し子が頭しら、閻えん魔まさ様さま、姉あね様さまの首くびの、天てん狗ぐの面めん  
 座ざ頭とうの顔かほ、白おしろ粉ひも塗ぬれば紅べにもなする、青あを絵ゑ具ぐもべつたりぢや。  
 そんなものさ、甘あま干ぼしの柿かき見みたやうに、軒のきへぶら下さげて売うりま  
 しつけ、……水すゐ損そん、山やま拔ぬけ、御ご維あしん新しん以この来かた、城しろ趾あとへ草くさが生はへ  
 る、濠ほりが埋うまる、村むらも里さとも無なくなりました処ところへ、路みちが変かはつて、旅た

びびと 人も通らぬけえに、根つから家業に成らんでの、私ら、木挽木  
 樵も遣る。温泉場に普請でも有る時には、下手な大工の真似も  
 する。閑な日には鱒を掬つて暮すだが、祖父殿は、繁昌で  
 の、藩主様さ奥御殿の、お雛様も拵へさしたと……  
 その、おんぢいどん、山伏の姿した旅の修業者が、道陸神  
 の傍に病倒れたのを世話して、死水を取らしつけ……其の修  
 業者に習つた言ひます。  
 ろくろくび 轆轤首さ、引窓から匆ねて出る、見越入道がくわつと目  
 を開く、姉様の顔は莞爾笑ふだ、——切支丹宗門で、魔法  
 を使ふと言ふて、お城の中で殺されたとも言へば、行方知れずに  
 成つたとも言ふ。

はじめは、不思議な機関を藩主様御前で見せい言ふて、お城へ召されさしけえの、其時拵へたのが、五位鷺の船頭ぢや。

それ、船を浮べたのは、矢張此の濠。」

と言ひかけて、水には臨まず、却つて空を指した老爺の指は、一の峰と相對つて、霞の高い、天守の棟に並んで見えた。

「これは、其の三重濠で、二の丸の奥でがす。お殿様は、継上下の侍方、振袖の腰元衆づらりと連れて出て御見物ぢや。

『町人、此の船を何うするな。』

『御意にござります。舳に据えました其の五位鷺が翼を帆に張り、くちばしちかつかまつ嘴を舵に仕りまして、人手を藉りませず水の上を渡りまする。』

と申上まをしあげたて。……なれども唯たゞ差置さしおいたばかりでは驚さぎが翼つばを開ひらかぬで、人ひとが一人ひとり乗のる重量おもみで、自然おのづから漕こいで出でる。……一いつ体たいが、天てん上じやう界かいの遊ゆ山さん船ふねに擬なぞらへて、丹たん精せい籠こめました細さい工いくにござるで、御お齊かしづ眉きの中なかから天てん人にんのやうな上じやう藤らう御お一ひと方かた、と望のぞんだげな。

当時たうじ飛とぶ鳥とりも落おちると言いふ、お妾めかけが一人ひとり乗のつて出でたが、船ふねの焼や出けだしたのは、主ぬしが見みさしつた通とほりでがす。——其その妾めかけと言いふのが、祖おん父ちい殿どんの許いひ嫁なづけで有あつたとも言いへば、馴なじ染みだとも風説うはしたゞね。

処ところで、綾あや錦にしきへ燃もえつく時とき、祖おん父ちい殿どんが手てを拏あげて、『飛とび込こめ、助たすかる。』

と我鳴らしつけが、お妾は慌てもせず、珠の簪を抜くと、舷から  
 すみちうなげこ  
 水中へ投込んで、颯と髪のを捌いたと思へ。……洞の間へ突  
 伏して動かぬだ。

裸で飛込んだ、侍方、船に寄り寄つたれども、燃え立つ  
 ほのほて  
 炎で手が出せぬ。漸との思ひで船を引くら返した時分には、緋鯉  
 のやうに沈んだげな。——これだもの、お前様、祖父殿は家  
 へ帰りごと有るめえがね。

お刺に家中、無事なものは一人も無かつた。が不思議に私だ  
 けが助りました。

御時世が變つてから、古葛籠の底で見つけました。祖父殿  
 が工夫の絵図面、暇にあかして遣つて見て、私が先づ乗つて出た

が、案あんの定燃ぢやもえだ出したで、やれ、人殺ひところし、と……はツはツはツ、水みづへ入はいつて泳およいで遁にげた。

困こまつた事ことには、私わしが腹はらからの工夫くふうでねえでの、焼やくまいやうに手てを抜ぬくと、五位ごゐ鷺さぎが動うごかぬ。濠ほりの真まん中なかで燃もえ出だすを合が点つてんの向むきには、幾度いくども拵こぎへて乗のせて進しんぜる。其処そこで、へい、麓ふもとのものは承しょう知ちして、私わしがここを鷺さぎの船頭せんどう、埒らちもない芸げ当いたうだあ。」

と蹲しゃがんで、腰こしの煙草たばこ入いれを捻ひねり出だす。

聞きくものは、目めを閉とぢて恍惚ぼうとした。

「処が、聞かつせえまし。」

と、すぱくと煙を吹かす。近い煙草に遠霞で、天守を包んだ鬱蒼たる樹立の蔭が透いて来る。

「段々村が遠退いて、お天守が寂しく成ると、可怪可恐い事が間々有るで、あの船も魔ものが漕いで焼くと、今お前様が疑はつせえた通り……」

私が拵へものと思ひながら、不気味がつて、何か魔の人が仕掛けて置く、囀のやうに間違へての。谿河を流す筏の端へ鴉が留まつても氣に為るだよ。

誰も来て乗らぬので、久い間雨曝しぢや。船頭も船も退屈をした処、又これが張合で、私も手遊が拵へられます。

旦那、嘸お前様吃驚させえたらうが、前刻船と一所に、  
 しろはだかひとや、白い裸骸の人さ焼けるのを見た時は、やれ、五十年百年目に  
 は、世のなかに同じ事が又有るか、と魂消ましけえ。其で無うてさ  
 へ、御時節の有難さに、切支丹と間違へられぬが見つけもの  
 ところ、御時節の有難さに、切支丹と間違へられぬが見つけもの  
 処ぢや。あれが生身の婦で無うて、私もチヨン斬られずに済んだ  
 でがす……

が、お前様は又、一躰どうさせえた訳でがすの。」「  
 と、ちよこなんとした割膝の、真中どころへ頤を据えて、脚  
 はへぎせるじつなが煙管で熟と眺める。……老爺の前を六尺ばかり草を隔て、  
 わかもの青年はばつたり膝を支いて、手を下げた。……此の姿を、天  
 守から見たら、虫のやうな形であらう。

「失礼しました。御老人、貴下は大先生です。どうか、御高名をお名告り下さい。私は香村雪枝と言つて、出過ぎましたやうですが、矢張木を刻んで、ものゝ形を拵へます家業のものです。」とはツと額着く。

「是は、」

と同じく草につけた双の掌を上げたり下げたり、臀を揉んでもじついで、

「旦那、はて、お前様、何言はつしやる。何うさつしやる……気を静めてくらつせえよ。」

「否、何うぞ、失礼ながらお名告り下さい。御覧の通り、私は何うかして居る。……夢なんだか、現なんだか、自分だか他人だ

か、宛然弁別が無いほどです——前刻からお話し被爲つた事も、  
 其方では唯あはあは笑つて居らつしやるのが、種々な言に成つ  
 て、私の耳に聞こえるのかも分りません。が、其に爲てもお聞か  
 せ下さい。お名が此の耳へ入れば、私は私だけで、承つたこと、  
 見します。香村雪枝つて言ふんです。先生、真個は韮負  
 と言つて、昔の侍のやうな名なんです、其を其のまゝ雪の枝と  
 書いて、号にして居る若輩ものです。」

「えゝゝ、困つたな、これは。名を言へなら、言ふだけけれど、  
 改つては面目ねえ。」

と天窗を撫でぎまに、するりと顛巻を抜いて取り、

「へい、些と爺には似合ひましねえ、村の衆も笑ふですが、八

つづ 才ぐれえな小児だね、へい、菊松つて言ふでがすよ。」

「菊松先生、貴下は凡人では居らつしやらない。」

「勘弁して下らつせえ。うゝとも、すうとも返答打つ術もね

えだ：私、先生と言はれるは、臍の緒切つては最初だでね。」

「何とも御謙遜で、申上げやうもありません。大先生、貴

下で無くつて、何うして、彼の五位鷺が刻めます。あの船が動か

せます。而して、其の秘密を人に知らせまいために、天の火で焚

くと見せて、船をお秘しなさるんでせう。」

「お前様もの、祖父殿の真似をするだ、で、私が自由には成

んねえだ。間違へて先生だ、師匠だ言はつしやるなら、祖

父殿を然う呼ばらつせえ。」

「おな<sup>こと</sup>同じ事<sup>こと</sup>です、大<sup>だい</sup>名<sup>みやう</sup>の子孫<sup>しそん</sup>が華<sup>くわ</sup>族<sup>ぞく</sup>なら、名<sup>めい</sup>家<sup>か</sup>の御子孫<sup>ごしそん</sup>も先<sup>せ</sup>生<sup>ん</sup>です。特<sup>とく</sup>に私<sup>わたくし</sup>は然<sup>さ</sup>う申<sup>まを</sup>さなければ成<sup>な</sup>りません。私<sup>わたくし</sup>が今<sup>いま</sup>の此<sup>こ</sup>の仕<sup>し</sup>事<sup>ごと</sup>を為<sup>す</sup>るやうに成<sup>な</sup>りましたのは、貴<sup>あなた</sup>下<sup>た</sup>か、或<sup>ある</sup>は其<sup>そ</sup>の祖<sup>ぢい</sup>父<sup>さま</sup>様<sup>さま</sup>の御<sup>ご</sup>薫<sup>くん</sup>陶<sup>たう</sup>に預<sup>あづか</sup>つたと言<sup>い</sup>つて宜<sup>よろ</sup>しい。」……

技<sup>ぎ</sup>芸<sup>げい</sup>天<sup>てん</sup>

九

「父は或<sup>ちち</sup> 県<sup>あるけん</sup>の書記官<sup>しよきくわん</sup>でした。」

と雪枝<sup>ゆきえ</sup>は衣兜<sup>かくし</sup>に手<sup>て</sup>を挟<sup>はさ</sup>んだ。

「一年<sup>あるとし</sup>、此<sup>こ</sup>の地<sup>ち</sup>を巡<sup>じゆんくわい</sup> 廻<sup>わい</sup>した事<sup>こと</sup>が有<sup>あ</sup>ります。私<sup>わたくし</sup>が七才<sup>しななつ</sup>の時<sup>とき</sup>です。未<sup>ま</sup>だ其<sup>そ</sup>の頃<sup>ころ</sup>は、今<sup>いま</sup>の温泉<sup>をんせん</sup>は無<sup>な</sup>かつたやうですね。」

「温泉<sup>をんせん</sup>の開<sup>ひら</sup>けたのは近<sup>ちか</sup>い頃<sup>ころ</sup>の事<sup>こと</sup>でがすよ。然<sup>さ</sup>うでがすとも。前<sup>まへ</sup>から寂<sup>さび</sup>れては居<sup>ゐ</sup>ましたつけえ、お城<sup>しろ</sup>の居<sup>ゐ</sup>まはりに、未<sup>ま</sup>だ、町<sup>まち</sup>の形<sup>かたち</sup>の残<sup>のこ</sup>つた頃<sup>ころ</sup>は、温泉<sup>をんせん</sup>は無<sup>な</sup>かつたの。

地震<sup>ちしん</sup>が豪<sup>えら</sup>く押<sup>おつ</sup>ぱだかつて、しやつきり残<sup>のこ</sup>つたのはお天<sup>てん</sup>守<sup>しゆ</sup>ばかりぢや。人間<sup>にんげん</sup>も家<sup>いへ</sup>も押<sup>おつ</sup>ころ転<sup>ころ</sup>ばして、濠<sup>ほり</sup>も半<sup>はん</sup>分<sup>ぶん</sup>がた埋<sup>うま</sup>りましか。冬<sup>ふゆ</sup>の事<sup>こと</sup>での、其<sup>そ</sup>の前<sup>ぜん</sup>兆<sup>てう</sup>べい、八尺<sup>はつしやく</sup>余<sup>よ</sup>も積<sup>つも</sup>つた雪<sup>ゆき</sup>が一<sup>ひと</sup>晩<sup>ばん</sup>に融<sup>と</sup>けて、びしやくと消<sup>き</sup>えた。あれ松<sup>まつ</sup>が蒼<sup>あを</sup>いわ、と言<sup>い</sup>ふ内<sup>うち</sup>に、天<sup>てん</sup>も

ちも赤黒く成つて、活きものと言ふ活ものは、泥の上を泳いだ  
ての。

其の響きで、今の処へ、熱湯が湧出した。ぢやがさ、天道

ひところ

人を殺さずかい。生命だけは助つても、食はう飲まうの分別も

で出なんだ処温泉が昌つて来たで、何うやら娑婆の形に成つた。

其のかはり、旧から噂の高かつたお天守の此の辺は、人の寄附

かぬ凄いい処に成りましたよ。見さつせえ、いまに太陽様が出

さつせえても、濠端かけて城跡には、お前様と私等が他に

は、人間らしい影もねえだ。偶々突立つて歩行くものは、性

の善くねえ、野良狐か、山猫だよ。

こんな処へ、主は何として又姉様の人形連れて来さつせ

えた。」

「其を順にお話しませう、」

と雪枝は一度塞いだ目を、茫乎と開けて、

「父が此の処を巡廻した節、何処か山蔭の小さな堂に、美

い二十ばかりの婦の、珍しい彫像が有つたのを、私の玩弄に

させうと、堂守に金子を遣つて、供のものに持たせて歸つたの

を、他に姉妹もなし、姉さんが一人出来たやうに、負つたり

抱いたり為しました。大な像で、飯の時なんぞ、並んで坐る、と七

才の年の私の芥子坊主より、づつと上に、髪の毛の垂つた島田の鬻が

見えたんです。衣服は白無垢に、水浅黄の襟を重ねて、袖口

と棲はづれは、矢張白に常夏の花を散らした長襦袢らしく出

来て居て……其が上から着せたのではない。木彫に彩色を為た  
 んです。が、不思議なのは、其の白無垢、何うして置いても些と  
 でも塵埃が溜らず、虫も蠅も、遂ぞ集つたことが無い。花畑  
 へでも抱いて出ると、綺麗な蝶々は、帯に来て、留つたんです、  
 最う一つ不思議なのは、立像に刻んだのが、膝柔かにすつと坐  
 る。

袖は両方から振が合つて、乳のあたりで、上下に両手  
 を重ねたのが、ふつくりして、中に何か入つて居さうで、……駆  
 けて行つて、

『姉さん、』と捉まつた時なぞ、肩が揺れると、ころりん、ころ  
 りんと其は実に……何とも微妙な音が為て幽に鳴る、……父母

をはじめ、見るほどのものは、何だらう何だらう、と言ひくし  
 たが、指を折らなくては分らないから、無論開けては見ず仕舞。  
 とうく其の彫像を——何です——父が暖炉に燻べて焼い  
 たまでも分らなかつたんです。

ちらく雪の降る晩方でした。……私は、小児の群食で、  
 欲くない。両親が卓子に対向ひで晩飯を食べて居た。其  
 処へ、彫像を負つて入つたんですが、西洋室の扉を開けやう  
 として、

『姉さん、』と仰向くと上から俯向いて見たやうに思ふ、……廊  
 下の長い、黄昏時の扉の際で、むらくと鬢の毛が、其時は  
 戦いだやうに思ひました。ぱつちりした目が、眉の下で、睫毛を

黒く瞬いたやうで。……」

見ながら、其のまゝ、扉を開ける、と小児の背に、裾を後抱にして居た彫像の丈が反つて、鬚が、天井裏の高い処に見えた。

ト半靴の先を反らした、母親の白い足が卓子掛と絨氈の間で動いた。窓の外は雪が其の光を撫で、さらさら音が為さうに、月が有つて、植込の梢がちらちら黒い。烈々と燃える暖炉のほてりで、赤い顔の、小刀を持ったまゝ頤杖をついて、仰向いて、ひよいと此方を向いた父の顔が真蒼に成つた。

「東京駿河台に家があつた、其の二階でした。」  
 と言ひかけて、左右を見る、と野と濠と草ばかりでは無く、黙つて打傾いて老爺が居た。其を、……雪枝は確め得た面色であつた。

「父が轟乎と立つと……」

『おのれ!』と言つて、つかくと来ましたが。私の身軀が一つ、胴廻りを為ると、肩から倒に婦が落ちた。裙が未だ此の肱に懸つて、橋に成つて床に着く、仰向けの白い咽喉を、小刀でぎつくりと、さあ、斬りましたか、突いたんですか。

『きやつ、』と言つて、私は鉄砲玉のやうに飛出したが、廊下

の壁に額を打つて、ばつたり倒れた。……気の弱い母もひきつけて了つたさうです。

母は、父が、其の木像の胴を挫折つた——其が又脆く折れた——のを突然頭から暖炉へ突込んだのを見たが、折口に偶と目が着くと、内臓がすっかり刻込んであつた。まるで生ものを見るやうに腸も長く、青い火が其に擲んだので、余の事に氣絶したんだ、と後に言ひます。

父は年経つて亡くなるまで、其時の事に就いては一言も何にも言はない。最も当坐一月ばかりは、何うかすると一室に籠つて、誰にも口を利かないで、考事をして居たさうですが、別に仔細は無かつたんです。

但たゞ其その時ときから、  
 両りやうしん親わたくしは私を男ににしました。其それまで、三さん人にん

も出来できた児こが皆みんな育なだたなかつたので、私わたくしを女をんなにして置おいたんです。

名なも雪ゆきえ枝えと言いふ女をんなのやうな。

其そののな名なを直すぐに号がうにして、今いま、こんな家かげふ業をを為するやうに成なつた

のも、小こ児どもの時ときから、其そのの像ぎやうの事ことが、目めにも心こころにも身からだ躰たにも離はなれ

なかつた為せめなんです。

こんな辺へん鄙びな温をん泉せんへ参まゐつたのも、実じつは忘わすれられない可なつ懐かしい

気きが為したゝめです。何どこ処こか知しらんが、其そのの木もく像ぎやうは、父ちちが此ここの土と

地ちから持もつて帰かへつたと言いふぢやありませんか。

山やまも谷たにも野のも水みづも、其そこ処こには私わたくしの師し匠しやうがある、と信しんじ居あつた。

果はたして貴あなた下たにお目めにかゝつた。——あの、白しろ無むく垢くに常とこなつ夏なの長ながじ

ゆばん、あさぎ、ゑり、しまだに結つた、両の手に秘密を蔵した、絶  
 つせ、びじん、ざう、きぎ、かた、あなた、そ、おちいさん、な  
 世の美人の像を刻んだ方は、貴下の其の祖父様では無いでせうか

。

雪枝は熟と対手を視めた。

「え、貴下かも分らん、貴下かも知れません。先生、仰有つ

て下さい、一生のお願いです。」

「若え旦那、祖父殿が事は私も知らんで、何か言はつしやりま

すやうな悪戯を為たかも分らねえ。私は早や、獅子鼻や団栗

目、御神酒徳利の口なら真似も遣るが、弁天様は手に負えね

え……まあ、そんな事は措かつしやい。ぢやが、お前様は山が

先生、水が師匠と言ふわけ合で、私等が気にや天上界の

やうな東京から、遙々／＼と……飛騨の山家までござつたか

ね。」

と搔蹲ひ、両腕を膝に預けたまゝ、脚煙管で摺出す躰は、  
 嘴長い鷺の船頭化けたやうな態である。

雪枝は、しばらく猶予つた。

「仮にも先生と呼んだ貴下に向つて、嘘は言へません。……一度来やう、是非見たい。生れない以前から雪枝の身躰とは、許  
 嫁の約束があるやうな此の土地です。信者が善光寺、身  
 延へ順礼を為るほどの願だつたのが、——いざ、今度、と言  
 ふ時、信仰が鈍つて、遊山に成つた。  
 其が悪かつたんです……

家内かないと二人連ふたりづれで来たきんです、然しかも婚こん礼れいを為したばかりでせう

。

さかづきをさめ

盃さかづきを納なるなり汽車きしやに乗のつて家いへを出でた夫婦ふうふの身体からだは、人間にんげんだか

てふ

蝶てふだか区別くべつが附つかない。遥はる々／＼来たき、と言いはれては何なんとも以もつて

きまりわる

極きまりわるが悪い。気きも魂たまもふらひで、六十ろくじふ余よ州しゅう、菜なの花はなの上うへを舞まひ

ある

歩行あるいても疲つかれぬ元氣げんき。其それも突つかけに夜よる昼ひるかけて此こゝ処ゝまで来きた

なら、まだしごとく仕事てまへの手前やま、山みづにも水みづにも言いひ訳わけがあるのに……

あつち

彼方あつちへ二晩ふたばん此方こつちへ三晩みばん、泊とまり泊とまりの道草みちくさで、——花はなには紅くれなゐ、

つき

月つきには白しろく、処ところ々／＼の温泉をんせんを、嫁よめの姿すがたで彩さい色しきしては、前後ぜんご

さいう

左右さいう、額縁がくぶちのやうな形かたちで、附添つきそつて、木きを刻きざんで拵こしらへたものが、

か

恚かう行くものか、と自みづから彫刻家てうこくかであるのを嘲あざける了れう見けん。

をの のみ わす  
 斧も 鑿も 忘れたものが、木曾、碓氷、寢覚の床も、旅だか家だ  
 か差別は無ない気きで、何なんの此この山やまや谷たにを、神しん聖せいな技ぎ芸げいの天てん、芸げい  
 術ゆつの地ちと思おもはう。

来きて見みぬ内うちこそ、峯みねは雲くもに、谷たには霞かすみに、長とこしに封へぜられて、自じ分ぶ  
 等ら、芸げい 術じゆつの神かみに渴かつ 仰がうするものが、精しやう 進じんの鷲わしの翼つばさに乗のら  
 ないでは、杣山そまやま 伏ふしも分わけ入いる事ことは出来できぬであらう。流ながれには斧をのひの響びき  
 木の葉はには鑿のの音おと、白しろい蝙蝠かはほり、赤あかい雀すずめが、麓ふもとの里さとを彩いろどつて、辻つ  
 堂じだうの中うちなどは霞かすみが掛かつて、花はなの彫ほり物ものをして居ゐやうとまで、信しん

じて居たのが、恋しい婦と一所に來たゝめ、峯が雲に日を刻み、  
 水が谷に月を鑿つた、大彫刻を眺めても、婦が挿た筭ほども目  
 に着かないで、温泉宿へ泊つた翌日、以前ならば何よりも前  
 に、しか／＼の堂はないか、其らしい堂守は居まいか、と父  
 が以前持歸つた、其の神秘的な木像の跡の、心当りを捜す  
 処、——氣にも掛けないまで忘れて了つて、温泉宿の亭主を  
 呼んで、先づ尋ねたのが、世に伝へた双六谷の事だつた。

「老爺さん。」

と雪枝は嗟歎して言つた。

温泉の町の、谿流について溯ると、双六谷と言ふのがある  
 ——其処に一坐の大盤石、天然に双六の目の装られたの

が有ると言ふが、事実か、と聞いたのであつた。

亭主が答へて、如何にも、此の辺で噂するには、春の曙のや

うに、蒼々と霞んだ、滑かな盤石で、藤色が、つた紫の筋が、寸分違はず、双六の目に成つて居る。

『丁ど、先づ其の工合と思はれます。』と掌を畳に着けて指し  
て見せた。

其時坐つて居た蒲団が、蒼味の甲斐絹で、成程濃い紫の縞  
があつたので、恰も既に盤石の其の双六に対向ひに成つた  
気がして、夫婦は顔を見合はせて、思はず微笑んだ。

……と雪枝は言ふ。

けれども、其は神の斧の、微妙き製作を会得した嬉しさではな

かつた。其の實、矢叫の如き流の音も、春雨の密語ぞ、と  
 聞く、温泉の煙りの暖い、山国ながら紫の霞の立籠る閨を、  
 すみれみ 董に満ちた池と見る、鴛鴦の衾の寝物語りに——主従は三  
 世、親子は一世、夫婦は二世の契と聞く……

『全く未来でも添へるのでせうか。』と他愛のない言を新婦が言  
 つた。

二世は愚か三世までもと思ふ雪枝も、言葉あらそひを興がつて、  
 『何二世なぞがあるものか、魂は滅びないでも、死ねば夫婦はわ  
 かれわかれだ。』

とはぐらかすと、棲を引合はせながら、起直つて、  
 『私は此の世ばかりでは厭です。』

とツンとした。

『それでは二人で、一世か、二世か賭をしやう。』

苟くも未来の有無を賭博にするのである。相撲取草の首つ

びき引なぞでは其の神聖を損ふこと夥しい。聞けば此の山奥に天

然の双六盤がある。其の仙境で局を囲まう。

で、其の勝敗を紀念として、一先づ、今度の蜜月の旅を

切上げやう。けれども双六盤は、唯土地の伝説であらうも知

れぬ。實際なら奇蹟であるから、念のためと、こゝで、其の翌

日旅店の主人に聞いたのが、……件の青石に薄紫の筋

の入つた、恰も二人が敷いた座蒲団に肖て居ると言ふ其であつた。

『案内者でも雇へやうか。』

亭主が飛でもない顔色で、二人を視めたも道理。

## 十二

双六は確にあり。天工の奇蹟の故に、四五六また双六谷と其処を称へ、温泉も世の聞こえに、双六の名を負はするが、谷を究めて、盤石を見たものは昔から誰も無い。——土地の名所とは言ひながら、なか／＼以て、案内者を連れて踏込むやうな遊山場ならず。双六盤の事は疑無けれど、其の是あるは、月の中に玉兔のある、と同じ事、と亭主は語つた。

土地のものが、其方の空ぞと視め遣る、谷の上には、白雲行交

ひ、むらさきみどり紫のぼ緑ひかげのそ日影が添ひ、つきあかり月明には、き黄なる、またも、いろ又桃色  
 なる、きり霧の騰るを時々望む。たま珠か、こがね黄金か、よ世にもたうと貴いたから宝仕が  
ひそ潜んで、き気の群立つよ、とあこが憧憬れながら、かぜ風に木の葉のは音たより信もな  
 ければ、わけいもみぢを分入る道も知らず……あたか恰もさんらん燦爛としてごさい五彩に  
きら煌めく、てんじやう天上のほし星を指しても、て手に取られぬ、とかは異りはない。  
たゞやまふか唯山深く木をこ樵るしづ賤が、と兎もすれば、わ我がぼつぼく伐木のこだま笏にあら  
あやぬ、あや怪しく、ゆか床しく且かつかすか幽に、ころりんころりん、からくからく、とたへ妙なるが楽  
くき器を奏づるがごと如きをき聞く——そのとき其時は、もり森のえだ枝が、ひと一つ一つこがね黄金  
しろがね白銀のいと線にな成つて、そ其のね音をつた伝ふるがごと如くにかん感ずる……おも思ふに  
まじん魔神がむかひあ対向つて、さい采をな投げるひびき響であらう……なん何につけても、ひ飛  
だだにだだにだいいちだいいちのかく隠れ場所、ちか近づきがた難いましよ魔所である、とな猶ほていしゆ亭主が  
驒谷驒谷第一のかく隠れ場所、ちか近づきがた難いましよ魔所である、とな猶ほていしゆ亭主が

語つたのである。

二人は、聞くが如き他界であるのを信ずると共に、双六の賭が弥が上にも、意味の深いものに成つた事を喜んだ……勿論、谷へ分入るに就いて躊躇を為たり、恐怖を抱いたりするやうな念は聊も無かつた。

と雪枝は続いて言つた。

「其の上新奇心にも駆られたでせう。直ぐにも草鞋を買はして、と思つたけれども、彼是晩方に成つたから、宿の主人を強めて、途中まで案内者を着けさせることにして、其の日の晩飯は済せました。」

双六谷へは、翌早朝と言ふ意気組、今夜も二世かけた勝

敗はいは無なしに、唯たゞ睦むつまじいのであらうと思おもふ。宵よひ寐ねをするにも余あま  
 り早はやい、一ひと風ふう呂ろ浴あびた後あと……を、ぶらりと二ふた人たり連づれで山やま路みちへ出で  
 て見みたのが、丁ちやうど……狐きつねの穴あなには灯あかりは点つかぬが、猿ざるの店みせには燈ともの  
 点つく時じぶん分な、何なにとなく薄うすら寒さむい、其そこ処ら等かすみの霞とほやまも、遠とほ山やまの雪ゆきの影かげが  
 射さすやうで、夕ゆふげ餉けむりの煙ものが物さび寂たにしう谷おちへ落おちる。五ご六ろく軒けんの藁わら屋やな  
 らび、中なかにも浅あさま間まな掛かけ小こ屋みやのやうな小こ店みせを開あけて、穴あなから商しやうば  
 売いをするやうに婆ばあさんが一ひとり人ひと戸との外そとを透すかして居あた。其その店みせで  
 獸けものの皮かはだの、獅し子こ頭がしら、狐きつね猿ざるの面めん、般はん若にやの面めん、二に升しやう樽だるぐらゐ  
 な座ざ頭とうの首くび、——いいや其それが白しろい目めをぐるりと剥むいて、亀ひび裂ざの入はいつ  
 た壁かべに仰あふむ向むいた形かたちなんぞ余あんままきき味の可いいものではなかつた。誰たれか  
 拵こしらへるものが居ありて、直すぐ其それを売うるらしい。破やれむ蕙しろの上うへは、藍あゐの

糸のぐ 繪具や、紅殻だらけ——婆さんの前垂にも、ちらく、霜のやうに胡粉がかゝつた。其の他角細工も種々ある。……

「はッはッ、婆様が家ぢや。」と老爺は不意に笑ひ懸けて、

「茶でも飲つてござつたかの。」

雪枝は不図心着いたらしく調子を変へて、

「あゝ、お知己の店なんですか。」

「昔の恋でがす。彼でもの、お前様、新造盛りの事も有つけ。

あねさま 人形を欲しがると分ぢや。なんぼ山鳥のおろのかゞみで、頤

髯さ撫でた処で、木の枝で、鋸を使ひく、猿の脚と並んだ尻

を、下から見せては落つこちねえ。其処で、人形やら、おか

めの面やら、御機嫌取に拵へて持つて行つては、莞爾させて他

愛なく見惚れて居たものでがす。はゝゝ、はじめの内は納戸の押  
 入へ飾つての、見るな見るな、と云ふ。恐ろしい、男を食つて  
 骨を秘す、と村のものが黽つたつけの……真個の孤屋の鬼に成  
 つて、狸婆が、旧の色仕掛けで私に強請つて、今では錢にす  
 るでがすが、旦那、何か買はしつたか、沢山直切らつしやれば可  
 かつけな。」

采さい

## 十三

「おゝ、老爺おぢいさんが、あの、種々いろくなものを。」

と雪枝ゆきえは目の覚めめた顔色かほつきして、

「面めんも頭かしらも、お製作こしらへに成なつたんですか。……あゝ、いや、鷺さぎの

お手際てぎはを見みたので分わかる。軒のきに振ぶら下さがつた獅子頭ししがしらや、狐きつねの面めんなど、

どんな立派りっぱなものだつたか分わからない。が、其それに氣きが着つく了れう見けんな

ら、こんな虚氣うつけな、——対手あひてが鬼おににしる、魔まにしる、自じ分の女ぶんな

房ぼうを奪うばはれる馬鹿ばかは見みない。

失礼しつれいながら、そんなものは目めも留とめないで、

『采さいは無ないか。』

『お媼おばあさん、あの、采さいはありませんか。』

と同伴つれの婦をんなも聞きいたんです。……

すごろくいは

双六すごろく巖いはで振ふらうと云いふ、よく考かんがへれば夢ゆめのやうなことだつた。

いちろく、さんご

『一六、三五の采粒さいつぶかの、はい、ござります。』と隅すみの壁かべへ

おつ、押お着つけた、薬くすり箆すり筒だんすの古ふるびたやうな抽斗ひきだしを開あけると、鼠ねづみの尿ふんが、

ぱら／＼溢こぼれる。其その中なかから、畳たた紙とうがみを出だして、ころ／＼と手て

ゆす

で揺ゆりながら軒のきの明あかり前さきへ持もつて出でた。

みのし、きば

『猪いのしの牙きばで拵こぎへました、ほんに佳いい采さいでござります、御覽ごらんじまし

。』と莞爾にこ々々／＼しながら、掌てのひらを反そらして載のせた処ところを、二人ふたりで一個ひとつ

づ、取とつた。

さい

采さいは珠たまのやうに見みえた。綺麗きれいに磨みがいたのが透すき通とほるばかりに出で

来て、点々打つた目の黒いのが、雪の中に影の頭はれた、連るやまく、秀でた峯、深い谷のやうに不図見えた。

『可愛ぢやありませんか。』

と同伴の女は一寸摘んだが、掌へ据え直して、

『お媼さん、思ふ目が出ませうか。』と右の手を蓋で胸へつけて、ころ／＼と振つて試る。

と背中から抱き締めて、づる／＼と遠くへ持つて行かれたやうに成つて、雪枝は其時の事を思出した。

「其の時の事と言ふのは、父が此の土地の祠から持つて歸つた、あの、掌に秘密を蔵した木像です。」

「おゝ、」と頷く、老爺は腕組を為た肩を動かす。

「あゝ、それぢや、木彫きぼりの美人びじんが、父ちちのナイフつきさに突刺つされて、暖ストープトープの中なかに焼やかれた時ときまで、些ちつとも其その秘密ひみつを明あかさなかつた、微妙びめうな音ねのしたものは、同一おなじ、此この采さいであつたかも知しれない。

時ときに、傍そばに立つた家内かないの姿すがたが、其それに髻そつくり髻だ、と思おもふと、想さうざ

像うが遠とほく昔むかしかへ返かへつて、不思議ふしぎなもので、袖そでを並ならべたお浦うらの姿すがたが、

づゝと離はなれて遥はるかな向むかふへ……」

と雪枝ゆきえは語かたつて、押遣おしやるやうに手てを振ふつた。

「其そのとき時ことの事おもを思おもふと、老爺おぢいさん、恚かう言いふ内うちにも貴方あなたの身体からだも遠とほくへ行ゆく……ふら〜と間あひだが離はなれる。……」

而そして、婆ばあさんの店みせなりに、お浦うらの身体からだが向むかふへ歩行あるいて、見みる間まに其それが、谷たにを隔へだてた山やまの絶ぜつちやう頂うへへ——湧出わきでる雲くもと裏うら表おもて

に、動かぬ霞の懸つた中へ、  
 ながら薄くなる。  
 裙 袂がはらくと夕風に靡き

あの辺へ、夕暮の鐘が響いたら、姿が近く戻るのだらう、  
 —と誰が言ふともなく自分で安心して、益々以前の考に耽つ  
 て居ると、楣を焚くか、炭を焼くか、谷間に、彼方此方、ひら／＼、ひらくと蒼白い炎が揚つた。

思はず彫像を焼いた暖炉の火に心着いて、何故か、急に  
 女の身が危ぶまれて来た。

『お浦。』

と呼んだが返事をしない。

『お浦、お浦。』と言つたが、返事を為ない。雪杖最うきよろ／＼

し出した、其で二足三足づゝ、前後左右を、ばたくと行つたり、来たり……

慌しく成つて来た。

第一、お浦ばかりぢやない、其処に居た婆さんも見えなければ、其らしい店もない。

いや、これは可怪いぞ。一人ばかり居ないのなら、女が何うかしたのだらうが、店も婆さんもなくなつた、とすると……前方が攫はれたのぢやなくつて、自分が魅まれたものらしい。

『おゝい、おゝい。』

と智恵のない声をしながら、無暗に人を呼んで、雪枝は山路を駆け廻つた。

## 十四

「段々暗くなる、最う目は眩む、風が吹出す。此の風は……昼間蒼く澄んだ山の峽から起つて、障つて来る樹の枝、岩角、谷間に、白い雲のちぎれて鳥の留るやうに見えたのは未だ雪が残つたのか、……と思ふほど横面を削つて冷たかつた。」

『ま……、何処へござらつしやる、旦那。』  
とすたくく小走りに駆けて来て、背後から袂を引留めた、山稼ぎの若い男があつた。

『お城趾へ行かしては成りましねえだよ。日も暮れたに、当

てこと  
事もねえ。』と少し叱つて言ふ。

煙けむりが立つて、づん／＼とあがる坂一筋、やがて、其の煙の裙すそ

が下伏せに、ぱつと拡がったやうな野末の処へ掛つて居ました。』

雪枝は胸を伸上げて、岬が突出た湾の外を臨むが如く背後状

に広野を視めた。……東雲の雲は其の野末を離れて、細く長く

縦に蒼空の糸を引いて、上つて行く、……人も馬も、其処を通

つたら、ほつほつと描かれやう、鳥も飛ばゞ見えやう、——けれ

ども天守の屋根は森が包んで、霞がくれに尚暗い。其の上、野

の果を引上る雲も此方をさして置まつて来るやうで、老爺と差

向つた中空は厚さが増す。其の濃く暗い奥から、黄金色に

赤味の注した雲が、むく／＼と湧出す、太陽は其処まで上つた

— 汀の蘆の枯れた葉にも、さすがに薄い光がかゝつて、角ぐむ  
みぎはあし か には  
めばえ 芽生もやゝ煙りかけた。此の煙は月夜のやうに水の上にも這ひ懸  
けぶ  
ふね る。船の焼けた余波は分解ず……唯陽炎が頻に形づくりするの  
や が分解る。——やがて、此が、野の一面の草を伝つて、次第に  
わか  
ふもと ひらくくと、麓に下りて遊行しやう。……さて、日も当れば、  
お  
ひとぎと 北国の山 中ながら、人里の背戸垣根に、神が咲かせた桃  
さんちゆう  
な 桜が、何処とも無く空に映らう。まだ、朝早き、天守の上か  
どこ  
そら ら野をかけて箕の形に雲が簇つて、処々物凄じく渦を巻  
み  
かたち て、霰も迸つて出さうなのは、風が動かすのではない。四辺は寂  
あらねとぼし  
で つそり 寞して居る……峰に当り、頂に障つて、山々のために揺れる  
み  
みね のである。  
あた  
いたゞき  
は  
かぜ  
うご  
やまく  
ゆ

くも うご とき ふたり かたち おほ  
 雲の動く時、二人の形は大きく成つた。静とする時、渠等の姿  
 ちひ な  
 は小さく成つた。——飛驒の山の此のあたりは、土地が呼吸をす  
 わか  
 るのかも分らぬ。

ゆきえ のびあが とき ひざ くさ つ  
 雪枝は伸上つた時、膝を草に支いて居た。

そ ときかゝ ど  
 「其の時来懸つたのは、何うも、此の原の、向ふの取着であつ  
 たらしい。

しろあと はう い な  
 『お城 趾の方さ行つては成んねえだ。』と云つて其の男が引取  
 わたくし かない す が た た か やま は みうし な  
 めました……私は家内の姿を高い山の端で見失つたが、何うも、  
 むか そら あが じぶん たにそこ お  
 向ふが空へ上つたのではなく、自分が谷底へ落ちてたらしい。  
 そこ きづ な やうく で きところ こ とつ、  
 其処で疵だらけに成つて漸々出て来た処が、此の取着きで、以  
 ぜんふ さんぼ で ばしよ まるで はうがく ちが  
 前夫婦づれで散歩に出た場所とは、全然方角が違ふ、——御存

じの通り、温泉は左右へ見上げるやうな山を控へた、ドン底から湧きます。

で、婆さんの店の有つたのは南の坂で、此の城趾は北の山路から来るのでせう。

土地の男に様子を聞いて、

『あゝ、魅まれた……魅まれたんだ。いや、薄髯の生へた面で、何とも面目次第もない。』

と頻に面目ながる癖に、あはく得意らしい高笑ひを行つた。家内の無事を祝福する心では、自分の魅せられたのを、却つて幸福だと思つて喜んだんです。

『豪い、東京の客を魅すのは豪儀だ。ひよい、と抱いて温泉』

泉宿んやどの屋根越やねごしに山やまを一つ、まるで方角はうかくの違ちがつた処ところへ、私わたしを持もつて来た手際てぎはと云いふのは無ない。何かなに、此この辺へんに、有名いうめいな狐きつねでも居ゐるか。』

と酔よつぱらひのやうな言ことを云いつて、ひよろ／＼為しながら、其その男をとこに導みちびかれて引返ひきかへす。

『狐きつねや狸たぬきではござりましねえ、お天守てんしゆにござる天狗てんぐさま様さまだの工とぎ、時々とき／＼悪戯いたづらをさつしやります。』

『何天狗なにてんぐ。』

と云いふと慌あはたしく袂たもとを曳ひいて、

『え、大おほきこゑな声こゑをさつしやりますな、聞きこえるがの工とぎ』と、蒼あをい顔かほして、其その男をとこは、足許あしもとを樹きの梢こずゑから透すいて見みえる、燈ともの影かげを

指ゆびさしたんです。」

こだま  
 衍

十五

で、其そこ処こが温泉宿をんせんやどだ、と教をしへて、山間やまあひの崖がけを樹きの茂しげつた細ほそい路みちへ、……背負せをつて居ゐた、丈たけの伸のびた雑木ざうきの薪まきを、身からだ躰だごと横よこにして、ざつと入はいつて行ゆく。

しばらく、ざわ／＼と鳴つて居た。

急に何だか寂しく成つて、酔ぎめのやうな身震ひが出た。急い

で、燈火を当に駆下りる、と思ひがけず、往には覚えもない石

壇があつて、其を下切つた処が宿の横を流れる矢を射るやうな

谿河だつた。——驚いたのは、山が二わかれの真中を、温

泉宿を貫いて流れる、其の川を、何時の間に越へて、此の城

趾の方へ来たか少しも覚えが無い。

岸づたひに、岩を踏んで後戻りを為て、橋の取着の宿へ帰

つた、——此は前刻渡つて、向ふ越で、山路の方へ、あの婆さ

んの店へ出た橋だつた。

『お帰りなさいまし。』

と向ふ廊下から早足で、すたくく来懸つた女中が一人、雪枝を見て立停まつた。

『御緩り様で、』と左側の、畳五十畳計りの、だゞつ広い帳場、……真中に大な炉を切つた、其の自在留の、ト尾緒を刎ねた鯉の蔭から、でつぷり肥つた赤ら顔を出して亭主が言ふ。

『同伴は帰つたらうね。』と聞いた時、雪枝は其の間違の無い事を信じながら、何だか胸がドキ／＼した。

『奥方様で、は、何や、一寸お見申せ。』と頤を向けると、其処に居た女中が、

『御一所では無かつたのでございますか。』

で、ばたくと廊下を、直ぐに二階へ駆上つた。

なぜか雪枝は他人を訪問に来たやうな心持に成つて、う

つかり框際の広土間に突立つて居た。

山路から、後を跟けて来たらしい嵐が、袂をひらくと煽つ

て、颯と炉傍へ吹込むと、燈が下伏に暗く成つて、炉の中が明る

燃える。これが赫と、壁に並んだ提灯の箱に映る、と温泉の

薫が芬とした。

五六段階子を残して、女中が廊下の高い処へ顔を出して、

『まだ、お帰り遊ばしません。』

『下りて来て、ちやんと申さぬかい、何ぢや、不作法な。』と亭

主が炉端から上睨みを行る。

雪枝は一文字に其の前を突切つて、階子段を駆上り状に、女中と摺違つて、

『そんな筈は無い。そんな、お前、』と駭めるやうに言ひく飛上つたのであつた。

『それともお湯へお出でなさいましてですか、お座敷には居らつしやいませんですよ。』と小走りに跟いて来る。

固より女中が串戯を言ふわけは無い。居ないものは居ないので、座敷を見ると、あとを片附けて掃出したらしく、きちんと成つて、点けたての真を細めた台洋燈が、影を大きく床の間へ這はして、片隅へ二間に畳んだ六枚折の屏風が如何にも寂しい。

而して誰も居ない八畳の真中に、其の双六巖に似たと言  
ふ紫縞の座蒲団が二枚、対坐に据えて有つたのを一目見  
ると、天窓から水を浴びたやうに慄然とした。此処へも颯と一  
嵐、廊下から追つて来て座敷を吹抜けて雨戸をカタリと鳴らす。  
恚うして、お浦に別かれるのが極つた運命では無からうかと  
思つた……

「浴室だ、浴室だ。見ておいで。と女中を追遣つて、倒れ込  
むやうに部屋に入つて、廊下を背後向きに、火鉢に搦つて、ぶる  
くと震へたんです。……老爺さん。」  
と雪枝は片手で胸を抱いた。  
「亭主が上つて来ました。」

『え、一寸お引合はせ申します。此男が其の、明、日双六谷の途中まで御案内します。さあ、主、お知己に成つて置けや。』と障子の蔭に蹲んで居た山男に顔を出させる、と此が、今しがたつひ其処まで私を送つてくれた若いもの……此方は其処どころぢや無い。」

## 十六

「恁う成ると、最う外聞なんぞ構つては居られない。魅まれたか誑されたか、山路を夢中で歩行いた事を言出すと、皆まで恥を言はぬ内に……其の若い男が半分で合点したんです。」

さあ、亭主も飛でも無い顔をする。捜すのに、湯殿や小用場では追着かなく成つた。

『権七や、主は先づ、婆様が店へ走れ、旦那様、早速人を出しますで、お案じなさりませんやうに。主も働いてくれ、さ

あ、来い、』

と若いものを連れて、どたばた引上げる時分には、部屋の前から階子段の上へ掛けて、女中まじりに、人立ちがするくらゐ、二階も下も何となく騒ぎ立つ。

雨戸を開けて欄干から外を見ると、山気が冷かな暗を縫つて、橋の上を提灯が二つ三つ、どやくと人影が、道を右左へ分れて吹立てる風に飛んで行く。

眞先に案内者権七の歸つて来たのが、ものゝ半時と間は無かつた。けれども、足を爪立つて待つて居る身には、夜中までかゝつたやうに思ふ。

婆さんに聞けば、夫婦づれの衆は、内で采粒を買はつしやると、両方で顔を見合ひながら後退りをして、向ふ崖の暗い方へ入つたまで。それから覚えて居らぬ。目は踈し、暮方ではあり、やがて暗くなつて了つた、と権七が言ふ。

のみ、手懸りは何にも無い。

『矢張何か私のやうに、魅まれて路を迷つたらうか。』

『然うでもござりやすめえ、奥様は、其のお前様を捜し歩いて、其で未だ、お歸りが無いのでござりやせうで、天狗様も

ふたりいつしよふたりいつしよに攫さらはつしやることは滅多めつたにねえ事ことでござります。今いま二人ふたり一所いっしょにお歸かへりに成なるでござりやしやう。宿やどでも心しんぱい配はいをして居をりますで、夜よつび一夜よつび寐ねえで搜さがしますで、お前まえ様さまは、まあ、休やすまつしやりましたが可ようござります。』

氣きが氣きでは無ない。一いっしょ所に搜さがしに出でかけやうと言いふと、いやノ

山やまさか坂か不ふ案あん内ないな客きやく人じんが、暗やみの夜よ路みちぢや、崖がけだ、谷たにだ、

却かへつて足あし手て絡あはひに成なる。……案あん内ない者ものに雇やとはれるものが、何なにも

知しらない前まえに道みち案あん内ないを為したと言いふも何なにかの縁えんと思おもふ。人ひと一いち倍ばい

精せい出だして搜さがさうから静しづかに休やすめ、と頼たの母もしく言いつて、すぐまに又また下した

階たへ下おりた。

一ひと時とき騒さわ々ざう、しがつたのが、寂ひつそり寞りばつたりして平い時つより余よ計けい

に寂しく夜が更ける……さあ、一分、一秒、血が冷え、骨が刻まれる思ひ。時が経てば経つだけ、それだけお浦の帰る望みが無くなると言つた勘定。九時が十時、十一時を過ぎてもおとぎた音沙汰が無い。時々、廊下を往通ふ女中が、通りすがりに、『何う遊ばしたのでございませう、』

『うむ、』

『御心配でございます。』

『あゝ、』

——返答が出来ないで、溜息を吐く顔を見て、遁げるやうに二三人摺り抜けた。

やがて十二時を打つた。

女中が床を取りに来て、一つ伸べ

て、二つ並べやうと為たので、

『そりや可からう、』と言つた時は我ながら変な声だと思つた。

……勿論寐もせず、枕元へ例の紫縞のを摺らして、落

着かない立膝で何を聞くとも無く耳を澄ますと、谿河の流が

ざつと響くのが、落ちた、流れた、打当てた、岩に砕けた、死だ

——と聞こえる。

『あゝつ、』と忌はしさに手で払つて、坐り直して其処等を眺す、

と密と座敷を覗いた女中が、黙つて、スーツと障子を閉め

た。——夜が更けて寒からうと、深切に為たに違ないが、未練

らしい諦めろ、と愛想尽しを為れたやうで、赫と顔が熱くなる。

背中がぞつと寒く成る……背後を見る、と床の間に袖畳みを

した女の羽織、わがねた扱帯、何となく色が冷く成つて紀念のやうに見えて来た、——持主が亡くなると、却つてそんなものが、手で活きて来たやうに思はれて、一寸触るのも憚られる。何処か、しゆつくと風が通る……

## 十七

「うら悲しい、心細い、可厭な声で、

『お客様あゝ、』

『奥様、』と呼ぶのが、山風の風に響いて、耳へカーンと  
 こだまかへ  
 御を返してズ、ンと脳を抉る。

『お客様、』

『奥方様。』……は情ない。少し裏山へ近く成つたと思ふと、  
 女の声<sup>をんなこゑ</sup>が交つて、

『奥様やあ、』と呼んだ。ヒイと之<sup>これ</sup>が悲鳴<sup>ひめい</sup>を上げるやうで、家  
 内<sup>ない</sup>が絞殺<sup>しめころ</sup>される叫び<sup>さけ</sup>に聞こえる、最<sup>も</sup>う堪<sup>たま</sup>りません。

廊下<sup>らうか</sup>を跣足<sup>はだし</sup>で出て、階子段<sup>はしごだん</sup>の上<sup>うへ</sup>から倒<sup>さかさま</sup>に帳場<sup>ちやうば</sup>を覗<sup>のぞ</sup>いて、

『御主人、御主人、』

と、海<sup>うみ</sup>が凪<sup>な</sup>いだ後<sup>あと</sup>を、ぶる／＼震<sup>ふる</sup>へる波<sup>なみ</sup>のやうな畳<sup>たゝみ</sup>の上<sup>うへ</sup>に、男<sup>をとこ</sup>  
 だか女<sup>をんな</sup>だか、二人<sup>ふたり</sup>ばかり打上<sup>うちあ</sup>げられた躰<sup>てい</sup>で、黒<sup>くろ</sup>く成<sup>な</sup>つて突伏<sup>つゝぶ</sup>した真<sup>ま</sup>  
 中<sup>なか</sup>に、手酌<sup>てじやく</sup>でチビリ／＼飲<sup>や</sup>つて居<sup>ゐ</sup>た亭主<sup>ていしゆ</sup>が、むつくり頭<sup>あたま</sup>を  
 上げて、

『まだ御寐りませんかな。』と言ひく四五段上つた、中途の  
 上下で欄干越に顔を合はせた。

『又入れ替つて出てくれたのかね、あゝ言つて呼んでるのは、』  
 『へい、否、山深く参つたのが、近廻りへ引上げて来たでござります。』

『まだ、知れんのだね、あゝして呼立てゝ居るのを見ると。』  
 『へい、何しろ、早や、山も谷も数が知れん処でござりますけ  
 な。……』

と歎息を為したが、面を振つて、嚏をした。

『しかし、あれでござりましよ。何分夜が更けましたで、道を  
 教へますものも明方まで待ちませうし、又……奥方様も、何

の道お草臥れでござりませうで、いづれにも夜が明けましたら、  
 わか分るに相違ござりません。』

『分るつて？ 死骸か、』

『えゝ？』

『死んだら其までだ。』と自棄を言つて寐床へ歸つて打倒れた。

……

『お客様、』

『奥様、』と呼ぶのが十声ばかりして、やがて、ガラ／＼と門  
 の戸が大きく鳴つて開く。私は襟を被つて耳を塞いだ！ 誰が無  
 事だ、と知らせて来ても、最う聞くまい、と拗ねたやうに……勿  
 論、何とも言つては来ません。

其癩そのくせ、ガラ／＼と又また……今度は大戸おほどの閉しまつた時は、これで、最もう、家内かないと私わたしは、幽明いうめい処ところを隔へだてたと思おもつて、思おもはず知しらず涙なみだが落おちた。：

卜前さつき刻き、止よせ、と云いつて留とどめたけれども、其それでも女ぢよちゆう中ちゆうが伸のべて行いつた、隣となりの寐床ねどこの、搔かいまききの袖そでが動うごいて、煽あふるやうにして揺ゆりおこす。

『おゝ、』と飛附とびつくやうな返事へんじを為して顔かほを出だしたが、固もとより誰たれも居ゐやう筈はずは無ない。枕まくらばかり寂さびしく丁ちゃんとあり、木賃きちんで無ないのが尚なほうら悲かなしい。

熟じつと視詰みつめて、茫乎ぼんやりすると、並ならべた寐床ねどこの、家内かないの枕まくらの両りやうわ傍きへ、する／＼と草くさが生はへて、短みじかいのが見みる／＼伸のびると、蔽おほ

ひかゝつて、萱かやとも薄すゝきとも蘆あしとも分わからさず……其その中なかへ搔かい巻まきがス  
 ーと消きえる、と大おほな蛇へびがのたりと寐ねて、私わたしの方ほうへ鎌かまく首びを擡もたげた。  
 ぐつたりして手足てあしを働はたらかす元げん氣きもない。首くびを締しめて殺ころさば殺ころせで、  
 這は出ひだすやうに頭あたまを突つきつくと、真ま黒くろに成なつて小こ山やまのやうな機きくわ  
 関ん車しゃが、づゝづと天あたま窓まの上うへを曳ひいて通とほると、柔やはらいものが乗のつた  
 やうな氣き持もちで、胸むねがふわ〜と浮うき上あがつて、反そり身みに手て足あしをだらり  
 と下さげて、自じ分ぶんの身からだ躰たが天てん井じへ附く着つつく、と思おもふとはつと目めが  
 覺さめる、……夜よは未まだ明あけないのです。  
 おな 同おなじやうな切せつない夢ゆめを、幾いく度たとなく続つゞけて見みて、半はん死し半はん生せいの  
 躰ていで漸やつと我われに返かへつた時とき、亭てい主しゆが、

『御おく国にもと許へ電でん報ぱうをお掛かけ被な成さりましては如いか何どでござりませう

。』と枕許まくらもとに坐すはつて居ゐました。

『馬鹿ばかな。』

と一言いちごんのもとに卻しりぞけたんです。」

## 十八

「怪我けが、過失あやまち、病氣びやうきなら格別かくべつ、……如何いかに虚氣うつけなればと言いつて、」

雪枝ゆきえは老爺ぢいに此これを語かたる時とき、濠端ほりばたの草くさに胡座あぐらした片膝かたひざに、握にぎりこぶし拳こぶしをぐい、と支ついて腹はらに波立なみたつまで氣兢きほつて言いつた。

「女房にようぼうが紛失ふんしつした、と親類しんるゐ知己ちきへ電報でんぱうは掛かけられない。

『何しろ、最う些と手懸りの出来るまで其は見合はせやう。』

『で、ござりまするが、念のために、お国許へお知らせに成り

ましては如何なもので、』

『可から、死骸でも何でも見着かつた時にせう。』

『其の、へい……死骸が何うも、』

『何だ、死骸が分らん。』

私は胸が裂けるほど亭主の言葉が気に障つた。最う死骸にな

つてる、と言つたやうな、奴の言種が何とも以て可忌しい。

『己が見着けて持つて帰る、死骸の来るのを待つて居れ。』と睨

みつけて廊下を蹴立て、出た——帳場に多人数寄合つて、草

鞋穿の巡查が一人、框に腰を掛けて居たが、矢張此の事に就

いてらしい。

痘痕あばたのある柔和にうわな顔かほで、気きの毒どくさうに私わたしを見た。が口くちも利きかな  
いでフイと門かどを、人ひとから振ふりもぎる身躰からだのやうにづん／＼出掛でかけた

くも、しろ、やま、あを、かぜ、みづ、さつ、あを、さつ、  
雲は白く山は蒼く、風のやうに、水のやうに、颯と青く、颯と  
しろ、み、くろ、かみ、こ、みどり、やまつばき、いちりん、べにいろ  
白く見えるばかりで、黒髪濃こみどりい緑、山椿やまつばきの一輪いちりん紅べにいろ色を  
した褌つまに擬まがふやうな色いろさへ、手てが／＼は全まる然でない。

目めが眩くらむほど腹はらが空すけば、よたく／＼と宿やどへ帰かへつて、

『おい、飯めしを食くはせる。』

で、又また飛出とびだす、崖がけも谷たにもほつ／＼き歩ある行く、——と雲くもが白しろく、山やま  
が青あをい。……外ほかに見みえるものは何なんにもない。目めが青あをく脳なうが青あをく成な

つて了しまつたかと思おもふばかり。時々とき／＼黒いものがスツスツと通とほるが、  
 犬いぬだか人にんげん間まだか差別さべつがつかぬ……客きやくじん人にんは変へんに成なつた、氣きが  
 違ちがつた、と云いふ声こゑが嘲あざける如ごとく、憐あはれむ如ごとく、眩つぶやく如ごとく、また咒のろ  
 ふ如ごとく耳みみに入る……

『お客きやくさま様、』

『奥おくさま様』と呼よぶのが峯みねから伝つたはる。劔こだまを返かへして谷たにへカーンと響ひび  
 く、——雲くもが白しろく、山やまが青あをく、風かぜが吹ふいて水みづが流ながれる。

『客きやくじん人にんは氣きが違ちがつた、』と言いふのが分わかる。

「可よし、何なんとでも言いへ、昨日きのふ今日けふ二世ふにせかけて契ちぎりを結むすんだ恋こひ女によう房ぼう  
 がフト搔かき消けすやうに行ゆく衛ゑが知しれない。其それを搜さがすのが狂きちがひ人にんなら、  
 飯めしを食くふものは皆みな狂きちがひ氣き、火ひが熱あついと言いふのも変へんで、水みづが冷つめたいと



とめそ 目其の際限の無い夜の中に、墨が染んだやうに見えたのは水ら  
 しかつた……が、水でも構はん、女房の行衛を捜すのに、火  
 の中だつて厭ひは為ない。づかく踏込まうとすると、  
 『あゝ、深いぞ、誰ぢや、水へ……』  
 と其時、暗がりから、しやがれた声を掛けて、私を呼留めたも  
 のがあります。

やみ 暗に透かすと、背の高い大な坊主が居て、地から三尺ばか  
 たかところ、宙で胡座搔いたも道理、汀へ足代を組んで板を渡した  
 うへに構込んで、有らう事か、出家の癖に、……水の中へは広  
 い四手網が沈めてある。」

ぢい 老爺は眉毛をひくつかせた。

「はての。」

じやうぬま  
城ヶ沼

十九

「其その入に道ふの、のそくと身み動うごきするのが、暗や夜みの中なかに、雲くもの  
裾すそが低ひくく舞ま下ひつて、水みづにびつしより浸に染じんだやうに、ぼうと水す  
気きが立たつので、朦もう朧ろうとして見みえた。

『沼ぢや、氣を着けやれ』と打切つたやうに言ひます。

『沼でも海でも、女房が居れば入らずに置けない。』

苛々するから、此方はふてくされで突掛る。

と入道が耳を貫いて、骨髓に徹る事を、一言。

『はゝあ、此処なは、御身が内儀か、』

と言ふ。

『此処なは……私……女房だと？……』

『おゝ、私が今出逢ふた、水底から仰向けに顔を出いた婦人の

事ぢや。』

『や、溺れて死んだか。』

とぼつたり膝を支く、と入道は足代の上から、蔽被さるやう

に覗いて、

『待て、待て、死骸を見たでは無い。ぢやが、正のものでもなかつた……謂はゞ影ぢやな。声の有る色の有る影法師ぢや……其のものから、御身に逢ふて話してくれい、と私が托言をされたよ。……』

何かな、御身は遠方から、近頃此の双六の温泉へ、夫婦づれで湯治に来て、不凶山道で其の内儀の行衛を失ひ、半狂乱に搜してござる御仁かな。』とつけく訊ねる。

女房が失せて半狂乱、

と雪枝は、思出すのも、口惜しさうに齒噛みをした。

「察して下さい、……唯其の音信の聞きたさに、

『え、其そのものです』と返事へんじを為しました。

『やれ、其そのの毒どく。』

とさらさらと法衣ころもの袖そでを搔かき合あはせる音おとがして、

『私は旅たびのものぢやが、此この沼ぬまは、城ケ沼じやうぬまと言いふげぢやよ。』

老爺おぢいさん、其処そこは城ケ沼じやうぬまと言いふ処ところだつた。」

雪枝ゆきえは息いきせはしく成なつて一息ひといき吐つく。ト老爺ぢいは煙草たばこを払はたいた。

吸すみながら落おちた小草をぐさの根ねの露つゆが、油あぶらのやうにじりりと鳴なつて、煙けむり

が立たつと、ほかく薄日うすびに包つまれた。雲くもは稍薄やうすく成なつたが、天てん

守ゆの棟むねは、聳そびえ立たつ峯みねよりも空そらに重おもい。

「え、城ケ沼じやうぬまの。はあ、夢中むちゆうで其処そこら駆かけ廻めぐらしたものと

見みえる……それは山やまの上うへでは無ない。お前めえ様さまが温泉をんせんへ来きさつし

やつた街道端の、田畝に近い樹林の中にある大い沼よ。――

何が、其の水は谿河の流を堰いて溜めたでは無うて、昔から此の……此処な濠の水が地の底を通ふと言ふだね。……

お天守の下へも穴が徹つて、お城の抜道ぢや言ふ不思議な沼での、……私が祖父殿が手細工の船で、殿様の妾を焼いた

と言つけ。其ん時はい、其の影が、城ヶ沼へ歴然と映つて、空が真黒に成つたと言ふだ。……其さ真個か何うか分らねども、

お天守の棟は、今以つて明かに映るだね。水の静な時は大い角の龍が底に沈んだやうで、風がさらりと吹く時は、胴中に成

つて水の面を鱗が走るで、お城の様子が覗けるだから、以前は沼の周囲に御番所が有つた。最もはあ、殺生禁制の場所

がしたよ。

其の上、主が居て住む、と云ふて、今以て誰一人釣をするも

のはねえで、鯉鮒の多い事。……

お前様が温泉の宿で見さしつけない、囲炉裡の自在留のやうな

奴さ、山蟻が這ふやうに、そろく歩行く。

あの、沼へ、待たつせえ、」

と又眉をびくく遣つた。

「四手場を拵えて網を張るものは近郷近在、私の他に無いの

ぢやが、……お前様が見さしつた、城ヶ沼の四手場の足代の上

の黒坊主と……はてな……其の坊様は大い割に、色が蒼ざめ

ては居らんかの。」

## 二十

「あゝ、蒼あをざめた、」

と雪枝ゆきえは起直おきなほつて言つた。

「鼻はなの円まるい、額ひたひひろの広い、口くちの大きい、……其その顔かほを、然しかも厭いやな色いろの火ひが燃もえたので、暗夜やみに見みました。……坊主ぼうずは狐火きつねびだ、と言いつたんです。」

「それく、其その坊様ぼうさまなら、宵よひの口くちに私わしが頼たのんで四手場よつてばに居ゐて、貰もらふたのぢや……、はあ、其処そこへお前様めえさまが行逢ゆきあはしつたの。はて、どうも、妙智めうちりき力ちから、旦那様だんなさまと私わしは縁えんが有あるだね。」

「確たしかに師弟しでいの縁えんが有あると思おもひます、」

と雪枝ゆきえは慇懃ゐんぎんに言いふ。

「まあ、串戯じやうだんは措おかつせえ。……時ときに其その坊様ぼうさまは何なんと云いふでがすね。」

「えゝ、……」

『私わしは旅たびから旅たびをふらくと経廻へめぐるものぢやが、』と坊様ぼうさまが言いふんです。

『日ひが暮くれて此処こゝを通とほりかゝると、今いま、私わしが御身おみに申まをしたやうに、沼ぬまの水みづは深ふかいぞ、と氣きを注つけたものがある。此この四手場よつてばに片膝かたひざで、暗やみの水みづを視詰みつめて居ゐた老人らうじんぞや。さて漁れうはあるか、と問とへば、漁れうは有あるが、魚さかなは一いつ向かうに獲とれぬと言いふ。

希有な事を聞くものぢや、其の理由は、と尋ねると、老人の

返事には、『

と其の坊主が話したんです。……ぢや、老爺さん——老人が貴

下なら、貴下が坊主に話された、と云ふ、城ヶ沼の鯉鮒は、網で

掬へば漁はあるが、畚に入れると直ぐに消えて、一尾も底に留

らぬ。鱒一尾獲物は無い。無いのを承知で、此処に四ツ手を組

むと言ふのは、夜が更けると水に沈めた網の中へ、何とも言へな

い、美しい女が映る。其を見たい為に、独り恚うやつて構へて居

る、……とお話があつたやうに、其の時坊主から聞いたんです：

…それは真個の事ですか？ 老爺さん。」

一切、事実だ、と老爺は答へたのである。

はじめの内、……獲た魚は畚の中を途中で消えた。荻尾花  
 道、木の下路、茄子畠の畝、藪、暈、丸木橋、……城  
 ケ沼に漁つて、老爺が小家に帰る途中には、穴もあり、祠もあ  
 り、塚もある。月夜の陰、銀河の絶間、暗夜にも隈ある要害で、  
 途々、狐狸の輩に奪ひ取られる、と心着き、煙草入の根附  
 が軋んで腰の骨の痛いまで、下つ腹に力を籠め、気を八方に配  
 つても、瞬をすれば、一つ失せ、鼻をかめば二つ失せ、嚏をすれ  
 ばフイに成る。……で、未だも途中まで畚の重い内は張合も  
 あつた。けれども、次第に畜生、横領の威を奮つて、宵  
 の内からちよろりと攫ふ、漁る後から嘗めて行く……見るく四  
 つ手網の網代の上で、腰の周囲から引奪る。

もつとそ とき 最も其の時は、何となく身近に物の襲ひ来る氣勢がする。左の  
 手がびくりとする時、左から丁手搔で、右の腕がぶるつと為る  
とき 時、右の方から狙ふらしい。頸首脊筋の冷りと為るは、後に構  
 まへてござる奴。天窓から悚然とするのは、惟ふに親方が御  
つちやう 出張かな。いや早や、其と知りつゝ、さつゝと持つて行か  
 れる。最も身体を蓋に為て畚の魚を抱いてゞも居れば、如何に畜  
くしやう 生に業通が有つても、まさかに骨を徹しては抜くまい、と  
いつしん 一心に守つて居れば、沼の真中へひらくと火を燃す、はあ、  
へん 変だわ、と気が散ると、立処に鯉が失せる。其の術で行かね  
わざ ば、業を変へて、何処とも知らず、真夜中にアハ、アハ、笑ひを  
びつくり る、吃驚すると鮒が消える、——此方も自棄腹の胴を極めて、

せうくわきしたくすぐ  
 少々脇の下を擦られても、堪へて静として畚を守れば、さすが  
 めみみに見せて、尖つた面、長い尻尾は出さぬけれど、さて然うして  
 見た日には、足代を組んで四手を沈めて、身体を張つて、体よく  
 賃無しで雇はれた城ヶ沼の番人同然、寐酒にも成らず、一  
 向に市が栄えぬ。

二十一

うをよ  
 魚が寄ると見れば、網を揚げる、網を両手で、ぐいと引  
 て、目も心も水に取られる時の惨憺さ。ガサリなど、音をさして、  
 畚を俯向けに引繰返す、と這奴にして遣らるゝはまだしもの事、



で、持もつたまま大おほ揺ゆりに身からだごと網あみを揺ゆれば、矢や張はり揺ゆれて、衣きも服ふくだか鱭ひれだか、尾しっぽ毛げだか、網あみの中なかの婦をんなの姿すがたがふら／＼動うごくだ。はて、変へんだと手てを離はなすと、ざぶりと沈しづむだ。其その網あみの底そこの方ほう……水みづ中なかに、ちらく／＼と顔かほが見みえる……其そのお前めえさま様しろ、白しろい顔かほが正ま的ともに熟じつと此こ方ち方らを見みるだよ。

や、早はや其その時ときは畚びくが足あし代しろを落おちて、泥どろの上うへに俯うつ向むけだね。其そ奴いつが、へい、足あしを生はやして沼ぬまへ駆かけ込こまぬが見みつけものだで、畜ち生せいめ、此この術てで今こん夜やは占しめをつた。

何なんのつけ、最もう二に度どと来くる事ことではない、とふつ／＼我がを折をつて帰かへりましたけえ。怪をかしな事ことには、眉まゆが何どう、目めが何どう、と云いふ覺おぼえはねえだが、何なんとも言いはれねえ、其その女をんなの容きりやう色いろだで……色いろも恋こひも

無けれども、絵を見るやうで、何とも其の、美しさが忘れられぬ。  
 化けたなら化けたで可、今夜は蛇に成らうも知んねえが、最う  
 一晩出懸けて見べい。」……

で、又てくくと沼へ出向く、と一刷け刷いた霞の上へ、遠  
 山の峰より高く引揚げた、四手を解いて沈めたが、何の道持つ  
 ては帰られぬ獲物なれば、断念めて、鯉が黄金で鮒が銀でも、一  
 向に気に留めず、水に任せて夜を更す。  
 風が吹き、風が凪ぎ、水が動き、水が静まる。大沼の刻限  
 も、村里と変り無う、やがて丑満と思ふ、昨夜の頃、ソレ此  
 処で、と網を取つたが、其の晩は上へ引揚げる迄もなく、足代の  
 上から水を覗くと歴然と又顔が映つた。

と老爺が話す。

「聞かつせえまし、肩から胸の辺まで、薄らと見えるだね、試して見ろで、やつと引き揚げると、矢張り網に懸つて水を離れる……今度は、ヤケにゆつさゆさ引振ふと、揉消すやうにすつと消えるだ——其処でざぶんと沈める、と又水の中へ露はれる。……三夜四夜と続いたが、何時も其の時刻に屹と映るだ。追々馴染が度重ると、へい、朝顔の花打沈めたやうに、襟も咽喉も色が分つて、口で言ひやうは知らぬけれど、目附なり額つきなり、押魂消た別嬪が、過般中から、同じ時分に、私と顔を合はせると、水の中で莞爾笑ふ。……

や、其の笑顔を思ふては、地韜踏んで堪へても小家へは寐ら

れぬ。雨が降れば、簑を着て、月の良い夜は、頬被り。つひ一晚  
 も欠かさねえで、四手場も此の爺も、岸に居着きの巖のやうだ—  
 —扱気が着けば、ひよんな事、沼の主に魅入られた、何か前世の約  
 束で、城ヶ沼の番人に成つたゞかな。何処で死ぬ身と考える、  
 と心細い身の上ぢやが、何と為ても思切れぬ……  
 いけ年を為した爺が、女色に迷ふと思はつしやるな。持たぬ孫の  
 可愛さも、見ぬ極楽の恋しいも、これ、同じ事と考えたゞね。

……

さて困つたは、寒ければ、へい、寒し、暑ければ暑い身躰ぢや、  
 飯も食へば、酒も飲むで、昼間寐て夜出懸けて、沼の姫様見る  
 は可えが、そればかりでは活きて居られぬ。」

雲くもの聲こゑ

二十二

譬たとへば幻まぼろしの女をんなの姿すがたに憧あこがるゝのは、老おひの身みに取り、極ごく楽らくを望のぞ  
 むとおな同じおなと為する。けれども其その姿すがたを見みやうには、……沼ぬまへ出で掛かけ  
 て、四よつ手場てばに蹲つくばつて、或ある刻こくげん限げんまで待またねばならぬ。で、屋根やね  
 から月つきが射さすやうなわけ訳わけには行ゆかない。其そこ処こで、稼かせぎも為せず活計くわしも

た  
立てず、夜毎よごとに沼ぬまの番ばんの難なんぎやう行ぎやうは、極ごくらく楽らくへ参まゐりたさに、身み投な  
げを為するも同おなじ事こと、と老ぢやうい爺いは苦にが笑わらひをしながらい言いつた。

そんなら、四よつ手て場ばを留やめにして、小こ家やで草わらぢ鞋ぢでも造つくれば可いが、  
因いんぐわ果くわと然さうは断あきら念らめられず、日ひが暮くれると、そゝ髪が立みたつまで、  
早はや魂たましひは引ひきまどとで、城じやうヶ沼ぬまを差さしてふわ〜と白しろい蝙蝠かはほり  
のやうに祥さまよ徇よひ行ゆく。

待まてよ、恚かうまで、心こゝろを曳ひかるゝのは、よも尋たゞ常ごとごとでは有ある  
まい。伝つたへ聞きく沼ぬまの中なかへは古こ城じやうの天てん守しゆが倒さかさまやど  
先せんの術じゆつの為ために、怪あやしき最さい後ごを遂とげた婦をんなが、子し孫そんに絡まつはいんねん事ごとか。  
其それとも弔とむらはれず浮うかばぬ靈れいが、無む言ごんの中うちに供く養やうを望のぞむのであら  
うも知しれぬ。独ひとりでは何なにしろ荷にが重おもい。村むらの誰たれにかも見みせて、怪あや

しさを唯※の如く散らさう、と人に告げぬのでは無いけれども、  
 昼間さへ、分けて夜に成つて、城ヶ沼の三町四方へ寄附かう  
 と言ふ兄哥は居らぬ。

殆んど我身を持って余した頃の、其の夜……

「お前様が逢はしつた坊主が来て、のつそり立つた。や、これ  
 も怪しい。顔色の蒼ざめた墨の法衣の、がんばり入道、影の薄  
 さも不気味な和尚、鯨でも化けたか、と思ふたが、——恠くノ  
 \の次第ぢや、御出家、……大方は亡霊が廻向を頼むであ  
 らうと思ふで、功德の為め、丑満まで此処にござつて引導を  
 頼むでがす。——旅の疲労も有らつしやらうか、何なら、今夜は  
 私が小家へ休んで、明日の晩にも、と言ふたが、其には及ばぬ……

：若しや、其が真実なら、片時も早く苦難を救ふて進ぜたい。

南無南無と口の裡で唱うるで、饗応振に、藁など敷いて坐らせ

て、足代の上を黒坊主と入替つた。

さあ、身代りは出来たぞ！ 一目彼の女を見され、即座に法衣

を着た巖と成つて、一寸も動けまい、と暗の夜道を馴れた道ぢや、

すたくくと小家へ歸つてのけた……

翌朝疾く握飯を拵へ、竹の皮包みに為て、坊様を見

舞に行きつけ……霧の中に影もねえだよ。

はあ、よもや、とは思ふたが、矢張り鯨めが来せたげな。え、

埒もない、と気が抜けて、又番人ぢや、と落胆したゞが、其

の晩もう一度行く、と待つとも無う夜が更けても、何時の影は映

らなんだ。四手よつてを上げてあても星ほしも懸からず、鬢びんの香かのする雫しづくも落ちぬ。  
 あゝ、引導いんだうを渡わたしたな。勿もつ躰たいない、名僧めいそう智識ちしきで有あつたもの、  
 と足代あじろの藁わらを頂いたぐがの、……其それでは、お前めえさま様が私わしの後あとへご  
 ざつて、其その坊主ぼうずに逢あはしつたものだんべい。

……までは、はあ、分わかつたが、私わしが城じやうケ沼ぬまの水みづの映うつる女をんなを見み  
 じめたは久ひさしい以い前ぜんぢや。お前めえさま様湯治たうぢにござつて、奥おく様の行ゆき  
 方たが知しれなく成なつたは、つひ此この頃ごろの事ことではねえだか、坊ぼう様さま

は何どこ処こで聞きいて、奥おく様の言ことづけを為したぐがの。」

「其それを坊ぼう様さんが言いつたんです。其その出家しゆつの言いふには、

『……人ひとは知しらぬが、此こ処こに居ある老人らうじんに、水みづの中なかへ姿すがたを顯あらはす  
 まぼるんなえかう  
 幻まぼるんの婦なに廻えかう向かうを、と頼たのまれて、出しゆつ家けの役やくぢや、……宵よひから念ねんぶ

仏つとを唱となへて待まつ、と時刻じこくが来きた。

大沼おほぬまの水みづは唯ただ、風かぜにも成ならず雨あめにも成ならぬ、灰色はいいろの雲くもの倒たふれた広ひろい亡なきがら体のやうに見みえたのが、汀みぎはからはじめて、ひたくと呼吸いきをし出しただ。ひたくと言いひ出しただ。幽かすかにひたくと鳴出なりだした。

町方まちかた、里近さとちかの川かはは、真夜中まよなかに成なると流ながれの音おとが留やむと言いふが、  
 反あべこべ対こぢやな。此この沼ぬまは、其時そのじぶん分ぶんから動うごき出だす……呼吸いきが全ぜん躰たいに通かよふたら、真中まんなかから、むつくと起おきて、どつと洪水こうずゐに

成なりはせぬかと思おもふ物凄ものすげさぢや。

と其その中なかに何なにやら声こゑがする。』……と坊主ぼうずが言いひます。』

其その聲こゑが、五位ごゐ鷲さぎの、げつく、げつくとも聞きこえれば、狐きつねの叫さけぶやうでもあるし、鼬いたちがキチくと齒はぎしりする、勘かん走ぼしつたのも交まじつた。然さうかと思おもふと、遠とほい国くにから鐘かねの音ねが響ひびいて来くるか、とも聞き取とられて、何なんとなく其そこ処ち等らががやくと出だす……雑ざつ多たな声こゑを袋ふくろに入れて、虚こくう空うから沼ぬまの上うへへ、口くちを弛ゆるめて、わやくくと打ぶ撒ちまけたやうに思おもふと、

『血ちを洗あらへ、』

『洗あらへ』

『人にん間げんの血ちを洗あらへ。』

「しもとやぶ  
 笛で破つた。」

「むちき  
 鞭で切つた。」

「つめさ  
 爪で裂いた。」

「はだきよ  
 膚を浄めろ、」

「きよ  
 浄めろ。」

と高く低く、声々々におほぬまに大沼のひたくくと鳴るのが交つて、暗  
 夜を刻んで響いたが、雲から下りたか、水から湧いたか、沼の真  
 んなか中あたりへ薄い煙が朦朧と靡いて立つ……

「にころ  
 煮殺すではないぞ。」

「うでるでない。」と言ふ。

「ゆかげん、湯加減、湯加減、」

『水加減。』と喚いた……

『沼の湯は熱いか。』とぼやけた音で聞くのがある……

『熱湯。』と簡単に答へた。

『人間は知るまいな。』

『知るものか。』と傲然とした調子で言つた。

『沼から何で沸湯が出る。』

『此の湯が沸いて殺さぬと、魚が殖へて水が無くなる、沼が乾く

わ。』

と言つた。

『※舌るな、働け。』

『血を洗へ、』

「傷きづを洗あらへ」

「小袖こそでを剥はがせ」

「此この紫むらさきは？」

「菖蒲あやめよ、藤ふぢよ。」

「帯おびが長ながいぞ。」

「蔦つた、桂かつら、山鳥やまどりの尾をよ。」

「下着したぎも奪うばへ、」

「此この紅くれなゐは、」

「もみぢ、花はな。」

「やあ、此この膚はだえは、」

「山陰やまかげの雪ゆきだ。」

ひいつ、と魂消つて悲鳴を上げた、糸のやうな女の声が咎を返して沼に響いた。

坊主が此処まで言つた時、聞いてた私は熱鉄のやうな汗が流れた。」

と雪枝は老爺に語りながら唇を戦かせて、  
「尚ほ坊主が続けて、話す。」

さあ何ものかゞ寄つて集つて、誰かを白裸にした、と思へば、

『犬よ、犬よ。』と呼んだのがある。

びやう、びやう、うおゝ、うおゝ、うゝ、と遙かに犬が長吠  
 して、可忌しく夜陰を貫いたが、瞬く間に、里の方から、風のや  
 うに颯と来て、背後から、足代場の上に蹲つた——法衣の袖を掠  
 めて飛んだ、トタンに腥い獣の香がした。  
 水の上で、わん、わん、と啼く……

『男は知るまい。』

『うゝ、』と犬の声。

『不便な奴だ。』

『びやう、』と又啼いた。

此の間、ざぶりくと水を懸ける音が頻にした。

『やがて可いか、』

『血は留まつた。』

『又鞭打つて、』

『又洗はう。』

『やあ、己が手、』

『我が足、』

『此の面に絡はるは。』

『水に拵がる黒髪ぢや、』

『山の婆々の白髪のやうに、すく／＼と痛うは刺さぬ。』

『蛇よりは心地よやな。』と次第に声が風に乗りに行く……

## 二十四

びやうくと凄<sup>すこ</sup>い声<sup>こゑ</sup>で、形<sup>かたち</sup>は見<sup>み</sup>えず、沼<sup>ぬま</sup>の上<sup>うへ</sup>で空<sup>そら</sup>ぎまに犬<sup>いぬ</sup>が啼<sup>な</sup>く。

『犬<sup>いぬ</sup>よ、犬<sup>いぬ</sup>よ。』

『おう。』と吠<sup>ほ</sup>えた。

『人間の目<sup>め</sup>には見<sup>み</sup>えぬ……城<sup>しろ</sup>山<sup>やま</sup>の天<sup>てん</sup>守<sup>しゆ</sup>の上<sup>うへ</sup>に、女<sup>をんな</sup>は梁<sup>たばり</sup>から釣<sup>つる</sup>して置<sup>お</sup>く、と男<sup>をとこ</sup>に言<sup>い</sup>へ!』

『何<sup>なに</sup>が、彼<sup>あ</sup>の耳<sup>みみ</sup>へ入<sup>はい</sup>らう。』

『わん、と啼<sup>な</sup>いたら、犬<sup>いぬ</sup>だと思<sup>おも</sup>はう、彼<sup>あ</sup>の痴<sup>たわけ</sup>漢<sup>げ</sup>が。』

と嘲<sup>あざけ</sup>る声<sup>こゑ</sup>。傍<sup>かたはら</sup>から老<sup>ふ</sup>けた声<sup>こゑ</sup>して、

『……其<sup>そ</sup>の言<sup>こと</sup>附<sup>づけ</sup>は、犬<sup>いぬ</sup>では不<sup>い</sup>可<sup>か</sup>ぬ。

時<sup>ほと</sup>鳥<sup>とぎす</sup>に一<sup>ひと</sup>声<sup>こゑ</sup>啼<sup>な</sup>かせろ

。』

『まだく、まだく、山やまの中の約束やくそくは、人間にんげんのやうに間違まちが

はぬ。今は未だ時鳥ほとぎすの啼なく時節じせつで無い。』

『唯姿たすがただけ見みせれば可いい。温泉宿ゆのやどの二階にかいは高たかし。あの欄干らんかんから

飛込とびこませろ、……女房にようぼうは帰かへらぬぞ、女房にようぼうは帰かへらぬぞ、と

羽はねで天井てんじやうをばさばさ遣やらせろ。』

『男をとこは、女をんなの魂たましひが時鳥ほとぎすに成なつた夢ゆめを見みて、白しろい毛布けつとで包つんで

取とらうと血眼ちまなこで追駆おつかけ回まはさう……寐惚ねぼけ面づら見みるやうだ。』

どつと笑わらつて、天守てんしゆの方ほうへ消きえた後あとは、颯々さつさつと風かぜに成なつた。

が、田畠野たばたけのの空そらを、山やまの端差はさして、何なんとなく暗やみながら雲くもがむ

くむくと通とほつて行ゆく。其その氣勢けはひが、やがて昼間ひるまみ見た天守てんしゆの棟むねの

うへにつ<sup>つ</sup>上に着いた程に、ド、ンと<sup>すご</sup>凄<sup>おと</sup>い音がして、足代に乗つた目の下、  
 老人が沈めて去つた四つ手網の真中あたりへ、したゝかな物<sup>もの</sup>  
 の落ちた音。水が環に成つて、颯と網を乗出して展げた中へ、天<sup>て</sup>  
 守の影が、壁も灰白く見えるまで、三重あたりを樹の梢に<sup>きこずゑ</sup>  
 囲まれながら、歴然と映つて出た。

不思議や、其の天守の壁を透いて、中に灯を点けたやうに、  
 うをかたち魚の形した黄色い明のひらくするのが、矢間の間から、深い処<sup>ふかところ</sup>  
 に横開<sup>よこひら</sup>けで、網の目が映るのか凡そ五十畳ばかりの広間が、水<sup>み</sup>  
 底から水面へ、斜に立懸けたやうに成つて、ふわくと動い<sup>うご</sup>  
 て見える。

他に何も無く誰も居らぬ。灯唯一つ有る。其の灯が、背中から

淡く射して、真白な乳の下を透す、……帯のあたりが、薄青  
 く水に成つて、ゆらくくと流れるやうな、下が裙に成つて、一  
 寸灯の影で胸から切れた形で、胸を反らした、顔を仰向けに、  
 悚然とするやうな美しい婦。

処で、水へ映る影と言へば、我が面影を覗くやうに、沼に向

つて、顔を合はせるやうに見えるのであらう、と思ふたが違う。

——黒髪が岸へ、足が彼方へ、たとへば向ふの汀から影が映す  
 のを、倒に視める形。つく／＼と見れば無残や、形のない声が  
 言交はした如く、頭が畳の上へ離れ、裙が梁にも留まらずに上か  
 ら倒に釣して有る……

と身を悶くか水が揺れるか、わなくと姿が戦く——天守の

影かげの天てんじやう井いから真ま黒くろな雫しづくが落おちて、其その手足てあしに懸かつて、其そのまゝ髪かみの毛けを伝つたふやうに、長ながく成なつて、下したへぼたくくと落おちて、ずらりと伸のびて、廻まはりつ畝うねりつするのを、魚うをの泳およぐのか、と思おもふと幾いくすぢ条ぢかの蛇へびで、梁うつばりにでも巢すをくつて居ゐるらしい。

然さうかと思おもふと、膝ひざのあたりを、のそくと山猫やまねこが這はつて通とほる。階はしご子したの下あがから上あがつて来くるらしく、海豚いるかが躍をどるやうな影法師かげぼうしは狐きつねで、ひよいと飛とび上あがるのもあれば、ぐるくと歩ある行き廻まはるのもあるし、胸どうを伸のばして矢間やまから衝つと出でて、天守てんしゆの棟むねで鯨しやちほ立ただちに成なるのも見みえる。

時々とき／＼ひらくと鳥からすが出でて、翼つばさで、女をんなの胸むねを払はたく……  
中なかに見みる目めも恐おそろしかつたは、——茶ちやと白しろ大斑おほまだらの獸けものが一いつ頭とう、

てんしゅの階子はしごを、のしくと、蹄ひづめで踏ふんで上あつて、畳たたみを抱だいて人ひと  
 のやうに立たち上あつた影法師かげぼしが、女をんなの上うへを横よこに通とほると、姿すがたは隠かくれ  
 て、颯さつと蒼あをく成なつた面影おもかげと、ちらりと白しろい爪つまさき尖さばかりの残のこつ  
 た時ときで——獸けものが頓やがて消きえたと思おもふと、胸むねを映うつした影かげが波なみだ立ち、髪かみ  
 を宿やどした水みづが動うごいた……  
 『御身おみが女によう房ぼうの光景ありさまぢや。』と坊主ぼうずが私わたしの顔かほの前まへへ、何故なぜ  
 か大おほきな掌そのひらひらを開ひらけて出だした。』

あつらもの  
誂へ物

## 二十五

「わたしを引いて退つたんです。」と雪枝は尚ほ語り続けた。

「……水の中からもなく、空からもなく、幽に細々とし

た消えるやうな、少い女の声で、出家を呼んだ、と言ひます。

而して、百年以来、天守に棲む或怪いものゝ手を攫はれ

て、今見らるゝ通りの苦艱を受ける……何とぞ此の趣を、温泉

に今も逗留する夫に伝へて、寸時も早く人間界に助けられた

い。救ふには、天守の主人が満足する、自分の身代りに成る

ほどな、木彫の像を、夫の手で刻んで償ふ事で。其の他に助かる

術すべはない……とあつた。

『都みやこの人、唯ただ私わたしが口くちから言いふたでは、余あまの事ことに真まとされまい。：

：あはれな犠いけにえ牲をんなの婦をんな人も、唯ただ慙たがう申まをしたばかりでは、夫をも心こころに

疑うたがひませう……今いま其その印しるしを、とい言いふてな、色いろは褪あせたが、可か愛あいい

唇くちびるを動うごかすと、白しろ歯はに啣くはえたものがある。白しろ魚うをの目めのやうな黒くろ

点ぼち々くが一つ見みえた……口くちからは不ぶ躋しつけながら、見みらるゝ通とほり

縛いましめの後うしろ手でなれば、指ゆびさへ随ま意ゝには動うごかさず……あゝ、苦くるし

い。と総そう身しんを震ふるはして、小ちひさな口くちを切せつなさうに曲ゆがめて開あけると、

煽あふつ水みづに搔かき乱みだされて影かげが消きえた。憂かちり然りと音おとして足あじろ代うへの上へ、大お

空ほぞらからハタと落おちて来きたものがある……手てに取とると霰あられのやうに

冷つめたかつたが、消きえも解とけもしないで、破やぶれ法ごころ衣もの袖そでに残のこつた。

『印しるしはこれぢや。』

と私の掌わたしのひらを開あけさせて、ころりと振ふつて乗のせたのは、忘わすれもしない、双すごろく六谷くだにで、夫婦ふうふが未み来らいの有あり無なしを賭かけ為しやうと思おもつて買かつた采さい

だつたんです。

『都みやこの人ひと、』

と坊主ぼうずは又また更あらためて、

『御身おんみは木彫きぼりを行やるかな。』

『行やります！』

と答こたへた時とき、私わたしは蘇よみ生がつたやうに思おもつた。水みづも白しろく夜よも明あかる成なつた……お浦うらの行ゆく方も知しれ、其その在あり所かも分わかり、草鞋わらぢや松たいまつ明まつで探さがつた処ところで、所詮しよせん無駄むだだと断念あきらめも着つく……其それに、魔物まものの手てから女に

ようぼう  
房を取返す手段も出来た。我が手に身代の像を作れと云ふ。敢て黄金を積み、山を崩せ、と命ずるのでは無いから、前途に光明が輝いて、心は早や明かに渠を救ふ途の第一歩を辿り得た。

草を開いて、天守に昇る路も一筋、城ヶ沼の水を灌いで、野山をかけて流すやうに足許から動いて見える。

我が妻、聞くが如くんば、御身は肉を裂かれ、我は腸を断つ。相較べて劣りはせじ。堪へよ、暫時、製作に骨を削り、血を灌いで、其の苦痛を償はう、と城ヶ沼に対して、瞑目し、振返つて、天守の空に高く両手を翳して誓つた。

其の時、お浦が唇を開いて、僧の手に落したと云ふ、猪の牙の

采を自分の口に含んで居た。が、同じ舌の尖に触れた、と思ふと血を絞つて湧き出づる火のやうな涙と、もに、ほろり、と采が手に落ちた。其の掌を忘るゝばかり心を詰めて握占めた時、花の輪が渦くやうに製作の興が湧いた。——閉づる、又開く、扇の要を思着いた、骨あれば筋あれば、手も動かう、足も伸びやう：風ある如く言はう：と早や我が作る木彫の像は、活きて動いて、我が身ながらも頼母しい。さて其の要は、……手に握つた采であつた。

天が命じて、我をして為さしむる、我が作す美女の立像は、其の掌に采を包んで、作の神秘を胸に籠めやう。言ふまでも無く、其の面影、其の姿は、古城の天守の囚と成つた、最惜い

つま妻を其のまゝ、と豁くわつぜん然ぜんとして悟さとると同時どうじに、腕うでには斧をのを取る  
 ちからこも力が籠こもつて、指ゆびと指ゆびとは鑿のみを持もたうとして自然ひとりで動うごく——時ときなる  
 かなさくこうべかざ哉ざ、作さくの頭こうべに飾かざるが如ごとく、雲くもを破やぶつて、晃きら々と星ほしが映うつつた。  
 ほししたと星ほしの下したを飛とんで帰かへつて、温泉いでゆの宿やどで、早はや準じゆん備びを、と足あしが浮う  
 く、と最もう遠とほく離はなれた谿河たにがはの流ながれが、砥石といしを洗あらふ響ひびきを伝つたへる。

## 二十六

さ然さうすると、心こゝろに刻きざんで、想さう像ぎやうに製つくり上あげた……城しろの俘虜とりこを  
 もけい模型もけいと為した彫像てうざうが、一いち団だんの雪ゆきの如ごとく、沼縁ぬまべりにすらりと立たつ。  
 て手を伸のべよ、と思おもへば伸のべ、乳ちを蔽おほへと思おもへば蔽おほひ、髪かみを乱みだせと

おも思へば乱れ、結べよ、と思へば結ばる——さて、衣を着せやうと思へば着る。

作の出来栄を予想して、放つ薫、閃めく光の如く眼前に露はれた此の彫像の幻影は、悪魔が手に、帯を奪はうとして、成らず、衣を解かうとして、得ず、縛められても悩まず、鞭つても痛まず、恐らく火にも焼けず、水にも溺れまい。

見よく、同じ幻ながら、此の影は出家の口より伝へられたやうな、倒に梁に釣される、繊弱い可哀なものでは無い。真直に、正しく、美しく立つ。あゝ、玉の如き肩に、柳の如き黒髪よ、白百合の如き胸よ、と恍惚と我を忘れて、偉大なる力は、我が手に作らるべき此の佳作を得むが為め、良匠の精力を

して短き時間に尽さしむべく、然も其の勞力に仕払ふべき、  
 報酬の量の莫大なるに苦んで、生命にも代へて最惜む恋  
 と人を仮に奪ふて、交換すべき条件に充つる人質と為た  
 に相違ない。

卑怯なる哉、土地祇、……実に雪枝が製作の美人を求めば、  
 礼を厚くして来り請はずや。もし其の代価に苦むとならば、玉を  
 捧げよ、能はずんば鉞石を捧げよ、能はずんば巖を欠いて来  
 り捧げよ。一枝の桂を折れ、一輪の花を摘め。奚ぞみだりに  
 妻に仇して、我をして避くるに処なく、辞するに其の術なからし  
 むる。……汝等、此処に、立処に作品の影の頭はれたる  
 此の幻の姿に対して、其の礼無きを恥ぢざるや……

と背後うしろから視ながめて意氣昂いきあがつて、腕うでを拱こまぬいて、虚空こくうを睨にらんだ。腰こしには、暗夜あんやを切きつて、直たゞちに木像もくざうの美女たをやめとすべき、一口ひとふりの宝刀ほうたうを佩おびたる如ごとく、其その威力みりよくに脚あしを踏ふんで、胸むねを反そらした。「本氣ほんきの沙汰さたではない、世よにあるまじき呵責かしゃくの苦痛くつうを受けて居ゐる、女房にようぼうの音信おとづれを聞きいて、赫くわつと成なつて氣きが違ちがつたんです。」

我われと我わが想像さうぎやうに酔よつて、見惚みとれた玉たまの膚はだの背せを透なか透ほして、坊主ぼうずの黒くろい法衣ころもが映うつつ、と水みづの中なかに天守てんしゆの梁うつぱりに釣つり下げられた、其その姿すがたを獸けものの襲おそふ、其その倅おもかげを歴然あり／＼と見みた。無慘むざんの状さまに、ふつと搔消かきけした如ごとく美しいものは消きえた。

『呼よぶわ、呼よぶわ。』

と云いつた坊主ぼうずの聲こゑ。

『おゝいゝ、』

『お客様、お客様。』

と叫ぶのが、遙に、弱い稲妻のやうに夜中を走つて、  
 ひぼつなはてさまよの灯が点々驟に徉徜ふ。

提灯

『お客様。』

『旦那、』

『奥方様。』

あゝ、又奥方様をくはせる……剩へ、今心着いて、耳を澄  
 ませて聞けば、我自からも、此の頃では鉦太鼓こそ鳴らさぬけ  
 れども、土俗に今も遣る……天狗に攫はれたものを探す方法で、  
 あの通り呼立て居る——成程然う思へば、何時温泉の宿を出

て、何処どこを通つて、城ヶ沼じやうぬまに來たか覺えて居をらぬ。

『御身おみを呼ぶよぢやろ、去いなつしやい。』と坊主ぼうずが、はつと又また其その掌てのひらを拵つろげた。此この煽動あふりに横顔よこがほを払はらはれたやうに思つて、蹠よろとしたが、惟おもふに幻覺げんかくから覺さめた疲労ひろうであらう、坊主ぼうずが故意こいに然さうしたものでは無ないらしい。

『御身おみが内儀ないぎの言ことづけを忘わすれまいな。』

『忘わすれない。』

と奮然ふんぜんとして答こたへた。既すでに鬼神きじんに感応かんおうある、芸術家げいじゆつかに對たいして、坊主ぼうずの言語げんごと挙動きよどうは、何なんとなく嘗なめ過すぎたやうに思おもはれたから……其そのまゝ肩かたを聳そびやかして、三みつ四よつ輝かゞやく星ほしを取とつて、直たゞちに額ひたひを飾かざる意氣組いきぐみ。背せを高たかく、足あしを踏ふんで、沼ぬまの岸きしを離はなれると、

あじろ 足代に突立つて見送つた坊主の影は、背後から蔽覆さる如く、  
 おほひかたちな 大なる形に成つて見えた。

## 二十七

いでゆ 温泉の宿を差して、城ヶ沼から引返す途中は、気も漫に、  
 はじ 直ぐにも初むべき——否、手は既に何等か其に向つて働く……新  
 じげふ な事業に對する感 興の雲に乗るやう、腕が翼に成つて、星の  
 したと 下を飛ぶが如き心地した。

か 恚うまで情の昂ぶつた処へ、はたと宿から捜しに出た一行七  
 ちはちにん 八人の同勢に出逢つたのである……  
 どうぜい 定 紋の着いた提

灯らんが一群いちぐんの中に三ツばかり、念仏講ねんぶつかうの崩れとも見えれば、  
 尋常じんじやう遠出とほでの宿引やどひきとも見えるが、旅籠屋はたごやに取つては實際じつさい容  
 易ういな事では無なからう、——仮初かりそめに宿やどつた夫婦ふうふが、婦をんなは生死しやうしも行  
 衛くゑも知れず、男をとこは其それが為ために、殆ほとんど狂乱きやうらんの形かたちで、夜昼ひるよるとも無  
 しに迷まよひ歩行あるく……  
 不面ふめん目もくゆるゑ、国許くにもとへ通知つうちは無用むよう、と当人たうにんは堅かたく留とめたも  
 の、唯はい、然さやうで、とばかりで旅籠屋はたごやでは済すまして居ゐられぬ。  
 で、宿やどの了れう見けんばかりで電報でんぱうを打うつた、と見みえて其處そこで出逢であ  
 つた一群いちぐんの内うちには、お浦うらの親類しんるゐが二人ふたりも交まつた、……此この中なか  
 に居ゐない巡査しゆんさなどは、同じおな目的もくてきで、別べつの方面はうめんに向むかつて居ゐ  
 らしい。

畝路あぜみちで出合であひがしらに、一同いちどうは騒さわぎ立たてた。就なかんづく中ちゆう、わぎ

く東とうきやう京きやうから出張でばつて来たき親類しんるゐのものは、或あるひなくさは慰なぐさめ、或あるひは

励はげまし、又また戒たまめなどする種々いろ／＼の言葉ことばを、立たてつゞ続けに※舌しやべつたが、

頭あたまから耳みみにも入れいれず……暗闇くらやみの路次ろじへ入はいつて、ハタと板いた堀べいに

突つき当あたつたやうに、棒立ぼうだちに成なつて居ゐたが、唐突だしぬけに、片手かたての掌ひら

を開あけて、ぬい、と渠等かれらの前まへへ突つき出した。坊主ぼうずが自分じぶんに向むかつて同

じ事をこと為したのを、フト思おも出したのが、殆ほとんど無むい意識しきに挙ふる動まひに出でた。

トすくな尠なからず一いち同どうを驚おどろかして、皆みなだちくくと成なつて退すさる。

ト此この鑿のみを持もち、鑿たがを持もつべき腕かひは、一ひと度た掌めを返ひらかへ、多た勢せいを

圧あつして将しやう某ぎ倒だふしにもする、大おほなる権威けんゐの備そなはるが如ごとくに思おもつて、

会くわい心しん自得じとくの意いを、高たか声こゑに漏もらして、呵から々くと笑わらつた。

『御苦勞御苦勞、真に御骨折を懸けて誰方にも相濟まん。が、最う御心配には及ばんのだ。——お聞きなさい、行衛の知れなかつた家内は、唯今其の所在が分つた。……十二、無事か？無事かではない。考えて見たつて知れます。纖弱い婦だ、然も蒲柳の質です。一寸躓いても怪我をするのに、方角の知れない山の中で、搔消すやうに隠れたものが無事で居やう筈はないではないか。

決して安泰ではない。正に其の爪を剥ぎ、血を絞り、肉を削るやうな大苦艱を受けて居る、倒に釣られて居る。：

……

と戦いたが、すぐ肩を聳かした。

『何処どこに居ゐる？』

何なに、

お浦うらの所在ありかは何処どこだ、

と言いふのか。いや、

君方きみがたに、其それは話はなしても分わかるまい。

水みづの底そこのやうな、

樹きの梢こずえのや

うな、雲くもの中なかのやうな、

……それぢや分わからん、

分わからない、と言いふ

のかね、勿もちろん論ろん分わかりませんとも！

吾輩わがはいには丁ちやんと分わかつて居ゐる。

位置ゐちも方角はうがくも残のこらず知しつてる、

指ゆびして言いへば、

土地とちのものは残のこらず知しつてる。

けれども其それを

話はなすとなると、

それ行ゆけ、救すくへで、

松明たいまつを振ふり、鯨波ときの聲こゑを揚あ

げて騒さわぐ、騒さわいだ処ところで所詮しよせん駄目だめです。

誰たれが行いつても何者なにものが騒さわいでも、迎とても彼かれは救すくひ出だせない。

おゝ！ 君達きみたちにも粗想ぼざう像ざう出で来るか、お浦うらは魔まに攫さらはれた、

天狗てんぐが掴つかんだ、……恐おそらく然さうだらう。……が、私わたしは此これを地祇とちのか

神のみの所業しよげふと惟おもふ。たゞし、鬼おににしろ、神かみにしろ、天狗てんぐにしろ、何なにのためにお浦うらを攫さらつたか、其その意味いみが分わかるまい、諸君しよくんには知しれなからう。

ひとりこれを知るものは吾輩わがはいだよ。而そして此これを救すくふものも又吾輩またわがはいでなければ不可いけない。然しかも彼かれを連れ返かへる道みちは、丁ちやんと最もう着ついて居ゐるんだ。唯少時たゞしばらくの辛抱しんぼうです。いやく、決して貴下あなたがた方が御辛抱ごしんぼうなさるには及およばん。辛抱しんぼうをするのはお浦うらだ、可哀かあい想さうな婦をんなだ。我慢がまんをしてくれ、お浦うら、腕うでは確たしかだ。』

と、掌てのひらを開ひらいて、ぱつ、と出だす。と一同いちどうはどさくと又退まなつた。吃驚びつくりして泥田どろたへ片脚かたあし落おとしたのもある、……ばちやりと音おとして。

……

「気が違った。」

「変だ。」

「真物だ。……と囁き合ふ。」

ほこら  
祠

## 二十八

狂気した、変だ、と云ふのは言葉の切目毎に耳に入つた。が、

これほど確たしかな事ことを、渠等かれらは雲くもを掴つかむやうに聞きくのであらう。我われは手てに握にぎつて、双さうの眼まなこで明あかに見みる采さいの目めを、多勢たせいが暗あん中ちゆうに摸も索さくして、丁ちやうか、半はんか、生せいか、死しか、と喧がやく々さわ騒さわぎ立たてるほど可をかし笑わらな事ことは無ない。

『はゝゝ、大丈夫だいじやうぶ、心配しんぱいは無ないと云いふに、——お浦うらの所在ありかも、救すくふ路みちも、すべて掌たなごゝの中ちゆうに在ある。吾輩わがはいが掴つかんで居ゐる。要えうは唯たゞ掴つかんだ此この手てをひら開ひらく時間じかんを待まつ事ことだ。——今いま開あけ、と云いつても然さうは不可いかん。唯たゞ、開ひらくのではない、開ひらいてお浦うらの掌ひらかへへ返かへすんだ、いやゝ彫てうぎやう像こぶしの拳おきに納おさめるんだ。』

と、益ます々く、こんがらかつて、自分じぶんにも分わからなく成なる。先方さきのきよとつくだけ此方こつちは苛いらだ立つ。言いへば言いふほど枝葉えだはが茂しげつて、路みちが岐わか

れて谷が深く、野が広く、山が高く成つて、雲が湧き出す、霞がかゝる、果は焦込んで、空を打つて、

『皆、これだ。』

と高い処から揮下ろした拳の中に、……采を掴んで居た事は云ふまでも無い。

『……狂人でも何でも構はん。自分が生命がけの女房を自分が救ふに間違は有るまい。凡て任して貰はう。何でも私のするまゝに為して下さい。……』

処で、私が、お浦を救ふ道として、進むべき第一歩は、何処でも可い、小家を一軒探す事だ。小家でも可い、辻堂、祠でも構はん、何でも人の居ない空屋が望みだ。

なに 何、そんな処ところにお浦うらが居ゐるか、と……詰つまらん事を——お浦うらの居ゐ
  
 どころ 処ところは居ゐる処ところで話はなしが違ちがう。空家あきやを探さがすのは私わたしが探さがして私わたしが其処そこへ
   
 はい 入はいるんだ。——所帯しよたいを持もつのぢやない。……え、落着おちついて、
   
 き 聞きかなければ不可いかん。
   
 よろし 宜よろしいかね、此これを要えうするに、少すくなくとも空屋あきやに限かぎる……有ありますか、
   
 ひと 人の居ゐない小家こやはあるか。有あれば、其処そこへ行ゆく。これから此この足あし
  
 ひと 直すぐに行ゆきます。——宿やどへ帰かへつて一先ひとまづ落着おちつけ？ ……吞気のんきな
   
 こと 事ことを。落着おちついて相談さうだんと？ ……此この上何うなんの相談さうだんを為するんです。
   
 うら お浦うらを救すくふのには一いつ刻こくを争あらそふ、寸秒すんべうを惜をしむ。早速さつそくさあ、人ひと
  
 むの 居ゐない小家こや、辻堂つじだう、祠ほこら、何なんでも構かまはん、其処そこへ行ゆかう。行いつ
   
 す 直すぐに仕事しごとにかゝる。が、誰たれも来きては不可いけない、屹きつと来きては不可いけな

い、いづれ、やがて其そのの仕事しごとが出来ると、お浦うらと一いつ所に、諸もろと共もにお目めに懸かつて更あらためて御挨拶ごあいさつをする。

しかし、恚かう言いふのを信しんじないで、私わたしに任まかせることを不安ふあん心んと思おもふなら、提ちやうちん灯とうの上うへに松明たいまつの数かずを殖ふやして、鉄砲持てつぱうじ参さんで、隊たいを造つくつて、喇叭らつぱを吹ふいてお捜さがしなさい、其それは御勝手ごかつてです。

』と嘲あざけるやうに又またアハアハ笑わらふ。いや、気味きみの悪わるい……

『あれ、天狗様てんぐさまが憑のりうつ移うつらしやつた。』

『魔道まどうに墜おちさしたものだんべい。』  
と密ひそめいて言いふのが聞きこえた。

が、最もう、そんな事ことに頓とんちやく着やくしない。人にんげん間げんなどには目めも懸か

けないで、暗い中を矢鱈に、其処等の樹を眺めた。刻むに佳い枝や、幹や、と目を光らす……これも眼前、魔に心を通はす挙動の如くに見えたであらう。

けれども言出した事は、其の勢だけに誰一人深切づくにも敢て留めやうとするものは無く、……其の同勢で、ぞろ〜と温泉宿へ帰る途中、隙を片傍に引込んだ、森の中の、とある祠へ、送込んだ……と言ふよりは、づかく踏込んだ。後に踵いて来て、渠等は狐格子の外で留まつたのである。

提灯を一個引奪つて、三段ばかりある階の正面へ突立つて、一揆を制するが如く、大手を拡げて、『さあ、皆帰れ。而して誰か宿屋へ行つて、私の大鞆を脊負

つて来て貰はう。——中にすべて仕事に必要道具がある。：  
 私は最う、あの座敷へ入つて、脱いである衣服、解いてある紅  
 い扱帯を見るに忍びん。……彼が魔物の手に懸つて、身悶へしな  
 がら、帯からはじめて解き去らるゝのを目の前に見るやうだから  
 』

親類の一人、インバネスを着た男が真前に立つて、皆ぞろ  
 くど帰つた。……其の影が潜つて出る、祠の前の、倒れかゝつ  
 た木の鳥居に張つた、何時の時のか、注連繩の残つたのが、二ツ  
 三ツのたくつて、づらりと懸つた蛇に見えた……

## 二十九

はて、面白おもしろい。あれが天てんじやう井つたを伝つたふ朽くちなは縄ななら、其その下したに、しよんぼりと立たつた柱はしらは、直すぐにお浦うらすの姿がたに成なる……取とつて像ざうを刻きざむ材ざいりやう料つに遣つかうと為しやう。鋸のこぎりで挽ひいて、女をんなの立りつ像ざうだけ抜ぬいて取とる、と鳥居とりゐは、片かた仮か名なの中なの字じに成なつて、祠ほこらの前まへに、森もりの出で口ぐちから、田たん甫ぽ、畷なはて、山やまを覗のぞいて立たつであらう。

と凝じつと視ながめる、と最もう其その鳥居とりゐの柱はしらの中なかへ、婦をんなの姿すがたが透すいて映うつる……木目もくめが水みづのやうに膚はだに絡まとふて。

『旦那様だんなさま、お荷物にもつな持もつて参めえりやした、まあ、暗くれえ処ところに何なにを為してござらつしやる。』

成程なるほど、狐きつね格子がうしに釣つつて置おいた提ちやう灯ちんは何いつ時つまでも蠟らふ燭さく

が消たずには居らぬ。……気が着くと板椽に腰を落し、段に脚を投げてぐつたりして居た。

靴を脊負つて来たのは木樵の権七で、此の男は、お浦を見失つた当時、うかく城趾へ徘徊つたのを宿へ連れられてから、一寸々々出て来ては記憶の裡へ影を露はす。此と、城ヶ沼の黒坊主の蒼ざめた面影を除いては、誰の顔も判然覚えて居なかつた。

『燈明を点けさつしやりませ。洋燈では旦那様の身躰危いと言ふで、種油提げて、燈心土器を用意して参りやしたよ。追附け、寝道具も運ぶでがすで。気を静めて休まつしやりませ。……私等も又、油断なく奥様の行衛な捜しますで、えら、

こころくる  
心を狂はさつしやりますな。』

と言ふく燈心を点して、板敷の上へ薄縁を伸べたり、毛

布を敷く……

『私が頼まれましたのに、ちよくく見廻りに参りますだ。用が

あるなら、言着けてくらつせえましょ。』

と背後むきに踵で探つて、草履を穿いて、壇を下りて、てくく

出て行く。

『待て、待て。』と追つて出て、鳥居をするくと撫で、見せた。

『村一同へ言づけを頼まう。此の柱を一本頂く……此の鳥居

のな。……後で幾らでも建立するから、と然う言つてな。』

『はい、……え、東京からござつた旦那方も其のつもり

で相談さうだん打ぶたしつた。奥様おくさまの居ゐさつしやる処ところの知しれるまでは、  
 なんでもお前めえさま様さまする事ことに逆さからはねえやうにと言いふだで、随ず分ぶん好すき  
しだい次第しだいにさつしやるが可ようがんです。だが、もの、鳥居とりゐの木柱きばしらな何ど  
 うするだね。』

『此これを刻きぎんで像ざうを造つくる、婦をんなのな、それは美うつくしい、先まづ弁天べんてん様さまと  
 言いつたもんだ、お前まへにも見みせて遣やらう、吃びつくり驚おどろするなよ。』  
 と其その呆あきれ顔がほてを掌のひらでべたりと撫なでる。と此こゝ処ひとりへ一人ひとりで遣やつて来く  
 ほど性根しやうねの据すはつた奴やつ、突いきなり然はやごし早腰はやこしも抜ぬかさなんだが、目めを蔽おほ  
 ふて、面おもてを背そむけて、

『いとしばげな、御道理ごもつともでござります。』  
 とのそく帰かへる……矢張やつぱりお浦うらを攫さらはれた為ために、気きが違ちがつたと思おも

ふらしい。いや、是だから人間の来るのは煩い！

「……しかし、其の後とも三度の食事、火なり、水なり、祠へ来て用を達してくれたのは其の男で。時とすると、二時三時も傍に居て熟と私の仕事を見て居る。口も出さず邪魔には成らん。」

で、下仕事の手伝ぐらゐるは間に合つたんです。」

と雪枝は更めて言つた。

「処で、一刻も疾く仕上げにしようと思ふから、飯も手掴みで、

水で嚙下す勢、目を据えて働くので、日も時間も、殆んど昼夜

の見境はない。……女の像の第一作が、まだ手足までは出来

なかつたが、略顔の容が備はつて、胸から鳩尾へかけて膨りと

成つた、木材に乳が双んで、目鼻口元の刻まれた、フトした

時……

『どうだ、大分ものになつたらう、』と聊か得意で。丁ど居合は  
 せた権七の顔を挙げて恚う見ると……日に焼けた色の黒い  
 のが又恐ろしく真黒で、額が出て、唇が長く反つて、目ががっ  
 くりと窪んだ、其の目がピカくと光つて、ふツふツ、はツはツ、  
 と喘ぐやうな息をする。……

供揃へ

## 三十

いや、其その息いきの臭くさい事こと……剩あまつさへ、立たつでもなく坐するでもなく、  
 中ちゆうご腰しやがに蹲やまをとこんだ山ひざ男をの膝ひざが折をれかゝつた朽木くちぎ同然どうぜん、節ふしく  
 立だつてギクリと曲まがり、腕うでぐみ組みをした肱ひぢばかりが胸むねに附くつ着つき、布ぬ  
 のここそでもとせばま子りやうはうの袖はの元ところへ窄さなつて両さながら方つばさへ匆とねた処ばさが、宛然さながらの翼ばさ。  
 『権ごんしち七しちぢやない！ 小天狗こてんぐが、天守てんしゆから見張みはりに来きたな。』  
 おも思おもはず突立つゝたつと、出来できかゝつた像ざうを覗のぞいて、角つのを扁平ひらたくしたや  
 うな小鼻こばなを、ひいくひいく、……ふツふツはツはツと息いきを吹ふいて  
 居ゐたのが、尖とがつた口くちを仰のけ様さまにひと一つぶるツと振ふるふと、面めんを倒かさにし  
 たと思おもへ。

彫像の眼球をグサリと刺した。

はつと思へば、烏ほどの真黒な鳥が一羽虫蝕だらけの格

天井を颯と掠めて狐格子をばさりと飛出す……

目一つ抉られては半身をけづり去られたも同じ事、是がため

に、第一の作は不用に帰した。

……余りの仕儀に唯茫然として、果は涙を流したが、いやノ

ゝ、爰に形づくられた未製品は、其の容半ばにして、早くも何

処にか破綻を生じて、我が作を欲するものゝ、不満足を来たし

たのであらう——いかさまにも一つ残つた瞳を見れば、お浦の其

より情を宿さぬ、露も帯びぬ、……手足既に完うして斧を以て碎

かれても、対手が鬼神では文句はない筈。力を傾け尽さぬうち、

あらかき 予め其の欠点を指示して一思ひに未練を棄てさせたは、寧ろすくな 鄙ひからぬ慈悲である……

で、直ちに木材を伐更めて、第二の像を刻みはじめた。

が、又此の作に対する迫害は一通りではないのであつた。猫

が来て踏んで行抜ける、鼠が噛る。とろくと睡つて覚めれば、

犬いぬが来てペろくと嘗めて居る……洞中を蛇が巻く、今穴を出

たらしい家守が来て鼻の上を縦にのたくる……やがては作者の

身からだ躰おそを襲ふて、手をゆすぶる、襟頸を取つて引倒す、何者

か知れずキチくと啼いて脇の下をこそぐり掛ける。

無残むざんや、其の中にも命を懸けて、漸と五躰を調へたのが、指が

折れる、乳首が欠ける、耳が撈げる、——これは我が手に打碎

いた、其そのの斧をのを揮ふるつた時とき、さくくさくらに成なり行ゆくく像ざうは、骨ほねを裂さく音おとがして、物もの凄すこく飛ひ驛だ山の笥こに響ひびいた。

其そのの夜よ更ふけから、しばらく正しやう躰たいを失うつたが、時ときも知しらず我われに返かへると、忽たちまち第三だい番さん目ぼんをめ作りはじめた、……時ときに祠ほこらの前まへの鳥とり居りは倒たふれて、朽くちたる繩なはは、ほろくと断きれて跡あともなく成なる。：

と今こんど度どのは完くわん成せいした。而そして本ほん堂だうの正しやう面めんに、支さも置おかず、内うち端はに組くんだ、肉にくづきのしまつた、膝ひざ脛はぎの釣つり合あひよく、すつくりと立たつた時とき、木きの膚はだは小こ刀なの冴さえに、恰あたも霜しもの如ごとく白しろく見みえた。……が扉とびらを開ひらいて、伝でん説せつなき縁えん起ぎなき由ゆい緒しよなき、一いつ躰たい風ふう流りうなる女によしん神んのまぎくとして露あらはれたか、と疑うたはれて、傍かたはら

の棚に残つた古幣の斜めに立つたのに対して、敢て憚るべき色は無かつた。

折から来合はせた権七に見せると、色を変へ、口を尖らせ、目を光らせて視めたが、其の面は烏にも成らず、……脚は朽木にも成らず、袖は羽にも成らぬ。

其処で、自分で引背負ふなり、抱くなりして、其の彫像を城趾の天守に運ぶ。……途中の塵を避けるため蔽がはりに、お浦の着換を、と思つて、権七を温泉宿まで取りに遣つた。

あとで、此の祠に籠つてから、幾日の間か鳥居より外へは出ない、身軀を伸々として大手を振つて畝路から睨へ出た——然まで遠くもない城ヶ沼の方へ、何となく足が向いて、ぶらりく

と歩行いたが、我が住居を出て其処等散歩をする、……祠の家にはお浦が居て留主をして、我がために燈火のもとで針仕事でも為て居るやうな、つひした楽しい心地がする。……細い杖を持たないのが物足りないくらゐなもので。

風もふわ〜と樹の枝を擦つて、はらく〜笑はせて花にしやうとするらしい、壺の中のやうではあるが、山国の夜は臙。

## 三十一

譬へば城ヶ沼を裏返して、空へ漲らした夜の色——寝をびれて戸惑ひをしたやうな肥つた月が、田の水にも映らず、山の姿も

照らさず……然うかと言つて並木の松に隠れもせず、谷の底にも  
 落ちないで、ふわりと便のない処に、土器色して、睨も畝も茫  
 と明いのに、粘つた、生暖い小糠雨が、月の上からともなく、  
 下からともなく、しつとりと来て、むらくくと途中で消える：  
 ……と髪も衣も濡れもしないで、湿ほい。が、手で撫で、見ても雫  
 は分らぬ。——雨が降るのではない、月が欠伸する息がかゝるの  
 であらう……そんな晩には獺が化けると言ふが、山国に其は相  
 応はぬ。イワナが化けて坊主になつて、殺生禁断の説教に  
 念仏唱へて辿りさうな。……  
 処を、歩行く途中、人一人にも逢はなんだ、が逢へば婦で  
 も山猫でも、皆坊主の姿に見えやうと思つた。

こんくと狐が啼いた。……犬の声ではない。唯ある松の樹の蔭で、つひ通りかゝつた足許で。

こんくとこんくと啼くのには、フト耳を傾けて、虫を聞くが如く立停ると、何かものを言ふやうで、

『コンクワイ、クワイ、来ぬかい、来ぬかい。』と恚う啼く。

『来ぬかい、来ぬかい、来ぬかい、案山子、来ぬかい案山子、』と又聞える。

聞く中に、畝の蔭から、ひよいと出て立つた、藁束に竹の脚で、瘦さらばへたものがある。……凧に吹かれぬ前に、雪国の雪が不意に来て、其のまゝ焚附にも成らずに残つた、冬の中は、真白な寢床へ潜つて、立身でぬくくと過ごしたあとを、草

枕くらで寐ね込んで居あた、これは飛驒山ひだやまの案山子かゝしである。

此この親仁おやぢ、破やぶれ籠みのの毛けを垂たらして、しよぼりとした躰ていで、ひよこひよこと動うごいて来て、よたりと松まつの幹みきへ凭よりかゝつて、と其処そこへ立たつて留とまる。

『来こんかい、案山子かゝし、来こんかい、案山子かゝし……』と例れいの聲こゑが尚なほ続つゞけて呼よぶ。

些ちと離はなれた畝あぜを伝つたつて、向むかふから又またひとつ、ひよいくと来て、ばさりと頭かしらを寄よせて同おなじく留とまる。と素まつ直すぐな躰なはてすぢ筋べつを、別べつに一個ひとつよたよたくくと、其それでも小刻こきぎみの一本脚いっほんあし、竹たけを早はやめて急いそいで近寄ちかよる。

此この後あとのなんぞは、何処どこで工面くめんをしたか、竹たけの小笠をかさを横よこちよに

被つて、仔細らしく、其の笠を歩行に連れてぱくくとうへしたに揺つたもので。

三個が、……其から土瓶を釣つて番茶でも煮さうな形に集まると、何かゞ又啼き出す。

『コーくくく、急がう急がう。』

ばさく、と左右へ分れて、前後に入乱れたが、やがて啜へ三個で並ぶ。

其時樹の上から、何やら鳥の声がして、

『何処へ行、何処へ行！』

で、がさりと枝を踏んだ音がした。何うやらものゝ、嘴を長く啜を瞰下ろす氣勢がした。

『ほこらだ。』

『ほこら、』

『ほこらへ行くだ。』

とひよつこり、ひよこり、ひよつこりと歩ある行き出だす……案山子かゝしどもの出向でむくのが、祠ほこらの方ほうへ、雪枝ゆきえの来きた路みちの方角ほうかくに当あたる。向むかふを指さして城ヶ沼じやうぬまへ身投みなげに行ゆくのでは無ないらしい。

待まて、よくは分わからぬ、其処そこ等らと言いふか、祠ほこらと言いふか、声こゑを伝つたへる生なまぬる暖よかぜい夜風よかぜもサテぼやけたが、……帰かへり路みちなれば引返ひきかへして、うかくと漫歩そゞろある行ききの踵きびすを返かへす。

『く、く、く、』

『ふ、ふ、』

『は、は、は、』と形も定めず、むや／＼の海鼠のやうな影法師が、案山子の脚もとを四ツ五ツむらく／＼と纏ふて進む。

「それは狐か犬らしい、其とも何か鳥が居て、上をふわ／＼と飛んだのかも分りません。」  
と雪枝は老爺に言ふのであつた……

## 三十二

「忘れもしない、温泉へ行きがけには、夫婦が腕車で通つた並木を、魔物が何うです、……勝手次第な其の躰でせう。」  
来る時は気がつかなくつたが、時に帰がけに案山子の歩行く後

から見ると、途中に一里塚のやうな小蔭があつて、松は其処に、梢が低く枝が垂れた。塚の上に跣坐して打傾いて頬杖をした、如意輪の石像があつた。と彼のたよりのない土器いろつき色の月は、ぶらりと下つて、仏の頬を片々照らして、木蓮の花を手向けたやうな影が射した。

其の前を、一列びに、ふらくくと通懸つて、

『御許され』と案山子の一つが言へば、

『御許され。』

と又一つが同じ言を繰返す。

『御許され、御許され。』と声が交つて、喧々と※舌つた、と

思はれよ。

## 『大儀ぢや』

と正しく如意輪が仰せあつた……

『はツ、』と云ふと一個、丁ど石高道の石碓へ其の一本竹を踏掛けた真中のが、カタリと脚に音を立てると、乗上つたやうに、ひよい、と背が高く成つて、直に、ひよこりと又同じ丈に歩行き出す。

人間が前へ出た時、如意輪の御姿は、スツと松蔭へ稍遠く、暗く小さく拝まれた。

雨がやゝ頻つて来た。

案山子の簀は、三つともぴしよくと音するばかり、——中に憎かつたは後から行く奴、笠を着たを得意の容躰、ものく

しや左右を眊しながら前途へ蹠踉く。

果して祠を指したらしい。

横へ切れて田畝道を、向ふへ、一方が山の裾、片傍を一

叢の森で仕切つた真中が、茫と展けて、草の生が朧月に、

雲の簇がるやうな奥に、祠の狐格子を洩れる灯が、細雨に浸む

だのを見ると——猶予はず其方へ向いて、一度斜に成つて折曲

つて列り行く。

其時氣に懸つたのは、祠の前を階から廻廊の下へ懸けて、

たゞ三ツ五ツではない、七八ツ、それ／＼十ウにも余る物の形が、

孰も土器色の法衣に、黒い色の袈裟かけた、恰も空摸様のや

うなのが、高い坊主と低い坊主と大な坊主と小さな坊主と、胡乱

々々動いて、むら／＼居る……

『やあ、お浦を黴る、』

と前へ行く案山子どもを、横に掠めて、一息に駆けつけて、いきなり階に飛附いて、唯見ると、扱も、寄つたわ、来たわ。僧形に見えた有りたけの人数は、其も是も同じやうな案山子の数々。——割つて通つた人間の袖の煽りに、よた／＼と皆左右に散つた、中には廻廊に倒れかゝつて、もぞ／＼と動くものもある。

正面に伸上つて見れば、向ふから、ひよこ／＼来る三個の案山子も、同じやうな坊主に見えた。

扉を入ると、無事であつた。お浦を其のまゝの彫像は、灯の

影かげにちらくくと瞳ひとみも動うごいて、人待顔ひとまちがほに立草たちくたび臥びれて、横よこに寝ねた

さうにも見みえたのである。

下したに敷しいた白毛布しろけつとの上うへには、所ところ狭せまく鑿のみも鉋かんも散ちらかり放ほうだ

題い。初手しよては此この毛布けつとに包くるんで、夜路よみちを城しろ趾あとへ、と思おもつたが、

——時ほと鳥とぎすは啼なかぬけれども、然さうするのは、身みを放はなれたお浦うら

の魂たましひを容いれたやうで、嘗かつて城じやう沼ぬまの縁ふちで旅僧たびそうの口くちから魔界まかいの暗あ

示んじを伝つたへられたゝめに——太いたく忌いまはしかつたので、……権ごん七しちに

取寄とりよせさせた着換きがえの衣きぬは、恰あたも祠かほこらの屋根やねに藤ふぢの花はなが咲さきかゝつた

のを、月つきが破つぶれ廂ひさしから影かげを落おとしたやうに届とどいて居ゐた。然しかも燃もえ

立たつばかりの緋ひの扱しごきは、今いまも其その腰こしのあたりをすゝと江すべ

つた如ごとく、足許あしもとに差置さしおかるゝ。

すがりつ  
 縋着けば、ころくと其その掌たなに秘そめた采さいが鳴なつた。

『ごごるか。』

『……………』

『ごごるか、ごごるか。』

みんず  
 と蚯蚓はの這こふやうな声ゑが階はしの処ところで聞きこえる。

『誰たれだ。』

と、うつかり、づくと出でると、つひ忘わすれた……づらりと其そ処こに案か山か子しども。

バサリ

## 三十三

其その中なかの孰いづれが言ものいふ？ 中ちゆう氣き病やみのやうな老ふけた、舌したつ不たらずで、  
『おねんぎよ。』と言いふ。

『おねんご。』

と又また訴つたうる。……

糠ぬか雨あめの朧おぼろ夜よに、小ちひき山さん廓かくの祠ほこらの前まへ。破やぶれ簞みののしよぼく  
した渠かれ等らの風ふう躰てい、……其その言いふ処ところが、お年ねん貢ぐ、お年ねん貢ぐ、と聞きえ  
て、未み進しんの科くわ条でうで水みづ牢らうで死しんだ亡もう者じやか、百ひやく姓しやう一いつ揆つきの怨お

んりやう  
 靈か、と思ひ附く。其の薙旗を挙げたのが此の祠であら  
 うも知れぬ。——が、何を求むる？ 其の意を得ない。熟と瞻れ  
 ば、右から左から階の前へ、ぞろぞろと寄つた……簞の摺合ふ音  
 して、

『うけとろ、』

『受け取らう。』

『おねんご受取る。』と言ふのが、何処から出る声か、一本竹  
 で立つた地の中から、ぶる／＼湧出す。

『おゝ、』

おも  
 と思はず合点した。

『人形か、此の彫像を受け取らうと言ふのか？』

なか  
中にも笠ある案山子の頷くのが、ぱくく動く。其は途中か  
らの馴染らしい。

『おゝさう、おぶおう、おぶさう。』と野良な音。恰も、おゝ、  
然う負はう、負され、と云ふが如し。

『可、可、』

で、衣服を被け、彫像を抱いたなり、狐格子を更めて開い  
て立出たつる、

『おい、案山子ども、』

と真面目に遣つた。今思へば、……言ふまでも無く何うかして居  
る。

『御苦労、御厚意は受取つたが、己の刻んだ此の婦は活きとるぞ。』

貴様きさまたちに持運もちほこばれては血ちの道みちを起おこさう、自分じぶんでおんぶだ。』  
 と高笑たかわらひをして、其処そこで肩かたの上うへに揺ゆ上すげた。抱だいても腕うでに乗の  
 つたのに……と肩越かたこしに見上みあげた時とき、天井てんじやうの蔭かげに髪かみも黒くろく上うへ  
のぞきこから覗のぞ込こむやうに見上みえたので、歴然ありくと、自分じぶんが彫刻師てうこくしに成な  
おさなときつた幼い時うんめいの運命うんめいが、形かたちに出でて頭あはれた……雨あめも此この朧おぼろ夜よを、  
ほそかすかゆき細く微ほそな雪ゆきのやうに白しろく野山のやまに降ふり懸かつた。  
 『出懸でかけるぞ、案内あんないするか、続つづいて来くるか。』  
 案山子かゝしどもは藁わらの乱みだれた煙けむりの如ごとく、前後あどさきにふら〜附添つきそふ。  
 ……而そして祠ほこらの樹立こだちを出離ではなれる時分じぶんから、希有けうな一行いっかうの間あひだに、  
ふたみふたみあかり灯つが点ついたが、光ひかりが有ありとも見みえず、ものうつつを映うつさぬでも  
な無い。たどへば月つきの其その本尊ほんぞんが霞かすんで了しまつて、田毎たごとに宿やどる影かげば

かり、縦たてに雨あめの中なかへふつと映うつる、宵よひに見みた土器色かはらけいろの月つきが幾いくつにも成なつて出でたらしい。

其それが案山子かかしどもの行ゆく方ほうへ、進すすめば進すすみ、移うつれば移うつり、路みちを曲まがる時ときなどは、スイと前まへへ飛とんで、一寸ちよいと停とまつて、土器色かはらけいろを赫くわつとして待まつ。ともすれば曇くもることもあつた。此この灯ひはひくく呼吸いきを吐つく、と見みえた。

低ひくい藁屋わらやが二三軒にさんげん、煙出けむだしの口くちも開あかず、目めもなしに、暗やみから潜出もぐりだした獸けもののやうに蹲つくばつて、寂しんと寝ねて居ある前まへを通とほつた時とき。

『ばツさ、ばツさ。』

簞みのを鳴ならしたのではない。案山子かかしのひと一つが、最もう耳みみに馴なれて遠ゑん慮りよのない口くちを開あけた。

『ばつさよ、ばつさよ。』

『コーコー、来い、来い。』

と最も一ひとつ※舌しやべつた。

ばさりと言いふのが、ばさりと聞きこえて、ばさりと鳴なつて、其その藁わらや屋ひさしの廂なはてから、睨なはてへばさりと落おちたものがある、続つゞいて又また一ひとつばさりとお出でやる。

鳥とりか獸けものか、こゝにバサリと名なづくるものが住すんで、案かゝ山し子しに呼よびだされたのであらう、と思おもつたが、やがて其それが二ふたつが並ならんで、真まつすぐ直ただにひよいと立たつ、と左さ右うへ倒たふれざまに、又またばさりと言いつた。

が、名なではない。ばさりと称となへたは其その音おとで、正しやう体たいは二に本ほんの番ばん傘がさ、ト蛇じやの目めに開ひらいたは可いが、古ふる御ご所しよの簾すだれめいて、ばら／

ゝに裂けて居る。

### 三十四

唯見ると、両方から柄を合はせて、しつくり組むだ。其の破れ傘が輪に成つて、隙をぐるぐると廻つて丁と留まる。

案山子が三ツ四ツ、ふらくくと取巻いて、  
『乗つされ。』

『お人形、乗つせえ。』と言ふ。

『は、あ、載せろ、と言ふのか、面白い。』

案ずるに、此の車を以つて、我が作品を礼するのであらう。

其の厚志、敢て、輿と駕籠と破れ傘とを択ばぬ。其処で彫像の脇を抱いて、傘の柄に腰を据えると、不思議や、裾も開かず、肩も反らず……膠で着けたやうに整然と乗つた、同時にくるくると傘が廻つて、さつさと行く……

やがて温泉の宿を前途に望んで、傍に谿河の、恰も銀河の碎けて山を貫くが如きを見た時、傘の輪は流に逆ひ、疾く水車の如くに廻転して、水は宛然其の破れ目を走り抜けて、斜めに黄色な雪が散つた。や、何うも案山子の飛ぶこと、ひよろつく事!

此を見よ、一人々々。――

で、月が三ツ四ツ出て路を照らすのも、案山子が飛ぶのも、傘

くるまの車も、其の車に、と反身で、斜に構へて乗つた像の活けるが如きも、一切自分の神通力の如くに感じて、寝静まつた宿屋の方へ拳を突出して呵々と笑つた。

『此を見よ、人々々々。』

其時車を真中に、案山子の列は橋にかゝつた。……瀬の音を横切つて、竹の脚を、蹠跟めく癖に、小賢しくも案山子の同勢橋板を、どゞろくとゞろと鳴らす。

『寝て居るに騒がしい。』  
と欄干が声を懸けた。

『あゝ、気の毒だ。』

とうつかり人間の雪枝が答へた。おや、と心着くと最うざん

ざと川水。  
かはみづ

まだ可怪かつたのは、一行が、其から過般の、あの、城山  
のほとつつきいしだんか、ときこれから推上らうと云ふのに  
へ上る取着的石段に懸つた時で、是から推上らうと云ふのに  
ひといきひと吸つくらしく、フト停まると、中でも不精らしい簀の裾の長  
いのが、雲のやうに渦いた段の下、大木の槐の幹に怱懸つ  
て、ごそりと身動きをしたと思へ。

『わい、撥てえ。』と樹が喚いた。

傘はぐるぐると段にかゝる、と苦もなく攀上るに不思議はな  
い。濃かな夜のいろだんつ、雲に乗せたやうにすらくと上  
らし上げる。気の疾い、身軽なのが、案山子の中にもあるにこそ。  
二ツ三ツ追続いて、すいと飛んで、車の上を宙から上つたのが、

アノ土器色の月の形の灯をふわりと乗越す。

段の上で、一体の石地藏に逢つた。

『坊ちやま、坊ちやま。』と一ツが言ふ。

『さても迷惑、』

と仰有つたが、御手の錫杖をづいと上げて、トンと下ろし

ざまに歩行び出らるゝ……成程、御襟の唾掛めいた切が、

ひらりくくと揺れつゝ来らるゝ。

「此の野原に来た時です。」

と雪枝は老爺に向いて、振返つて左右を視めた。

陽炎が膝に這つて、太陽はほかくと射して居る。空は晴

れたが、草の葉の濡色は、次第に霞に吸取られやうとする風情

である。

「其その地蔵尊ぢざうそんが、前まへの方ほうから錫杖しやくぢやうを支ついたなりで、後うしろに続つゞいた私わたしと擦違すれちがつて、黙だまつて坂さかの方ほうへ戻もどつて行ゆかるゝ……と案山か子しもぞろゝと引返ひきかへすんです。

番傘ばんがさは、と見みると、此これもくるゝと廻まはつて返かへる。が、まるで空からに成なつて、上うへに載のせた彫像てうざうがありますまい。

……つひ向むかふを、何どうです、……大牛おほうしが一頭いっとう、此方こなたへ尾を向むけてのそりと行ゆく。其その凶体ぶうたいは山やまを圧あつして此この野原のほらにも幅はつたいほど、臃おぼろの中なかに影かげが偉おほきい。其その背せ中なかにお浦うらの像ざうが、紅くれなゐの扱し帯きを長ながく、仰向あふむけに成なつて柔やはらかに懸かつて居ゐる。」

## 三十五

「破れ傘の車では、別に侮られ辱められるとも思はなかつたが、今牛の背に懸けられたのを見ると、酷らしくて我慢が出来ない！ 木を刻んだものではあるが、節から両岐に裂かれさうに思はれて、生身のお浦だか、像の女だか、分別も着かないくらゐ。『あツ、』と叫んで、背後から飛蒐つたが、最う一足の処で手が届きさうに成つても、何うしても尾に及ばぬ……牛は急ぐともなく、動かない朧夜が自然から時の移るやうに悠々とのさばり行く。

しばらくして、此の大手筋を、去年一昨年おとしのまゝらしい、

枯蘆かれあしの中なかを縫ぬつた時ときは、俗ぞくに水底みづそこを踏ふんで通とほると言いふ、どつしりした物ものに見みえた。背せなの彫像てうざうの仰向あふむけの胸むねに采さいを握にぎつた拳こぶしが、苦くるしんで空くうを掴つかむやうに見みえて堪たへられない。

後あとを喘あへぎく、はあくと呼吸いきして続つゞく。

「其その牛うしが、老爺おぢいさん、」

と雪枝ゆきえは聞きく物ものを呼懸よびかけた。

天守てんしゆの礎いしの土つちを後脚あとあしで踏ふんで、前脚まへあしを上うへへ挙あげて、高たかく棟むねを抱いだくやうに懸かけたと思おもふと、一階目いつかじめの廻廊くわいらうめいた板いたじ敷きへ、ぬい、と上のほつて其その外周そとまはり囲りをぐるりと歩行あるいた。……

音おとに鎗やりヶ嶽だけと中空なかぞらに相聳あひそびえて、月つきを懸かけ太陽ひを迎むかふると聞きく……此この建物たてものはさすがに偉大おほきい。——朧おぼろの中なかに然さばかり蔓はびこつた

牛の姿も、床走る鼠のやうに見えた。

ぐるりと一廻りして、一ヶ所、巖を扶つたやうな扉へ真黒に成つて入つたと思ふと、一つよぢれた向ふ状なる階子の中ほどを、灰色の背を畝つて上る、牛は斑で。

此の一階目の床は、今過つた野に、扉を建てまはしたと見るばかり広かつた。短い草も処々、矢間に一ツ黄色い月で、朧の夜も同じやう。

と黒雲を被いだ如く、牛の尾が上口を漏れたのを仰いで、上の段、上の段と、両手を先へ掛けながら、慌しく駆上つた。

……月は暗かつた、矢間の外は森の下闇で苔の香が満ちて居た。  
……牛の身軀は、早や又段の上へ半ばを乗越す。

ぐる／＼と急いで廻つて取着いて追つて上る。と此の矢間の月は赤かつた。魔界の色であらうと思ふ。が、猶予ふ隙もなく直ちに三階目を攀ぢ上る……

最う仰いでも覗いても、大牛の形は目に留まらなく成つた、めに、あとは夢中で、打附れば退り、床あれば踏み、階子あれば上る、其の何階目であつたか分らぬ。雲か、靄か、綿で包んだやうに凡そ三抱ばかりあらうと思ふ丸柱が、白く真中にぬつく、と立つ、……と一目見れば、其の柱の根に一人悄然と立つた婦の姿……

『お浦……』と膝を支いて、摺寄つて緊乎と抱いて、言ふだけの事を呼吸も絶々、に我を忘れて※舌つた。声が籠つて空へ響く

か、天井の上——五階のあたりで、多人数のわやくもと言ふ声を聞きながら、積日の辛勞と安心した気抜きの所為で、其まゝ前後不覚と成つた。……

『や』

心着く、と雲を踏んでるやうな危かしき。夫婦が活きて再び天日を仰ぐのは、唯無事に下まで幾階の段を降りる、其ばかり、と思ふと、昨夜にも似ず、爪先が震ふ、腰が、がくつく、血が凍つて肉が硬ばる。

『氣を着けて、氣を着けて、危い。』と両方の脚の指、白いのと、男のと、十本づゝを、ちらく〜と一心不乱に瞻めながら、恰も断崖を下りるやう、天守の下は地が矢の如く流るゝ

か、と見えた。……

雪枝は語り続く声も弱つて、

「漸やっとの思おもひで此こゝ処ゝまで来きて……先まづ一ひと呼いき吸きと気きが着つくと、あの  
 躰ていだ。老おぢい爺いさん、形かたしろ代にえの犠い牲せに代かへて、辛からくもです、我わが手てに  
 救すくひ出だしたとばかり喜よろこんだのは、お浦うらぢやない、家かない内ないぢやない。  
 昨夜ゆふべも持もつて行いつた彫てうぎやう像ぞうを其そのまゝ突つゝ返かへされて、のめくと担かつい  
 で帰かへつたんです。然しかも片かたう腕で振もつてある、あの采さいを持もたせた手てが。  
 ……あゝ、私わたしは五ご躰たいが痺しびれる。」と胸むねを掴つかんで悶もだへ倒たふれる。

天てん守しゆの下した

## 三十六

聞き果てつ。……

飛驒ひだのくに国の作人さくにん菊松きくまつは、其処そこに仰あふぎ倒たふれて今いまも悪わるい夢ゆめに魘うなされて居ゐるやうな——青年せいねんの日向ひなたの顔かほ、額ひたひに膏あぶら汗あせの湧わく惱なやましげな状さまを、然さも氣きの毒どくげに瞻みまもつた。

「聞きけば聞きくほど、へい、何なんとも言いひやうはねえ。けんども、お前まえ様さま、お少わえに、其その位くらゐの事ことに、然さう氣きい落おとさつしやるもんでねえ。たかゞあれだ、昨ゆふべ夜も持もつて行ゆかした其その形かた代しろの像ざうが、

お天守てんしゆの：何様なにさまか腑ふに落ちねえ処ところがあるで、約束やくそくの通り奥おくさまかへ様さまを返かへさねえもんでがんしよ。だで、最もう一ひとつ拵こぎえさつせえ。ううつをんなもくぎうまたやりなほ美しい婦めの木像もくざうさ又また遣やり直なすだね。え、お前めえ様さま、対手あひてが七しちむ六むヶづしいだけに張合はりえがある……案山か子しぢや成なんねえ。素袍すほうでも着きてあひたまこしもの輿持こしもつて、へい、お迎むかへ、と下座げざするのを作つくらつせえ。え、！ と元氣げんきを出ださつしやりまし。」

「其処そこです、老爺おぢいさん、」

と雪枝ゆきえは草くさを掴つかんで起おきなほ直なつて、

「現げんざい在ざい、其その苦くるしみを為して居ゐるお浦うらを救すくはんために製こしら作はへたんです。有ありつたけの元氣げんきも出だした、力ちからも尽つくした。最もう為しやうがない。しかし此処ここで貴老あなたに逢あつたのは天てんの引合ひきあはせだらうと思おもふ。

いや、其それよりも此この土地とちへ来て、夢ゆめとも現うつとも分わからない種いろく々  
 の事ことのあるのは、別べつではない、婦をんなのために、仕しごと事を忘わすれた眠ねむりを覚さま  
 して、謹つうしんで貴あなた老をに教をしを受けさせやうとする、芸げいの神かみの計はからひで  
 あらうも知しれない。私わたしは跪ひざまづく、其その草鞋わらぢを頂いたゞく……何どうぞ、弟でし子  
 にして下ください、教をしへて下ください、而そして浦うらを救すくつて下ください。「  
 「いや、前さつき刻かね船なかの中なかで焚やけるのを向むかふから見みた時ときな、活いきた人ひとだ  
 と吃びつくり驚おどろしつけの。お前まえ様さま一ひと廉かどの利きものだ。別べつに私わたし等らに相さうだ  
 談だん打ぶたつしやるに及およぶめえが、奥おく様さまのお身みの上うへぢや、出で来る  
 手て伝つたひなら為しずには居ゐられぬで、年としの功こうだけも取とり処どころがあるなら、  
 今こんど度ど造つくらつしやるに助ちよごん言ごんな為すべいさ。まあ、待またつせえよ、私わしが  
 今いま、「と狸たぬきのやうな麻あさぶくろ袋くろをふらりと、腰こしを伸のして、のつそり

と立つた。

旭あさひさす野のを一人ひとり、老爺ぢやいは腰骨こしほねに手てを組くんで、ものを搜さがす風ふうして歩行あるいたが、少時しばらくして引返ひきかへした。拾ひろつて来たきのは雄鹿をじかの角つのの折をれ、山深やまかければ千歳ちとせの松まつの根ねに生おふると聞きく、伏ふくれう苓れうと云いふものめいたが、何なに、別べつに……尋常たゞの樹きの枝えだ、女をんなの腕うでぐらゐの細ほそさで、  
一尺いつしやく有余いうよなり也。

卜件くだんの麻袋あさぶくろの口くちを開あけて、握飯にぎりめしでも出だしさうなのが、  
一挺いつちやう小刀こがたなを抽取ぬきとつて、無雜作むざうさに、さくりと当あてる、ヤ又能またよく切きれる、枝えだはすかりと二ツふたに成なつた。  
「鯉こひとも思おもふが、木きが小ちつこい。鱒どせうでは可笑をかしかんべい。鮒ふなを一ひとツ製こさへて見みせつせえ。雑ざつと形かたちで可ええ。鱗うろこは縦横たてよこに筋すぢを引ひくだ、……私わし

も同じに遣らかすで、較べて見るだね。ひよつとかして、私の方  
 さ出来が佳くば、相談相手に成れるだでの、可か、さあ、ごぎ  
 らつせえ。」

と小刀を添へて突着けた。雪枝は胡座を組直した。

「一イ二ウ三イ、はじめるぞ、はゝゝはゝゝ、驅競のやうだの。

何も前後に構ひごとはねえだよ。お前様串戯ごとではあんめ

えが、何でも仕事するには元氣に限るだで、景氣をつけるだ。――

――可かの、一イ二ウ三イで、遣りかけるだ。一イ二ウ三イ！ は

ツはツはツ。」

笑ひかけて、済まして遣り出す。老爺の手にも小刀が動く、と

双んで一一挺、日の光に晁々と閃きはじめた……掌の木の枝は、

其そののこ小刀がたなかの輝かがやくまゝに、恰あたかもひれ鰭ふるを振ふるふと見みゆる、香川かがは雪枝ゆきえも、さすがなに名なを得えた青年わかものであつた。

と此この老爺ぢいと雪枝ゆきえとが、旭あさひに向むかつて濠端ほりばたに小刀こがたなを使つかふ。前ぜん面めんの大手おほての彼方かなたに、城址しろあとの天守てんしゆが、雲くもの晴はれた蒼空あをぞらに群ぐん山さんを抽ぬいて、すつくと立たつ……飛驒山ひださんの鞆さやを払はらつた鎗やりヶ嶽だけの絶ぜつ頂ちやうと、十里じふりの遠近をちこちに相対あひたいして、二人ふたりの頭上づじやうに他たの連峯れんぼうを率ひきゐて聳そびゆる事ことを忘わすれてはならぬ。

件くだんの天守てんしゆの棟むねに近ちかい、五階目ごかいめあたりの端近はしちかな処ところへ出でて、霞かすみを吸すひつゝ、大欠伸おほあくびを為した坊主ぼうずがある。

すごろくばん  
双六盤

三十七

ゆきえ  
雪枝は 合掌して跪いた。

かれまへ  
渠の前には、一座滑かな盤石の、其の色、濃き緑に碧を交

あだか  
へて、恰も千尋の淵の底に沈んだ平かな巖を、太陽の色も白い

かすみ  
まで、霞の満ちた、一塵の濁りもない蒼空に、合せ鏡して見

おほき  
るやうな……大さは然れば、畳三畳ばかりと見ゆる、……音に

き  
聞く、飛驒国吉城郡神宝の山奥にありと言ふ、双六

谷の名に負へる双六巖は是ならむ。巖の面に浮模様、末を  
 揃へて、上下に香の図を合はせたやうな柳条があり、虹を削つ  
 て画いた上を、ほんのりと霞が彩る。

背後を囲つた、若草の薄紫の山懐に、黄金の網を颯  
 と投げた、日の光は赫耀として輝くが、人の目を射るほどでは  
 なく、太陽は時に、幽に遠き連山の雪を被いだ白蓮の蕊  
 の如くに見えた。……次第に近く此処に迫る山と山、峯と峯との  
 中を繋いで蒼空を縫ふ白い糸の、遠きは雲、やがて霞、目  
 前なるは陽炎である。

陽炎は、爾く、村里町家に見る、怪しき蜘蛛の囀の乱れた、  
 幻影のやうなものでは無く、恰も練絹を解いたやうで、蝶のふ

わくと吐く呼吸が、其羽なりに翻々と拡がる風情で、然も皆

美しい女の姿を象る。其の或ものは裳黄に、或ものは袖紫に……

紫なるは堇の影で、黄なるは鼓草の花の映り添ふ色であつた。

巖のあたりは、此の二種の花、咲き埋むばかり満ちて居る……

……其等色ある陽炎の、いづれ手にも留まらぬ女の風情した中に、

唯一人濃かに雪を束ねたやうな美女があつて、巖の彼方に恰も

卓に向つて立つ状してゐんだ。

雪枝は其の美女を前に盤石を隔て、蹲つたのである……

双六巖の、其の虹の如き格目は、美女の帯のあたりをスー

ツと引いて、其処へも紫が射し、黄が映る……雲は、霞は、陽

炎は、遠近に尽く此の美女を形づくるために、濃くも薄く

も懸るらし。其の形の巖なるは、白銀の鎧して彼を守護する勇

士の如く、其の姿の優しいのは、姫に斉眉く侍女かと見える。

美女の背後に当る……其の山懐に、唯一本、古歌の風情

の桜花、浅黄にも黒染にも白妙にも咲かないで、一重に

颯と薄紅。

色が美女の臉にさし、影が美女の衣を通す……

雪枝が路を分け、巖を伝ひ、流を渉り、梢を攀ぢ、桂を這つて、

此処に辿り着いた山蔭に、はじめて見たのは此の桜で。……

一行は、渠と、老爺と、別に一人、背の高い、色の蒼い坊主

であつた。

是より前、雪枝は城趾の濠端で、老爺と並んで、殆ど小

学生くせいの態度たいどを以て、熱心ねっしんに魚うの形かたちを刻きぎみながら、同時どうじに製せい作さくしはじめた老翁ぢいの手振てぶりを見るみべく……密そつと傍見わきみして、フト其その目めを外そらした時とき、天守てんしゆの矢間やまを湧わいて出でるやうな黒坊主くろぼうずの姿すがたを見みたが、鳥からすか、梟ふくろうか、と思おもつた。

が、大牛おほうしが居ゐる、妻つまの囚とらはれた魔まの城しろである……よし其それが天て狗いぬでも、氣きを散ちらす処ところでない。爰こゝに一いつ刀たうを下おろすは、彼かれを救すくふ一いつ歩ぽである、と爽さはやかに木削きくづを散ちらして一ひと思おもひに刻きぎ果みてた。

『どう、見みせさせえ。』

疾とく我わが小刀こがたなを袋ふくろに納をさめて、頤あごづゑ杖じやうして待まつて居ゐた老翁ぢいは、雪ゆ枝きえの作さく品ひんを掌てに据すえて煙管きせるを啣くはえた。

『おゝ、出で来た。ぴち〜と匆はねる……いや、恚かうあらうと思おもふ

た……見事みごとなものぢや、乾かはかして置おくと押死おつちぬべい、それ、勝手かつてに泳およげ！』とひよいと、放はふると、濠ほりの水みづへばちやりと落おちた。が、腹はらを出だして浮脂きらの上うへにぶくりと浮うく。

### 三十八

『そりや少わかい魚うをの元氣げんきを見習みならへ。汝ぬしも、ばちやくと泳およげい。』  
 で、老爺ぢいは今度こんどは自分じぶんの刻きざんだ魚うをを、これは又また、不状ぶざまに引握ひんにぎつたまゝ、齊ひとしく投なげる、と※しぶきが立たつたが、浮草うきくさを颯さつと分わけて、鰭ひれを縦たてに薄うすくろく、水際みづぎはに沈しづんでスツと留とまる。ト雪枝ゆきえの作さく品ひんと並ならべた処ところは、恰あだかも釣つり糸いとに繫かけた浮木うきが魚さかなを追おふ風情ふぜいであつた。

……

なに  
何をか試こころむる、と怪あやしんで、身みを起おこし汀みぎに立たつて、枯かれ蘆あしの莖くき越し  
に、濠ほりの面おもてを瞻みつめた雪ゆき枝えは、浮き脂らの上うへに、明あきかに自じ他たの優い劣れつの  
刻きざみ着つけられたのを悟さとり得えて、思おもはず……

『はつ、』と歎たん息そくした。

老ちい爺いは、もつぺの膝ひざのこがたなくづはたをはたきながら、眉まゆをふさくくと  
揺ゆつて笑わらひ、

『はつはつはつ一ひ二ふ三みい！ 私わし等らが勝かちぢや。見みさつせえ、形かたち  
は同おなじやうな出で来きだが、の、お前めえ様さまの鮒ふなは水みづに入いれると腹はらを出だ  
いたで、死おちた魚いよ、……私わし等らが鮒ふなは、泳およぎ得えいでも、鰭ひれを立たて  
たれば活いきた奴やつ。何なんとした処ところで、俎まなにいたの乗のせれば、人にん間げんの口くちに食く

へいでも、翡翠かはせみが来て狙ねらふたら、ちよつくら潜もぐつて遁にげべいさ。  
 囲炉裏あろりの自在じざいに竹だけに引懸ひつかける鯉こひにしても、水みづへ放はなせば活いきねば  
 ならぬ。お前めえさま様のふな鮎ななのやうに、へたりと腹はらを出だては明あかねえ。  
 木きを削けづる時の釣つり合あひひと、水みづに入いれた時とき浮うき方かたが違ちがふでねえか  
 の、縦たてに留とまれば生しやうがある、横よこに寝ねれば、死しんだりよ。……煩むづケ  
 敷しい事ことではねえだ。

が、お前めえさま様、此この手際てぎでは、昨夜ゆふべ造つくり上あげて、お天てん守しへ持も  
 つてござつた木像もくざうも、矢張やつば同おなじ型かたではねえだか。……寸法すんぽうが  
 おなおな同おなじでも脚あしの筋すぢが釣つつて居をらぬか、其それでは跛足びつこぢや。右みぎと左ひだりと腕うで  
 の釣つり合あひも悪わるかつたんべい。頬ほつぺたの肉にくが、どつちか違ちがへば、片かた  
 がりべいと言いふ不具かたわぢや、それでは美うつくしい女をんなでねえだよ。

もし、へい、五ご体たいが満まん足ぞくな彫ほり刻もの物ものであつたらば、真ま昼つ間びる、

お前めえ様さまと私わしとが、面つら突つき合あはせた真ま中なかに置おいては動うご出きしもす

めえけんども、月つきの黄き色いろい小こ雨さめの夜よ中なか、——主ぬしが今いま話はなさしつた、

案か山し子あが歩ある行なく中なかへ入いれたら、ひとりで棲つまとを取とつて、しやなら、

しやならと行やるべい。何なにも、破やぶれ傘がの化ばけ車ぐるまに骨ほねを折をらせて運はこば

せずと濟すむ事ことよ。平いつ時つなら兎とも角かくぢや、お刺まけに案か山し子あどもが声こゑを

出だいて、お迎むかひ、と言いふ世せ界かいなら、第だい一いちお前めえ様さまが其その像ざうを担かつい

で出でる法ほうはあるめえ。何なんではい、歩あ行るけ、さあ、木もく像ざう、といふ

腹はらに成ならしやらぬ。……

其それでは魔ま物ものが不ふ承しょう知ちぢや。前さ方きに些ちつとも無む理りはねえ、気きに入い

るも入いらぬもの……出で来き不ふ出で来きは最せ初えしから、お前めえ様さまの魂たまにある

でねえか。

其処へ懸けては我等が鮒ぢや。案山子が簀を捌いて捕らうとす  
 るなら、ぴちく／＼匆ねる、見事に泳ぐぞ。老爺が広言を吐く  
 ではねえ。何の、橋の欄干が声を出す、槐が嚏をすべいなら、  
 鱗を光らし、雲を捲いて踊を踊らう。

遣直さつしやい、新にはじめろ、最一つ作れさ。

何うやらお前様より増だんべいで、出来る事さ助言も為べい、  
 為て可い処は手伝ふべい。

腰につけて道具も揃ふ。』  
 と箆の如く、麻袋を敲いて言つた。

『すかりと斬れるぞ。残らず貸すべい。兵糧も運ぶだでの！

宿へも祠へも帰らねえで、此処へ確乎胡座を搔けさ。下腹へ  
 うむと力を入れるだ。雨露を凌ぐなら、私等が小屋がけをして  
 進ぜる。大目玉で、天守を睨んで、ト其処に囚られてござる  
 げな、最惜い、魔界の業苦に、長い頭髪一筋づゝ、一刻  
 に生血を垂らすだ、奥様の苦悩を忘れずに、飽くまで行れさ、  
 倒れたら介抱すべい。』  
 雪枝は満面に紅を濯いで、天守に向つて峯より高く握  
 拳を衝と上げた。

『少いものを唆かして要らぬ骨を折らせるな、娑婆ツ気な老爺め  
 が、』

と二人の背後にぬいと立つた……

こげ  
苔か<sup>こげ</sup>と見ゆる<sup>み</sup>薄毛<sup>うすげ</sup>の天窓<sup>あたま</sup>に、笠<sup>かさ</sup>も被<sup>かぶ</sup>らず、大木<sup>たいぼく</sup>の朽<sup>く</sup>ちたのが  
つきよ<sup>つきよ</sup>かげ<sup>かげ</sup>の射<sup>さ</sup>すやうな、ぼけ<sup>ぼけ</sup>やた色<sup>いろ</sup>の黒染<sup>すみぞめ</sup>扮装<sup>でたち</sup>で、顔<sup>かほ</sup>の蒼<sup>あを</sup>い大<sup>お</sup>  
ほにう<sup>ほにう</sup>だう  
入道<sup>にゅうだう</sup>！

ふりむ<sup>ふりむ</sup>おやぢ<sup>おやぢ</sup>の顔<sup>かほ</sup>を瞰<sup>み</sup>下<sup>お</sup>ろして、  
振向<sup>おほ</sup>いた老翁<sup>おやぢ</sup>の顔<sup>かほ</sup>を瞰<sup>み</sup>下<sup>お</sup>ろして、  
『覚えて居<sup>おほ</sup>るか、暗<sup>やみ</sup>の晩<sup>ばん</sup>を、』と北叟<sup>ほくそゑ</sup>笑<sup>わら</sup>みした頬<sup>ほ</sup>が暗<sup>くら</sup>い。

ひと  
人<sup>ひと</sup>さし指<sup>ゆび</sup>

### 三十九

『おゝ、御坊？』

『何日かの晩の！』

雪枝と老爺は左右から齊しく呼ばれる。

『御身も其の時の少い人な。』と雪枝に向いて、片頬を又暗うして薄笑ひを為た。

『血気に逸つて、うかくと老爺の口に乗らぬが可い。……其の  
 気で城趾に根を生いて、天守と根較べを遣らうなら、御身  
 は蘆の中の鉋屑、蛙の干物と成果てやうぞ……此老爺はなか  
 く術がある！ 蝙蝠を刻んで飛ばせ、魚を彫つて泳がせる代  
 には、此の年紀をして怪しからず、色気がある、……あるは可い

が、汝が身で持余ました色恋を、ぬつぺりと鯰抜けして、人にかづけやうとするではないか。城ヶ沼の暗夜を思へ！

何か、自分に此の天守の主人から、手間賃の前借をして居つて、其の借を返す羽目を、投遣りに怠惰を遣り、格合な折から、少いものを煽り立つて、身代りに働かせやう気かも計られぬ。』

『これ、これ、御坊、御坊、』と言つて締つた口を尖らかす。相對する坊主の口は、三日月形に上へ大きい、小鼻の条を深く莞つて、

『いや、暗の夜を忘れまい。沼の中へ当の無い経読ませて、齋非時にとて及ばぬが、渋茶一つ振舞はず、既での事に私は生

涯坊主の水車に成らうとした。』

『む、まづ出家の役ぢや……断念めさつしやい。然う又一慨に説法されては、一言もねえ事よ。……けんども、やきもきと精出して人の色恋で気を揉むのが、主たち道徳の役だんべい、押死んだ魂さ導くも勤なら、持余した色恋の捌を着けるも法ではねえだか、の、御坊。』

『然ればな……いや口の減らぬ老爺、身勝手を言ふが、一理ある。』  
 処でな、あの晩四つ手網の番をしたが悪縁ぢや、御身が言ふ通り色恋の捌を頼まれた事と思へ。

別ではない、此の少い人の内儀の事だな、』  
 雪枝は屹と向直つた。

流しりめ盼かに掛なけつゝ尚なほ老ぢい爺いに、

『……其その夜よ、夢ゆめ幻まぼろしのやうに言ことづ托けを頼たのまれて、采さいを驗しるし受う

取けつたは、さて此こ方なた衆しゆ知しつての通とほりだ。——頼たのまれた事ことは手て廻まは

しように用ず濟なみと成なつたでな、翌あけ朝あさ直すぐにも、此こ処ゝを出し発ゆつと思おも

ふたが、何なにか氣きに成なる……温おん泉せん宿やど、村むら里さとを托たく鉢はつして、何なにとな

く、ふら〜と日ひを送おくつた。其その樣やう子すを聞きけば、私わしが言ことづ托けを為し

た通とほり、何なにか、内ない儀ぎの形かた代しろを一いつ心しんに刻きざむと聞きく、……其それが成じ

就やうじゆしたと言いふ昨ゆふ夜べぢや。少わかい人ひとが人にん形ぎやうを運はこんで行ゆく後あとに

なり前さきになり、天てん守しゆへ入はいつて四しか階かい目めへ上のほつた、処ところ、柱はしらの根ねに其そ

の木もく像ざうを抱だ緊きしめて、死しんだやうに眠ねむつて居をる。

はてな、内ない儀ぎを未まだ返かへさぬか、一いつ体たいどんな魔ま物ものが棲すむぞ。——

—其処へ行くまでには何も目に着いたものは無かつたに因つて—  
 —尚ほ此の上か、と最一ツ五階へ上つて見た。様子は知れた。』  
 と頷いて言つた。

『何が、何者が居るんだ。』と雪枝は苛立つて犇と詰寄る。  
 遮る如く斜に構へて、

『いや、何か分らん、ものは見えん。が、五階へ上り切つて、堅  
 い畳の上に立つた。冷い風が冷りと来ると、左の腕がびくりと動  
 く、と引立てたやうに、ぐいと上つて、人指指がぶる／＼と  
 振ふとな、何かゞ口を利くと同じに、其の心が耳に通じた。……  
 天守の主人は、御身が内儀の美艶な色に懸想したのぢや。  
 理も非もない、業の力で掴取つて、閨近く幽閉めた。従類眷

属んぞく寄りたかつて、上あげつ下おろしつ為して責せめ苛さいむ、咎しもとの呵か責やくは  
 魔ま界かいの清き涼つ劑けぢや、静しづに差さ置しけおば人にん間げんは氣き病やみで死しぬとな……

言いふまでもない肉にくを屠ほつて其その血ちを啜するに仔し細さいはないが、夫をは  
 香か村むら雪ゆき枝えとか。天あ晴つれ一いち芸げいのある効かひに、其その術わざを以もつ妻つまを償あがへ  
 ! 魔ま神じんを慰なぐめ樂さしますものゝ、美び女じよに代かへて然しかるべきなら立たちど

処ころに返かし得えさする。――

可いかな、此この心こころは早はや御お身みが内ない儀ぎに、私わしが頼たのまれて、御お身みに  
 伝つたへた。』

## 四十

『活いけて視ながめうと思おもふ花はなを、苞つとのまゝ室へやに寝ねかせて置おいて、待まちか  
 構まへた償つくひの彼かれは何なんぢや！ 聾つんぼの、唾をうしの、明あ盲きめ人の、鮫さめ膚はだ  
 で腰こしの立たたぬ、針はり線がねのやうな縮ちぢ毛れつけ、人ひと膚はだの留とめ木きの薰かの代り  
 りに、屋や根ね板いたの臭におの芬ぶんとする、いぢかり股またの、腕うで脛すねの節ふしくれ立た  
 つた木もく像ざう女をんなが何なにに成なる！ ……悪わるく拳こぶしに采さいを持もたせて、不ふ可か  
 思し議ぎめいた、神じん通つうめいた、何なにとなく天あめ地つちの、言いふに言いはれぬ  
 心こゝろを籠こめたらしい所し業わざが可を笑かしい。笑せう止し千せん万ばんな大おほ白は痴はけ！』  
 『又また、』とばかりで、下した唇くちびるをぴりりと噛かんで、思おもはず拮つか拮か  
 懸くらうとすると、鷹おう揚やうに破やぶ法れ衣ころもの袖そでを開ひらいて、翼つばさの目め潰つぶし、  
 黒くろく煽あふつて、

『と、な、……天てん守しゆの主ある人が言いはるゝのぢや……それが何なにもな

い 天井から、此の指にぶるくと響いて聞こえた。』

衝と、天守の棟を切つて、人指指を空に延ばすと、雪枝は

蒼く成つて、ばつたり膝支く。

負けぬ気の老爺は、前屈みに腰を入れて、

『分つた、分つたよ、御坊。お前様が、仏でも鬼でも、魔物で

も、唯の人間の坊様でも可え。言はつしやる事は腑に落ちた

……疾い話が、此の人な持つて行つたは、腹を出いた鮎だ、美

しい奥様とは取替へぬ。……鰭を立てた魚を持ち来い、返して

遣ると、恚うだんべい。

さ、其処ぢやい！ 其処どころぢやに因つて私が後見助言の

為て、勝れた、優つた、新しい、……可かの、生命のある……肉

くづき

附もふつくりと、脚腰もすんなりした、膚の佳い、月に立て

ば玉のやう、日に向へば雪のやうな、へい、魔王殿が一目見た

ら、松脂の涎を流いて、魂が夜這星に成つて飛ぶ……乳の白

い、爪紅の赤い奴を製作へると言はぬかい！

少いものを唆かして、徒勞力を折らせると何故で言ふのぢや。

御坊、飛驒山の菊松が、烏帽子を冠つて、向願巻を為て手

伝つて、見事に仕上げさせたら何とする。』

『然れば、言ふ通りに仕上つて、其処で其の木像が動くかな、

目を働かすかな、指す手は伸び、引く手は曲るか、足は何うじや、

歩行くかな。』

と皆まで言はず、老爺が其の眉、白銀の如き光を帯びて、太

陽に向ふ目を輝かした。手拍子拍つやう、腰の麻袋をはた／＼と敲いたが、鬼に向つて臀を搔く、大胆不敵の状が見えた。

『天守の魔物は何時から棲むよ。飛騨国の住人日本刻彫師、尾ヶ瀬菊之丞孫の菊松、行年積つて七十一歳。極楽から剩銭を取る年で、城ヶ沼の女の影に憂身を窺すお庇には、動く、働く、彫刻物は活きて歩行く……独りですらくくと天守へ上つて、魔物の閨に推参する、が、張も意地も着いて居るぞ、其の時嫌はれぬ用心さつせえ、と御坊に言托を頼まうかい。』

『可い、可い。』

ニヤ／＼と両の頬を暗くして、あの三日月形の大口を、食反

らして結んだまゝ、口元をひくくくと舌の赤う翻るまで、蠢め

かせた笑ひ方で、

『面白おもしろい！ 旅たびのものぢやが、其それも聞きいた。此方こなたが手遊てあそびに拵こしら

える、五位鷺ごゑさぎの船頭せんどうは、翼つばさで舵取かちとり、嘴くちばしで漕こいで、水みづの中なかで火

を吐はくとな………』

『天守てんしゆの上うへから御覧ごらんなされ、太夫たいふほんの前まへ芸げいにござります、

へツへツへツ』とチヨンと頭かしらを下さげて揉手もみでを為して言いふ。

『おゝ、其その面つら魂たましひ頼母たのしい。満更まんざらの嘘うそとは思おもはん。成程なるほど

此方こなたが造つくつた像やうは、目めも瞬またかう、歩行あるかう、厭いやなものには拗すねも

せう。……然されば御身おみは、少わかいものゝ尻しり压おしして石いしに成なるまでも

働はたらけ、と励はげますのぢや。で、唆そかすとは思おもふまい。徒勞むだばね力をさせ

るとは知るまい。が、私は、無駄ぢや留めい、と勧める……其の理由を言うて聞かさう。

其処で、老爺、』

『おい、』

『御身が言ふ、其の像には血が通ふか、』

『血が通ふだ？』と聞返す。

『然ればよ、針の尖で突いても生命を絞る、其の、あの人間の美しい血が通ふかな。』

『………』と老爺の眉がはじめて顰む。

## 四十一

黒坊主は嵩に懸つて、

『まだ聞きたい。御身が作の其の膚は滑かぢやらう。が、肉はあ  
るか、手に触れて暖味があるか、木像の身は冷たうないか  
』

『はてね、』と問を怪む中に、些とひるんだのが、頬に出づる。  
『第一肝要なは口を利くかな、御身の作は声を出すか、ものを  
言ふかな。』

『馬鹿な事を、無理無駄ぢや。』  
と呆果てた様子であつた。

『理も非もない。はじめから人の妻を掴み取つてものを云ふ、悪

くまの所業ぢや、無理も無駄も法外の沙汰と思へ。

此所を聞けよ、二人の人。……御身達が、言ふ通り、今新しく

遣直せば、幾干か勝れたものは出来やう、がな、其は唯前に  
較べて些と優ると言ふばかりぢや。

其も可からう、何も持たぬ、空しい乏しいものに取つたら、御  
身達が作り更めると云ふ其の木像でも、無いよりは増しぢや、  
品に因つて、美しいとも、珍らしいとも思はうも知れぬ。

けれどもな、天守の主人は、最う手の内に、活きた、生命あ  
る、ものを言ふ、血の通ふ、艶麗な女を握つて居るのぢや。可  
いか、其に代へやうと言ふからには、螢と星、塵と山、露一滴  
と、大海の潮ほど、抜群に勝れた立優つたもので無いから

には、何を又物好きに美女を木像と取り代へやう。

彫刻した鮎の泳ぐも可い。面白うないとは言はぬが、煎る、

焼く、或は生のまゝ其の肉を噉はうと思ふものに、料理をすれ

ば、炭に成る、灰に成る、木の切を何にせい、と言ふ了見だ。

悪魔は今其の肉を欲する、血を求むる……仏が鬼女を降伏し

てさへ、人肉のかはりにと、柘榴を与へたと言ふでは無いか。

既に目指す美女を囚へて、思ふがまゝに勝矜つた對手に向ふ

て、要らぬ償ひの詮議は留めろ。

何うぢや、それとも、御身達に、煙草の吸殻を太陽の炎に

変へ、悪魔の煩悩を焼亡ぼいて美女を助ける工夫があるか、

すりや格別ぢや。よもあるまい。有るか、無からう。……

それ、徒勞力むだぼねと言ふ事いことよ！ 要えうもない仕事しごと三昧さんまい打棄うつちやつて、  
 わかひとつま おもひき 少い人は妻を思切おもひきつて立歸たちかへれえ。老爺おやぢも要いらぬ尻しり押おしせず、  
 すなほ つま さ、柔順つなほに妻を捧ささげるやうに、少いわかものを説せつ得とくせい。  
 勝手かつてに木像もくざうを刻きざまば刻きざめ、天晴あつぱれ出来でかしたと思おもふなら、自分じぶん  
 それにようぼうに其を女房にのかはりにして、断念あきらめるが分別ぶんべつの為しどころ処ところだ。見事みごと  
 だ、美うつくしいと敵手あひてを強しゆるは、其方そつちの無理むりぢや、分わかつたか。』  
 と衝つと指ゆびを上げあげて雲くもを指さした。  
 『天守てんしゆの主人あるじの言托ことづけは此この通りとほ。更あらためて其その印しるしを見みせう、  
 さきに まを 前刻まへも申まをした、鮫さめ膚はだの縮毛ちぢれけの、醜みにくい汚きたい、木像もくざうを、仔細しさいあ  
 りげよそほに装よそほふた、心根こころねのほどの苦にが々くしさに、へし折をつて捻切ねぢきつ  
 た、女をんなの片腕かたうで、今返いまかへすわ、受取うけとれ。』

と法衣の破目を潜らす如く、懐から抜いて、ポーンと投出す。  
 途端に又指を立てつゝ、足を一巾、坊主が退つた。孰も首垂  
 れた二人の中へ、草に甲をつけて、あはれや、其でも媚かしい、  
 優しい腕が仰向けに落ちた。

雪枝は唯肩を抱いて身を絞つた。

老爺は、さすがに、まだ氣丈で、対手が然までに、口汚  
 く詈り嘲ける、新弟子の作の如何なるかを、はじめて、目  
 すらしく、横に取つて熟と見て、弱つたと言ふ響み方で、少  
 ももの言はなんだ。薄うは成つたが、失せ果てない、底光の  
 する目を細うして、

『いや、御出家。』

と調子てうしを変かへて……

『虫むしの居ゐ所どころで赫くわつとも為したがの、考かんえて見みれば、お前めえさま様は、唯たゞ言こと托づけを頼たのまれたばかりの事ことよ。何なにも喰くつて懸かるには当あたらなんだか。……又またお前めえさま様とて何なにもこれ、此この少わかい人ひとに怨うらみ恩おんも報むくもあらずしやる次第しだいでねえ。……処ところでものは相さう談だんぢやが、何なんとかして、其その奥おく様さまを助たすけると言いふ工夫くふうはねえだか、のう、御ご坊ぼう、人ひと助たすけは此こ方なたの勤つとめめぢや、一ひとつ折を入りつて頼たのむだで、勘かん考かうしてくらつせえ。』とがらりと出で直なる。

## 四十二

これを聞くと、然もあらむ、と言ふ面色した坊主の気色や、  
 和らいで、

『然れば、然う言はれると私も弱る。天守からは、よく捌け、  
 最早や婦を思ひ切るやう少い人を悟せとある……御身達は生命に  
 代へても取戻したいと断つて言ふ。』

で、其を取戻す唯一つの手段と言ふのが、償ひの像を作る  
 にある、其の像が、御身たちに、』

『えゝ、えゝ、最う、能う分つた。何ほ私が顛巻しても、血の  
 通ふ、暖い彫刻物は覚束ないで、……何とか別の工夫を頼むだ、  
 最う此なものは、』と手にした腕を、思切つたしるしに、擲け  
 やうとして揮上げた、……其の拳を漏れて、ころろと采が溢れ

て。いちろく、一か六か、草の中に、ぽつりと蟋蟀の目に留んぬ。

三人が熟と視めた。

坊主が先づ、

『老爺……』と心ありげに呼んだ。

『はあ、是ぢや、』

と采の上で蓋するやうに、老爺は眉の下へ手を翳して、

『ちよつくら気が着いた事がある、待たせえ、御坊……』

『……………』

『わかひと、少い人も何う思ふ。お前様が小児の時、姉様にして懐かし

がらしつたと言ふ木像から縁を曳いて、過日奥様の行方

が分らなく成つた時から廻り繞つて、采粒が着き絡ふ、今此処

に采がある……此の山奥に双六の巖がある。其処も魔所ぢやと名が高い。時々山が空に成つて寂とすると、ころころと采を投げる音が木樵の耳に響くとやら風説するで。天守にも主人があれば双六巖にも主が棲まう……どちらも膚合の同じ魔物が、疾え話が親類附合で居やうも知れぬだ。魔界は又魔界同士、話の附け方もあらうと思ふ、何うだね、御坊。』

坊主も二三度頷いた。で、深く其の広い額を伏せた。

『いや、可い処に気が着いた、……何にせい、此の上は各々我を張らずに人頼みぢや。頼むには、成程其の辺であらうかな』

『行つて見べい。方角は北東、槍ヶ嶽を見当に、辰巳に』

当つて、綿で包んだ、あれ〜天守の森の枝下りに、峯が見  
 える、水が見える、又峯が見えて水が曲る、又一つ峯が抽出て居  
 る。あの空が紫立つてほんのり桃色に薄く見えべい。――  
 麻袋には昼飯の握つた奴、余るほど詰めて置く、ちやうど  
 僥幸、山の芋を穿つて横嚙りでも一日二日は凌げるだ。遣  
 りからかせ、さあ、ごさい。少い人。……お前様、其の采を拾  
 はつしやい。御坊、』

『乗りかゝつた船ぢや、私も行く。……』

で、連立つて、天守の森の外まはり、壕を越えて、少時、  
 石垣の上を歩行いた。

爾時、十八九人の同勢が、ぞろ〜と野を越えて駆けて

来た。中には巡查も交つたが、早や壕の向ふの高い石垣の上  
 に、森の枝を伝ふ躰の雪枝の姿を、小さな鳥に成つて、雲に入り  
 行く、と視めたであらう。……

手を挙げ、帽を振り、杖を廻はしなどして、わあわつと声を上  
 げたが、其の内に、一人、草に落た女の片腕を見たものがある。  
 それから一溜りもなく裏崩れして、真昼間の山の野原を、  
 一散に、や、雲を霞。

森の幕が颯と落ちて、双六谷が舞台の如く眼前に開かれたや  
 うに雪枝は思つた。……悪処難路を辿りはしたが、然まで時が  
 経つたとも思はず、別に其が為に、と思ふ疲労も増さない。で、  
 足を運ぶ内に至り着いたので、宛然、城址の場所から、森を土

塀べいに、一重ひとへ隔へだてた背せ中なか合あはせの隣となり家いぐらゐらにしか感かんじない。――  
 最もも案あん内ないをなすと云いふ老ぢい爺いより、坊ぼう主ずの方ほうが、すたさく先さきへ立た  
 つて歩ある行るいたが。  
 時ときに、真ま先さきに、一いち朶だの桜さくらが靨あいたたい  
 る光ひかりを放はなつて、山やま懐ふに靡なくのが、翌あ方けの明みやう星じやう見みるやう、  
 巖いは陰かげを出でた目めに颯さつと映うつつた。

しころくだに  
四五六谷

## 四十三

「叱！」

と老爺が警蹕めいた声を、我と我が口へ轡に懸ける。

トなだらかな、薄紫の崖なりに、桜の影を霞の被衣、ふう

わり背中から裳へ落して、鼓草と堇の敷満ちた巖を前に、其の

美女が居たのである。

少時、一行は呼吸を凝らした。

見よ！ 見よ！ 巖の面は滑かに、質の青い艶を刻んで、花の

色を映したれば、恰も紫の筋を彫つた、自然に奇代の双六磬。

磐面には花を摘んだ、大輪の堇と鼓草とが、陽炎の輝く

なかに、鼓草は濃く、莖は薄く、美しく色を分つて、十二輪、  
 十二輪、二十四輪の駒なるよ……向ふ合はせに区劃を隔て、  
 二輪、一輪、一輪、二輪、空に蒔絵した星の如く、浮彫し  
 たやう並べられた。

美女は、やゝ俯向いて、其の駒を熟と視める風情の、黒髪  
 に唯一輪、……白い鼓草をさして居た。此の色の花は、一  
 谷に他には無かつた。

軽く其の黒髪を戦がしに来る風もなしに、空なる桜が、はら  
 く散つたが、鳥も啼かぬ静かさに、花片の音がする……一  
 片……二片……三片……

「三つ」と鶯のやうな声、袖のあたりが揺れたと思へば、蝶が一

ツひらくくと来て、磐の上をすつと行く……

「一つ、」

と美女は又算へて、鼓草の駒を取つて、格子の中へ、……堇

の花の色を分けて、静に置替へながら、莞爾と微笑む。……

気高い中に其の優しさ。

「は、」と、思はず雪枝は、此方に潜みながら押堪へた息が発

奮んだ。

「誰? ……」

と美女の声が懸る。

老爺は咳を一つ故として、雪枝の背中を丁と突出す。これに押

出されたやうに、蹠踉いて、鼓草堇の花を行く、雲踏む浮足、

ふらふらと成つたまゝで、双六の前に渠は両手を支いて跪いたのであつた。

坊主は懐中の輪袈裟を取つて懸け、老爺は麻袋を探つた、烏帽子を丁と冠つて、更めてづゝと出た。

美女は密と鬢を圧へた。

声も出せぬ雪枝に代つて、老爺が始終を物語つた……  
坊主は、時々眼を開いて、聞澄す美女の横顔を窺ひ見る。

「お姫様、」

と語り果て、老爺が呼んで、

「お助けを遣はされ、さあ、少い人、願へ。」

「姫様、」

と雪枝は、ゆきえ 窶れに窶れた人間にんげんの顔かほして見上げたみあ。

「上じやうらう 藤とう どの、」と坊主ぼうずも言足いひたす。

美女たをやめは引合ひきあはせた袖そでを開ひらいた。而そして、

「天守てんしゆのお使者つかひ、天守てんしゆのお使者つかひ。」

と二声ふたこゑ呼よばるゝ。

「やあ、拙僧わしが事ことか、」と、間まを措おいて坊主ぼうずが答こたへた。

「あの、其その指ゆびをお指さしになれば、天守てんしゆの方かたの、お心こゝろが通つうじま

すかえ。」

「如何いかにも。」と片手かたてを握にぎつて、片手かたてを其その蒼あをい頬ほげたに並ならべて、

横よこに開ひらいて応おうじたのである。

「双六すごろくを打うつて賭かけませう。私わたしは其その他ほかの事ことは何なんにも知しらねば

……而して、私が負けましたら、其切仕方がありません。もし、あの、私が勝となれば、此のお方の其の奥様を、恙なう、お戻しになりますやうに……お約束が出来ませうか。」

物の優しいが力ある声して聞く。

坊主は言下に空を指した。

「天守に於ては、予て貴女と双六を打つて慰みたいが、御承知なければ、致やうも無かつた折から……丁ど僥倖、いや固より、固より望み申す処……とある！」

## 四十四

美たをやめ女をは世よにも嬉うれしげに……早はや頼たのまれて人ひとを救すくふ、善ぜん根こん功く  
 徳どくを仕し遂すとげた如ごとく微笑ほゝゑみながら、左さ右うに、雪ゆき枝えと老ぢい爺いとを艶あで麗やか  
 に見みて、清すしい瞳ひとみを目め配くばせした。

「そんなら、私わたしが勝かちましたら、奥おく様さまをお返かへしなさいませぬね。」

「御ご念ねんに及およばぬ、城じやう沼ぬまの底そこに湧わく……霊れい泉せんに浴ゆさせ、傷きづも

なく疲つか勞れもなく苦く惱なうもなく、健すこかやにしてお返かへし申まをす。」

美た女をやめは、十じふ二にの数かずの、黄きと紫むらさきを、両りやう方ほうへ、颯さつと分わけて、

「天てん守しゆのお方かた。どちらの駒こまを……」

「赫かく耀やくとして日ひに輝かがや、黄わう金ごんの花はなは勝かち色いろ、鼓たん草ぼを私わしが方ほうへ

と瘦やせた頬ほげたの膨ふくらむまで、坊ぼう主ずは浮う色きいろに成なつて笑ゑをふく含くんで、

駒を二つづゝ、六行に。

おなじく二つづゝ、六行に……紫の格子に並べた。

「紫は朱を奪ふ、お姫様董の花が、勝負事には勝色ぢや。」  
と老爺は盤面を差覗いて、坊主を流盼に勇んだ顔色。

これに苦笑ひ為て口を結んだ、坊主は心急く様子が見えて、

「ぎ！ 上 藤、」

「お客なれば貴僧から、」

「や、采は、上 藤。」と高声で言つた。

「空を行く雲の数、」

と眉を開いて見上ぐる天を、白い雲が来ては消え、白い雲が来ては消えする。

「桜の花の散るのを数へ、舞ひ来る蝶の翼を算んで、貴僧、私と

順々じゆんじゆんに。」

坊主は頷いて袈裟を揺つた。

「言ふ目。」

と高くたか美女が。

「乞目、」

と坊主が、互たがひに一声。鶯と梟と、同時に声を懸合はせた。

「一つ来て、二つぢや。」

と鶴の姿の雲を睨んで、鼓草は格子を動く。

ト美女は袂を取つて、袖を斜めに、瞳を流せば、心ある如く

桜の枝から、花片がさらりと白く簪の花を掠める時、紅の色

を増して、受け取る袖に飜然と留まつた。

「右が三つ、」

と袖を返して、左の袂を静かに引くと、また花片がちらりと来る。

「一つと二つ、」

と堇の花が白い指から格子へ入つた。

「雲よ、雲よ、雲よ、」

と呼んで、気色ばんで、やゝ坊主があせり出した。——争ひの半であつた。

「雲が来る、花が降る。や、此の采は気が長いぞ。見て居る内に斧の柄が朽ち、玉手箱が破れうも知れぬが。少い人、其の采を

……其の采を出さつしやい。うつかり見惚れて私も忘れた。」  
 と目の覚めたやうに老爺が言つた。

青年は疾くから心着いて、仏舎利のやうに手に捧げて居たのを、密と美女の前へ出した。

「一つ振つたり、」

と老爺が傍から、肝入れして、采を盤石に投げさせた。

「お姫様、それく、星が一つで、梅が五ぢや。瞬する間に、  
 十度も目が出る。早く、もし、其で勝負を着けさつせえまし。」

「天下の重宝、私もつひ是に気が着かなんだ。」  
 と坊主は手早く拾ひ取る。

「いえ、急いでは成りません、花の数、蝶の数、雲の数で無くつ

ては。」と美女たをやめは頭かしらを振ふつた。

「えゝ、お姫様ひいさまの！ 何どうやら今いままでの乞目こひめでは、一いちど度にいちね

年んも懸かりさうぢや。お庇かげと私等わしらは飢ひもじうも、だるうも無なけれど、

肝心かんじん助け取とらうと云いふ、奥様おくさまの身みをお察さつしやれ。一ひと息いきに血ち

ひとたらし 一ひと点てん、一いつ刻こくに肉にく一分いちぶは絞しぼられる、削けづられる……天守てんしゆの梁はり

に倒さかさまで、身みの鞭むちに暇ひまはないげな。」

「其その通とほり。」と傲然がうぜんとして、坊主ぼうずは身構みがまへ為して袖そでを掲かげた。

## 四十五

美た女をやめの顔かほの色いろは早はや是非ぜひなげに見みえた。

一いちが起おき、六ろくが出いで、三さんにかはり、二ににかへり、五ごが並ならぶ。天てんに星ほしの輝かがやく如ごとく、采さいの目めの疾とく、駒こまの烈はげしく動うごくに連つれて、中なか空ぞらを  
見みよ、岫しゅうを湧わき、谷たにを飛とぶ、消きえた雲くもが残のこり、続つづく雲くもが累かさり、追お  
ふ雲くもが結むすびつびついて、雲くもはやがて厚あつく、雲くもはやがて濃こく、既すでにして  
近ちかくなり、低ひくく成なつた。……

忽たちち一まいつペン、美た女をの面おもてにも雲くもの影かげが映さすよと見みれば、一ひと谷だは暗くら  
く成なつた。

すると、山やま 嵐あらしが颯さと来くると、舞ま下ひる雲くもに交まじり、漂たぐふ如ごとく堇すみ  
の薫かほりばつが※としたが、拭ぬぐひ去さつて、つゝと消きえると、電いなづままくらうが空そらを切きつ  
た。……坊主ぼうずの法衣ころもは、大おほ巖いはの色いろの乱みだれた双すご六ろくの盤ばんを蔽おほふて、  
あたりすみは墨すみよりも蔭かげが黒くろい。

ト暗夜の如き山懷を、桜の花は矢を射るばかり、白い雨と  
 散り灌ぐ。其の間をくわつと輝く、電光の縫目から空を破つ  
 て突出した、坊主の面は物凄しいものである……  
 唯見れば、頭に、無手と一本の角生ひたり。顔面黒く漆し  
 て、目の隈、鼻頭、透通る紫陽花に藍を流し、額から頤に掛  
 けて、長さ三二尺、口から口へ其の中五尺、仁王の顔を上に  
 二つ下に三つ合はせたばかり、目に余る大きさと成つて、カチ／＼  
 と齒の鳴る時、鰐かと思ふ大口を赫と開いて、上頤を嘗める  
 舌が赤い。

「騒ぐまい、時々ある……深山幽谷の変じや。少い人、誰の  
 顔も何の姿も、何う変るか知んねえだ！ 驚くと気が狂ふぞ、目

を塞いで踞れ、蹲め、突伏せ、目を塞げい。」

と老爺が呼はる。

雪枝はハツと身を伏せて、巖に吸込まれるかと呼吸を詰めたが、

胸の動悸が、持上げ揺上げ、山谷尽く震ふを覚えた。

殷々として雷が響く。

音の中に、

「切らう！」

と思切つた美女の、細い透る声音が、胸を抉つて耳を貫く。

「何を、切ればと言ふて早や今は……乞目！」

と誇立つた坊主の声が響いたが。

「やあ、勝つた。」

と叫んで、大音に呵々と笑ふと斉しく、空を指した指の尖へ、  
 法衣の裙が衝と上つた、黒雲の袖を捲いて、虚空へ電を曳いて  
 飛ぶ。

と風の余波に寂として、谷は瞬く間に、もとの陽炎。

が、日の光りやゝ弱く、衣のひたゝと身に着く処に、薄い影  
 が繊細くさして、散乱れた桜の花の、背に頸にかゝつたまゝ、  
 美女は、手を額に当てゝ、双六盤に差俯向いて、ものゝ惱  
 ましげな風情であつた。

「お姫様、」

と風に曲んだ烏帽子の紐を結直したが、老爺の声も力が無かつ  
 た。

「姫様。」

と膝行り寄つて、……雪枝が伸上るやうに膝を支いて、其の袖のあたりを拜んだ。

「頼まれたのに、濟みません。」

二筋三筋、後毛のふりかゝる顔を上げて、青年の顔を凝と視めて、睫毛の蔭に花の雫、衝と光つて、はらくと玉の涙を落す。

老爺も鼻を詰らせた。

雪枝は身を絞つて湧出るやうに、熱い、柔い涙が流れた。

「断念めます、……断念める……私はお浦を思切ります。何うぞ、其の代り、夢でも可い、夢なら何時までも覚めずに、私を此

処ゝに、貴女あなたの傍そばにお置き下ください。

あなた、生効いきがひのない私わたくし、罰ばちも当あたれ、死しんでも構かまはん。」

と前倒まへたふしに身みを投なげて、犇ひしと美女たをやめの手てに縫すがると、振ふりも払はらは

ず取添とりそへて、

「雪ゆき様さま。」

と優やさしく言いふ。

「え、」

いや、老爺ぢいも驚おどろくまいか。

獅子しの頭かしら

## 四十六

「お懐なつかしい。わたしわたしは貴下あなたが七歳ななつとの年紀とし、お傍そばに居ゐたお友達ともたち……過す  
 ぐせえんの縁えんで、恋こひしう成なり、いつまでもく、御一ごいつしよ所しよにと思おもふ心こころが、  
 われしわれしかたちかたちで、都みやこの如きさらぎ月に雪ゆきの降ふる晚ばん。其その雪ゆきは、故郷ふるさとか  
 ら私わたしを迎むかひに來きたものを、……歸かへる氣きは些ちつとも無なしに、貴下あなたの背せに凭より  
 かゝつて、二階にかいの部屋へやへ入はいりしなに、——貴下あなたのお父とうさま様さまが御覽ごらん  
 の目めには、……急きふに貴下あなたが大きおほく成なつて、年としごろも対つゐくらゐ、私わたし  
 と二人ふたりが夫婦ふうふのやうで熟じつと抱合だきあふ形かたちに見みえて、……怪あやしい女をんなと、

直ぐに其の場で、暖炉の灰にされましたが、戸の外からひた  
 く寄る……迎ひの雪に煙を包んで、月の下を、旧の此の故郷へ  
 帰りました。

非情のものが、恋をした咎を受けて、其の時から、唯一人で、  
 今までも双六巖の番をして、雨露に打たれても、……貴下の  
 事が忘れられぬ。

其の心が通ずるのか、貴下も年月経ち、日が経つても、私の  
 事をお忘れなさらず、昨日までも一昨日までも、思ひ詰めて居て  
 下さいましたが、奥様が出来たので、つひ余所事になさいまし  
 た。

それをお怨み申すのではない。嫉妬も猜みもせぬけれど、……

くちをし  
口惜い、其がために、敵から仕事の恥辱をお受け遊ばす。：

：雲、花片の数を算めば、思ふまゝの乞目が出て、双六に勝

てたのに、……唯一刻を争ふて、焦つてお悶へ遊ばすから、危

いとは思ひながら、我儘おつしやる可愛らしさに、謹慎もつ

ひ忘れ、心が乱れて、よもやに曳かされ、人間の采を使つたの

で、効なく敵に負けました。貴下も、悪い、私も悪い。

あゝ、花も恚う乱れぬうち、雲の中から奥様を助け出し、こゝ

へ並べて、蝶の蔭から、貴下の喜ぶ顔を見て、其の後で名告りた

うござんした。」

としめやかに朱唇が動く、と花が囁くやうなのに、恍惚して我

を忘れる雪枝より、飛驒の国の住人いつての外畏縮に及んで、

「南無三宝、あやまり果てた。」と烏帽子を搔いて猪頸に窘む。

「いえ、これも定まる約束。……しかし、尚ほ懐しい。奥様

を思切り、世を捨て、も私の傍に命をかけて居やうとおつしや

る。其のお言葉で奥様は救はれます……私も又命にかけても、

お望を遂げさせまじやう。

さあ、貴下、あらためて、奥様を償ふための、木彫の像をお

作り遊ばせ、勝れた、優つた、生命ある形代をお刻みなさい。

屹と敵に不足は言はせぬ。花片を雪にかへて、魔物の煩惱

のほむらを冷す、価値のあるのを、私が作らせませう、……お爺

さん、

と見返つて、

「あなた  
貴翁がお家重代いへじゆうだいの、其その小刀こがたなを、雪様ゆきさまにお貸かし下さいくだま  
し。」

「心得こころえました。」

と謹つしんで持もつて寄よる、小刀こがたなを受取うけとると、密そと取合とりあつた手てを放はなして、  
柔やはらかに、優やさしく、雪枝ゆきえの手ての甲かうの、堅かたく成なつて指ゆびも動うごかぬを、撫な  
でさすりつゝ、美女たをやめが其その掌てのひらに握にぎらせた。

四辺あたりを眺みまはし、衣紋えもんを直なほして、雪枝ゆきえに向むかつて、背後うしろ向むきに、双すご  
六巖くいはに、初はじめは唯腰とこしを掛かける姿すがたと見みえたが、褌つまを放はなして、盤ばんの  
上うへへ、葶鼓草すみだんぼの駒こまを除よけて、采さいを取とつて横よこに寐ねた。

陽炎かげらふが裳もすそに懸かつた。

美女たをやめの風采ありさまは、紫むらさきの格目こまめの上うへに、虹にじを枕まくらした風情ふぜいである。

雪枝は、倒れたと見て、つゝと起つた。

「……雪様、私の目を、私の眉を、私の額を、私の顔を、私の髪を、此のまゝに……其の小刀でお刻みなさいまし。」

「や、」と老爺が吃驚して、齒の抜けた声を出して、

「成程、お天守で不足は言ふまい、が、当事もない、滅

法界な。」

「雪様、痛くはない。血も出ぬ、眉を顰めるほどもない。突

て、斬つて、さあ、小刀で、此のなりに、……此のなりに、……」

「思切る、断念めた、女房なんぞ汚らはしい。貴女と一

所に置いて下さい、お爺さんも頼んで下さい、最う一度手を取

つて、」

「憂然と、どきくした小刀を投出す。」

「其のお心の失せない内、早く小刀をお取りなさいまし。……そんな事をおつしやつて、奥様は、今何うして居らつしやいます。」

それを聞くや、

「わつ、」と泣いて、雪枝は横様に縋りついた、胸を突伏せて、唯戦く……

徐ら、其の背を、姉がするやう搔撫でながら、

「恚う成るのが定まり事、……人の運は一つづつ、天の星に宿ると言ひます。其と同じに日本国中、何処ともなう、或年或月或日に、其の人が行逢はず、山にも野にも、水にも樹にも、

草くさにも石いしにも、橋はしにも家いへにも、前まへから定さだまる運うんがあつて、花はなならば、花はな、蝶てふならば、蝶てふ、雲くもならば、雲くもに、美うつくしくも凄すこくも寂さびしうも彩さいしき色しきされて描かいてある：手てを取とり合あふて睦むつみ合あふて、もの言いつて、二ふたり人居あられる身みではない。

唯ただ形かたちばかり、何いついづく時とき何いづ処ところでも、貴あなた方おもが思ときふ時とき、其そこ処ところに居ある、念ねんずる時とき直すぐに逢あへます、お呼よび遊あそばせば参まゐられます。

早はや、小こ刀がたなを……、小こ刀がたなを……、

「帰きみ命やうてうらい頂ちやうだい礼らい、南なむ無む不ふ可か思し議ぎ、帰きみ命やうてうらい頂ちやうだい礼らい、南なむ無む不ふ可か思し議ぎ。」  
 と唱となへながら、老ちい爺ひろが拾ひろつて渡わたした時とき、雪ゆきえ枝えは犇ひしと小こ刀がたなを取とつた。  
 「一いつ刀たう一いつ拜ぱい、拜をがめ、頼たのめ、念ねんじて、念ねんじて、」  
 と励はげまし教をしうるが如ごとくに老ちい爺ひろが言いふ。

「姫、姫、」

と勇ましく、

「疵を附けたら、私も死ぬ。」

と熟と見て、小刀を取直した。

美女の姿ありのまゝ、木彫の像と成つた時、膝に取つて、雪

枝は犇と抱締めて離し得なんだ。

老爺が其の手を曳いて起こして、さて、かはる／＼負ひもし、

抱きもして、嶮岨難処を引返す。と二時が程に着いた双

六谷を、城址までに、一夜、山中に野宿した。

其の夜の星の美しさ。

中にも山の端に近いのが、美女の像の額を飾つて輝いたので

ある。

あけのあさ、朝、棟の雲の切れ間を仰いで、勇ましく天守に昇ると、  
 四階目を上切つた、五階の口で、フト暗い中に、金色の光を  
 放つ、爛々たる眼を見た、

一目見て、

「やあ、祖父殿が、」

と老爺が叫ぶ、……其なるは、黄金の鯨の頭に似た、一個青面  
 の獅子の頭、活けるが如き木彫の名作。櫓を圧して、のつしと  
 あり。角も、牙も、双六谷の黒雲の中に見た、其であつた。

……

祖父の作に、久しぶりの話がある、と美女の像を受取つて、

老爺ぢいは天守てんしゆに胡座あぐらして後あとに残のこつた。時ときに、祖父おほぢが我わがまゝの佗わびだと言いつて、麻袋あさぶくろを、烏帽子えぼうし入れたまゝ雪枝ゆきえに譲ゆづつた。さて、温泉宿ゆのやどに帰かへつたが、人々ひと々は、雪枝ゆきえの顔かほの色いろの清々すがくしいのを視ながめて、はじめなめて渡わたした一通いつつうの書信しよしんがある。

途とちゆう中ちゆうより、としてお浦うらの名なで、二人ふたりが結婚けつこんを為しない前まへから、契ちぎりを交かはした少年せうねんの学生がくせいが一人ひとりある。此この度たびの密月みつぎの旅たびの第一だいいち夜やから、附絡つきまとふて、隣となりの部屋へやに何時いつも宿やどる……其それさへも恐おそろしいのに、つひ言葉ことばのはづみから、双六谷すごろくだにに分入わけいつて、二世にせの契ちぎりを賭かけやうとする、聞きけば名高なだかい神秘しんぴの山奥やまおく、逆とても罪つみ深みふかに堪たへないため、諸もろともに身みを隠かくす、とあつた。

渠かれは神色しんしよく自若じやくとした。

あはれ、神は、かみ香村雪枝を守らせ給ふ！かむらゆきえ まも たま

然うで無いと、さ慙くまでに恋慕つた女、こひした をんな気が狂はずには居なきくる む

かつたのである。

東京とうきやうに帰つて後、呼ばば応へて頭はるゝ、のち よ こた あら双六谷の美すごろくだに たをや

女の像を、め ざう唯目を開いて見るやうに、たゞめ ひらすらくくと刻み得た。麻あさ

袋ふくろの鑿小刀は、のみがたな如意自在に働く。によいじざい はたら

彫像てうざうの成つた時、な ととき北の一天きた いってん、には俄かに黒雲を捲起こして月くろくも まきお

夜ながら霰を飛ばした。きよ あられ と

年経つて、とした ふたゝ再び双六の温泉すごろく をんせんに遊んだ時、あそ ととき最う老爺は居なかちい む

つた。が、しろあと城址の濠には船があつて、ほり ふね鷺ではない、さぎ老爺の姿が、ぢい すがた

木彫きぼりに成つて立つのを見て、な た渠は蘆間に手を支えて、かれ あしま てやがて天つか てんし

守ゆをはい拝した。

置ちへすつともど戻る……伝つたへ聞きノ諸ア垂の船ふねのごと如きものであらう。

船ふねにの乗れば、すらくと漕こいで出て、焼やけないど処ころか、もとの位。

# 青空文庫情報

底本：「新編 泉鏡花集 第八卷」岩波書店

2004（平成16）年1月7日第1刷発行

底本の親本：「神鑿」文泉堂書房

1909（明治42）年9月16日

初出：「神鑿」文泉堂書房

1909（明治42）年9月16日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※「をんせん」と「おんせん」、「城趾」と「城址」、「鎗」や

り《ケ一嶽《だけ》》と「槍《やり》《ケ一嶽《だけ》》の混在は底本の通りです。

※「魚」に対するルビの「うを」と「いを」、「水底」に対するルビの「みずそこ」と「みづそこ」、「灰」に対するルビの「はひ」と「はい」、「烏帽子」に対するルビの「えぼうし」と「えぼうし」の混在は、底本通りです。

※表題は底本では、「神鑿《しんさく》》となつています。

※初出時の署名は「鏡花小史」です。

入力：砂場清隆

校正：門田裕志

2007年8月12日作成

2016年2月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 神鑿

泉鏡太郎

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>